NO. 41
SPRING
1973

英語展望

ELEC BULLETIN

国際展望
浦松佐美太郎・海江田進・西山千・安井稔・猿谷要
「私の英語歴」　中村誠太郎
"Asia and the English Language"
「現代英語の諸相」

「英米音の表記法」
「ことばとコミュニケイション」
「日・英慣用表現の比較(4)」
「世界における外国語教育(4)」
"Silence Is Not Always Golden(2)"

ENGLISH LANGUAGE EDUCATION COUNCIL

英語展望

No. 41
SPRING
1973

ELEC BULLETIN

Edited by Fumio Nakajima
The English Language Education Council, Inc., Tokyo

【国際展望】
英語の奥行き……浦松佐美太郎 2
英語の国際化がもたらしたもの……海江田 進 4
英語以外の国際理解力……西山 干 6
英語はどこまでわからないか……安井 稔 8
鎖国後遺症雑感……猿谷 要 10
私の英語歴……中村 誠太郎 12
Asia and the English Language……James L. Stewart 14
現代英語の諸相……村田 聖明 23
英米音の表記法……中島 文雄 30
ことばとコミュニケイション……國弘 正雄 38
日・英慣用表現の比較(4)……長谷川 潔 50
世界における外国語教育(4)……星山 三郎 55
Silence Is Not Always Golden (2) ……David Hale 60
【新刊書評】『誤解と理解』……國弘 正雄 66
『日本人と英米人』……長谷川 潔 68
新刊紹介……70
展望通信……72

表紙デザイン・カット
太田英男

英語の奥行き

URAMATSU SAMITARO
浦松　佐美太郎

言葉というと，このごろはすぐにコンミュニケーションということが問題にされている．ここにわざわざカタカナで，コンミュニケーションと書いたのは，これもまたカタカナ英語の一種に違いないと思うからである．放送を聞いても，新聞を読んでも，カタカナ英語の乱用はひどいものだと，驚くのほかはない．放送のなかでは，解説や学者たちの座談や，殊に政治家の討論のなかに，それがはなはだしいようである．

このコンミュニケーションというカタカナ英語にしても，それが何を意味するのか，そのことにはっきりした約束がなく，勝手気ままに使われている．この勝手気ままに使うことができるというのが，カタカナ英語の特長で，使っている人たち同士が，解ったような解らないようなあいまいのうちに，問題がかたづいたような気になっているらしい．

佐藤栄作さんが首相になったとき，自分はソーシアル・デベロップメントを政策の柱にしていくのだと声明した．そしてそのことを日本語で，社会開発とも言っていた．この日本語も，そしてカタカナ英語も，なんのことか意味不明確であった．だが新聞も放送も，野党も，それで十分に意味が解っているらしいような態度で，社会開発がどうの，ソーシアル・デベロップメントがこうのと議論していた．

しかしこのソーシアルというカタカナ英語が，何を意味するのか，そのことは少しも疑われもしなければ，問題にもされなかった．解ったような解らないような，カタカナ英語独特の魔力を発揮して，国の大事な基本政策が，うやむやに通り過ごされてしまったわけである．だから佐藤さんが公害と環境汚染を残して退陣したときも，新聞や放送は，佐藤さんの基本政策のはずであったソーシアル・デベロップメントの成果については，なんの評価もしていなかった．

カタカナ英語は，このようにまことに奇妙な言葉なのだが，それにも拘わらずカタカナ英語は，ますますその数を増し，いよいよ各方面に広がっているようである．ということは，人びとが解ったような解らないことで，さまざまなことを通り過ごして，その場その場をごまかしているのだということになりはしないか．

これでは言葉がコンミュニケーションのためにあるのだと言ってみても，また言葉が文法の上から正しく使われているかとか，敬語の使い方がどうだとか論じてみても，なんの意味ももたないことになるであろう．それよりも言葉というものが，コンミュニケーションというカタカナ英語のために，存在するのだという考え方そのものに，大きな疑問がありはしないか．

いま仮にコンミュニケーションというカタカナ英語を，伝達という意味に限定してみても，言葉が伝達のためにあるのだという考え方は，どうもおかしいようである．確かに言葉は，自分の思うことを人に伝えるという機能をもっている．だがそれは言葉の機能であって，言葉の本質そのものではあるまい．そもそもの言葉の起こりは，事物の認識ということから始まったと考えるのが本筋であろう．事物を認識し，あれとこれとを区別するために生まれたのが，言葉であるとしたら，そしてその言葉によってものを考えるという技術を作り出したのだとしたら，言葉の意味を正確にするということが，どれほど大切なことであるかが，すぐにも理解されようと言うものである．

意味の明確な言葉が正しく組み合わせられることによって，正しくものを考えることができるのだとしたら，言葉のもつ最も大切なことは，ものを考えるためにあるのだということになる．そのことを忘れて，コンミュニケーションというカタカナ英語で，言葉の重要性を論じてみてもむだである．このごろの広告文に使われている言葉を見れば，そのことはすぐ理解してもらえるのではないか．

意味の明確な言葉を正しく組み合わせるといったが，その組み合わせ方を研究するのが，学問の一分野である論理学であり，論理学が哲学の分野にまではいりこんでいるのは，言葉がものを考えるためにあることの証左であろう．私は学者の書かれた文章を読んでいて，むつかしい日本語が，むつかしい形で並び，どうしても意味が

つかめないときには，それを英語に並べ替えてみることにしている．それでも意味が全く通じないときには，それはこの学者の考え方が混乱しているか，あるいは未熟であって，私の理解力が足らないわけではないのだと判断する．なぜなら人間がものを考えるのは，英語でも日本語でも変わりはないと思うからである．

そこで考えるのだが，私たちが英語でものを言おうとするとき，心のなかで私たちは，英語で考えているのだろうか，それとも日本語で考えているのだろうかということである．おそらく大部分の人たちは，日本語で考えているのに違いなかろう．そうだとすれば，まず日本語を簡潔で，正確なものにして考えなければならないということになる．だらしのない日本語でものを考えて，それを英語にしようとしても，どうなるというものでもあるまい．だから変な言い方ではあるが，英語を習うには，まず自分でものを考えるときの日本語を明確にするということから始めなければならない．そこのところが，今日の英語教育では軽視されているのではないだろうか．

よく考えてみると，ものを考えるための言葉というものは，それぞれの専門分野での特殊の言葉を除けば，そんなに数多いものではないのだが，それを忘れて不必要な，それだからこそ余計にあいまいな言葉ばかりがふえて，そのような言葉を使ってものを考える癖がついているために，英語でものを言うことをむつかしくしているのだと思われる．

言葉が複雑で難解だというのは，ものを考える言葉よりも，感情や情緒を現わす言葉なのである．言葉が並んで文章となっても，理解が困難なのは，こうした情緒や感情を表現している場合であるといっていい．とすれば最も困難な英語の文章は小説であるということになるだろう．作家は複雑な情緒や感情を表現するために，言葉の配列に極度の技巧を凝らしている．こうした文章で英語を教えようとしている日本の英語教育のあり方に，私は大きな疑問をもたないわけにはいかない．

日本語で書かれた小説にしても，これを英訳しようとしたら不可能だというのが，一番適切なのではないか．それを逆にして考えてみたらすぐ気づくはずであり，私たちは小説に書かれているような文章の形で，ものを考えてはいないはずである．小説の作家たちと一緒に酒を飲んでいても，彼らは小説に使っているような文章の形でものを言ってはいない．

それなのに私などのところへも送って来る英語の教科書の目録を見ていると，いわゆる英文学の有名作品の抜萃が，ずらりと並んでいるのに驚かされる．これは英語を学校で教えていられる人たちが，英文学部の出身であるためなのだろうかとも思われるが，もし英文学の有名作品だから模範的な英文の書き方がそこに示されているのだと，解釈されているのだとしたら，これは英語教育として困ったことではないかと，私には考えられてならない．

もし英文学の作品のなかから，教材を選びたいと思われるのであったら，なぜ小説以外の作品のなかから選択されないのか．どうも日本では，文学という言葉が，詩と小説に，殊に小説に限定されてしまっているようで，日本文学全集などといって，小説ばかりが集められている現状が，英文学にも反映してしまっているのではないだろうかと察せられる．そうだとすると，英文学という言葉の意味が，不正確になったまま，英文学を専攻された人たちが，その不正確さでものを考えられているのだということになりはしないか．

正確で立派な英語で書かれた文章と言えば，それらはむしろ小説以外の文学の分野の作品に見られるのだと言ってもよかろう．20世紀にはいってからでも，英国史について書かれた本や，伝記などに，読んでいても文章の見事さに感嘆させられるような作品が幾つも世に送られている．旅行記や，回顧録や，政治の随想などにも，素晴しい英文の作品が数多くある．そしてこれらの作品は，英国では文学の作品としていずれも高く評価されているものばかりである．

なぜこうした英語の作品が教科書に使われないのであろうか．私はここに日本の英語教育の落ちこんでいる穴を見るような気がしてならない．英語によってものを考えることを習わせるというのであったら，私は歴史の本が，最も適切なのではないかと考える．ということは，英国人のものの考え方の背後には，歴史が大きくものを言っているからである．

私たちは日本の歴史に無知であるとしても，生活の上で，ものの考え方の上で，歴史の方から私たちに大きな力で作用しているのだが，英語ということになると，英語でものを考えてみようとしても，英国の歴史に無知であるとしたら，言葉の背後にあるものになんの手がかりも持たないことになる．その意味からも，少なくとも最近の歴史の一部でもいいから，英語教育に活用することが必要なのではないかと思われる．言葉というものは，なんでもないことのように思われながら，それがかかわりをもつ背景の，広くて深いものであるということを理解して頂きたい．

（評論家）

英語の国際化がもたらしたもの

KAIEDA SUSUMU
海江田 進

読者諸君と向き合って，直接話しているつもりで，この文を「……です」というスタイルで書きます．

大きいトピックを取り上げます．私の話しは常識論ですから，各方面の専門家が聞いたら，いろいろの誤りを発見するかもしれません．

また，筆者は英語の教師です．長いあいだ（何十年ものあいだ）英語を教えています．この文を読んでおられるかたも，多くは教室で英語を教えておられるかたがたでしょう．

したがって，筆者が意識してもしなくても身びいき，英語びいきの論をたてるでしょう．できるだけ「客観的」に話しをするように心がけますが，結局，身びいきの話しをするかもしれません．もし英語教育界以外のかたが，たまたまこの文を読まれたとしたら，「私はそう思わない」と言うかもしれません．

まあ，こういったただし書きをつけて，私はこの文を書きます．さて，トピックの「英語の国際化がもたらしたもの」ですが，英語が今日の世界にもたらしたものは，実際的・具体的方面では一つの共通語の提供，もっと大きい深い方面では民族近代化の道具です．

国際共通語としては，英語よりもっと理想的なものがありましょう．私たち日本人が英語を使う場合，英語国民は母国語を使ってゆうゆうと話し（あるいは書き読み），私たちは一般にとつとつと外国語を話すのですから，著しいハンディキャップを受け，自尊心を傷つけ，大きな不利益を蒙ります．私たちが外国語を使うほねおりというものは，一般に非常に大きなものです．

たとえば，エスペラントを諸国の学校で教え，これを世界的なスケールで用いさせるとすれば，各国民が類似した条件で，国際補助語を使うこととなりますから，横文字を使うという不公平さは残りますが，だいたい平等になります．

しかし，エスペラントが創造されてから長い時間がたっていますが，この人造語は現在あまり大範囲に使われていません．エスペラントを学校で教えている国は少ないでしょう．そして，よかれあしかれ，レディメードの英語が現実に国際語の役割を果たしています．

筆者は一昨年東アフリカに行きました．エジプトから南のほうへ下って行ったのです．東アフリカは，かつて英国の植民地・勢力範囲だった地域で，英語はもちろん広い範囲に使われていました．

エチオピアで私はメルカコントレという石器時代遺跡を見に行きました．エチオピアに行った人でも，私のような物好きな人間でないかぎり，こんな所に行く人はないでしょう．自己宣伝をしますと，私は昔から考古学が好きなのです．

遺跡に私を乗せて行ってくれた車の運転手（黒人）は英語を話しました．車が遺跡に着くと，付近の民家からそまつな服装をした土地の人が出てきました．彼は土地のことばで話しました．（イヤ，英語は世界語だと言っても，大都会の一部分や，細長い観光ルート以外の深い奥地ではまったく通じないのです．そういう意味では，英語はけっして世界語ではありません．）

そこで筆者は英語で話し，英語と土地のことばと両方を話せる黒人運転手が通訳をやり，エチオピア人が土地のことばで話す，という会話をしました．日本の教室で習った英語がアフリカ大陸の奥で役に立つ，英語というものは便利なものだ，と私は思いました．英語が話せなければ，まあ，エチオピアの石器時代のことはわからないのです．

これは一つのエピソードにすぎませんが，こういったことが今日世界のすみずみで行なわれているのです．

さて，いまから数百年まえに，英国の海外進出がはじまりました．英国人はアフリカ大陸の西岸に沿って南下し，大陸の南端を回って，また北上し，インド方面に向かって進んで行きました．それからずっとあと，スエズ運河が開さくされますと，そこをパスして，インドに往復し，船で安い工業製品を輸出し，工業原料や食料品を輸入しました．

もちろんヨーロッパの他の国々もアフリカ・アジア，あるいは太平洋の島々に進出しましたが，一番大範囲に活動したのは英国でした．そして英国人は，昔ヨーロッ

パの一角で，きわめて少数の人々に使われていたことば英語を，低廉な工業製品といっしょに，新たに彼らの勢力下にはいった国々へと持っ行き，これを広い範囲に通用させました．

英国人がアフリカやアジアの言語を学んだというケースもあるでしょう．しかし全体として，つまり一般傾向として，彼らは後進民族に対する勝利者・征服者として，被征服者のことばを学ぶよりむしろ彼らのことばを相手に学ばせました．

東アフリカ，インドを中心としたアジア大陸の比較的海岸に近い南部一帯，太平洋の島々などで，イギリス英語が通用するのは，昔英国人が，これらの地域で活動したなごりです．

英国とともに重要な英語国である米国は，前世紀末の米西戦争の時代から孤立主義を一擲して海外へ進出してきました．2回の世界大戦ののち米国人の発言力は，きわめて大きいものとなり，直接間接米国に依存した国々は英語（米語）を種々の形で採用しなければならなくなりました．

日本やタイ国で英語を採るか，米語を採るかというような問題が起こるのは，英米2国の政治的・経済的力量のバランスと関係があるのです．

英国の海外進出は，アフリカ・アジアの民族に多くの不利益をもたらしました．英国は，いわゆる本国，アジア・アフリカ諸国は植民地，工業原料・食料供給地，本国商品販路，英国人，特にその貴族・ブルジョアは支配者・所有階級，植民地大衆は勤労者・無産者なのですから，後者はみじめな状態に陥りました．その状態は，たとえばインドの歴史をひもとけば，すぐわかることでしょう．

英国ブルジョアジーの主張は一方交通的に植民地に進入し，植民地の発言は一顧も与えられません．当然本国のことばである英語は，一方的に植民地に流入し，いわば植民地のことばをカバーしました．

植民地の上・中層階級の人々は，多少日の当たる所に出るためには，英語を学び，本国の支配者とコネクションを持たなければなりませんでした．大ざっぱに言えば，これが昔の本国・植民地の関係であったでしょう．

アジア・アフリカの後進民族は，異国の支配者の進出によって，不利な状態に置かれましたが，先進国家の文明・文化の進出は，後進国を啓蒙し，これを目ざめさせ，その歴史のテンポを促す一面も持っていました．その啓蒙覚醒の手段になったのが，近代文化のにない手である（あるいは，にない手の一つである）英語でした．

日本の場合を考えてみますと，日本はいわゆる極東にあって，ヨーロッパ資本主義諸国から最も遠くにあり，米国の影響を受けることも少なく，徳川幕府は日本の門戸を閉ざしたまま，封建体制を保つことができました．

しかし幕末に外国が開港を要求したとき，その要求に抗しきれず開港しましたが，攘夷ということをいわばさか手にとった武士たちの倒幕運動のために，幕府は倒壊しました．そして近代化の道が日本民族のために開かれました．

それから欧化と保守の対立がはじまるのですが，欧化派の森有礼のごときは（のちにナショナリストになりましたが），駐米公使として，ワシントンに赴任したとき，『センチュリ大辞典』の著者として名高いW. D. ホイットニィに手紙を出し，われわれ日本人が進歩し近代化して行きたいと望むなら，ヨーロッパ系の言語（森が意味したのは英語でしょう）を国語として採用しなければならないと思う，と述べ，ホイットニィ教授から，日本のようにすぐれた文化をもった国民が，英語を新しい国語として採用する必要はないと，たしなめられる始末でした．

しかし，英語，あるいは英語で書かれた書物が，日本人の考え方を変えるのに貢献した力は大きかった．たとえば Samuel Smiles の *Self-Help* ですが，この本は中村正直によって日本語に訳され，（翻訳という形でではありましたが）『西国立志編』という名で，明治時代の日本の青年に深い影響を与え，彼らの古い思想を捨てさせ，新しい理想を打ちたてさせるのに役だち，明治の聖書と呼ばれたほどでした．

さて，世界の国々ですが，そこには私たちが想像することもできないほど，いろいろの民族がいるのです．アフリカに短期間行きましたときも，実にいろいろの人がいるものだという印象を私は受けないわけにはいきませんでした．

私たちは，いわゆる文明国のまっただ中にいますから，開けない人々（失礼な言い方ですが）の状態をハッキリ想像することはできませんが，世界には千差万別の民族がいるのです．そして，多くの人々は，近代以前の stage にとどまっているのです．

英語は，そういう人々を近代化する利器の一つだと思います．英語には種々の面がありますが，英語はそういう光をもたらす面も持っていると私は思います．

大きな話しをしましたが……

拙文を書くにあたり，筆者の前同僚東郷正延・土井久弥・松山納三教授にお話をうかがいました．三氏に感謝します．

Jan. 10, 1973.

（明星大学教授）

英語力以外の国際理解力

NISHIYAMA SEN
西 山 千

英語の表現力と，表現しようとする事実やその周囲の状況は深い相関関係をもっていて，表現することばが雄弁であっても，その背景の事実が好ましくなかったら，かえって逆効果をもたらすかもしれない．これが国際社会のなかで極めて重要な問題であるように思われる．

いうまでもなく英語の表現力を豊かにすることは，国際社会で活躍するために必要である．表現力の豊富な人は，とくに西洋社会では概ね印象がよい．もちろん相手を口車に乗せてだます，という悪質な者も表現力の豊かさを利用するが，そういう極端な例を除けば概して表現の能力は国際社会でプラスである．「不言実行」型の人も好感を与えるだろうが，言語というコミュニケーションの重要な道具を用いる国際社会の現代では，「有言実行」が大切である．そういう意味で，英語表現力の豊かさは，確かに必要な能力である．

しかし次のような話がある．アメリカと日本の貿易収支の不均衡を問題にしているアメリカの企業や労働組合が日本製品に抵抗する雰囲気をつくり始めたので，日本のある商社がアメリカの有力な新聞に大きな広告を出した．その広告は，「わが社はお国（アメリカ）の商品を大量に輸出していますよ」という意味の宣伝文句であった．つまり，こういう日本の貿易商社がアメリカの製品を輸出するために，大いに貢献しているということを宣伝することによって，貿易不均衡の是正に役立つ実績をアメリカ人に知ってもらおうというねらいであった．

広告のアイデアも結構であったし，事実この日本商社は相当大きく貢献しているのであった．恐らく広告の文章も専門家に書かせたのだろう．英語の表現はアメリカ人らしい文章であった．

ところが，この広告を見たあるアメリカ人は意外に反感をもった．彼は次のように反応したのである．

「日本商社は金もうけのために，ばりばり商売をやる．アメリカに日本商品を売りつけ，日本にアメリカの商品を売りつけて，両方で金をもうけている．また他の国ぐにの商品も世界中に動かして，金もうけに夢中である．そんなエコノミック・アニマルが『アメリカの商品を輸出している』とわざわざ教えてくれなくても結構だ．百も承知のことだ．おまけに，こういうエコノミック・アニマルの日本人がわが国の経済にこんなにまで食い込んでいるのか，という印象まで与える広告だ．貿易の不均衡によって一方的に金をもうけているようなイメージが仮に誤ったイメージであっても，それを利害が犯されていると思う一部のアメリカ人が抱いている以上，こんな広告を読んだら，かえってこの日本の会社に反感をもつだろう．」

このアメリカ人のことばは，表現とその周囲の状況との不一致を指摘している．つまり，広告を読んでもらう相手の心理状態や，そういう人たちのもつ対日イメージなどの問題を十分考慮した表現でなかった．表現そのものは立派な宣伝用語ともいえるだろう．しかし環境がよくなかった．

ところが，この同じ環境のなかで表現力をプラスに生かす方法はないだろうか，と考えるのも当然だろう．不幸にしてこの商社の表現は逆効果をもたらした．少なくとも，一部のアメリカ人の間では逆効果であった．あるいは他のアメリカ人たちには，それほど悪い印象を与えなかったかもしれない．自分に直接利害の対立を感じないアメリカ人や，比較的に貿易問題に無関心なアメリカ人なら，このような広告文を見ても大して反応しないだろう．しかし悪感情を改善しようとした肝心の対象となるべきアメリカ人が，以上のような反応を示したのでは，表現力がどんなに豊かであっても役に立たない．そういう場合にどうしたらよいのだろうか．

この問題に対しては，時と場合によって対処する方法はいろいろ異なるだろう．この批評をいった同じアメリカ人は次の例を対照的なものとして話してくれた．

「別の日本の会社は面白い広告を出したことがある．その会社は製品をアメリカで売っているが，貿易商社ではなかった．それがアメリカの大きな新聞や雑誌に『わが社はアメリカ製品を日本で売りたい』という意味の広告を出した．趣旨は前の例，つまり日米の貿易不均衡の是正を中心テーマにする，ということと同じであった．

しかしアプローチが違う．こちらの方が好感を与える．今まで日本製品をアメリカに売っていた会社が，今度は逆にアメリカの製品を日本に売り始めるとは，直接貿易不均衡の是正にのり出したのか，という印象であった．」

もちろんこの二つの例の会社は，企業の性質が異なるから，一方の会社は「日本で売りたい」といって事実その通りの意図を表現できても，他の方は貿易商社としてあまりにも当り前のことであって，単純に「日本に売りたい」とはいえないだろう．そういう点に苦心したのだろう．明らかにこういう趣旨の広告のためには，貿易商社は不利な立場にあるといえよう．

実際アメリカの商品を大量に日本に売り込み，日米貿易の不均衡の是正に貢献している事実が裏づけにあっても，それを一般広告でどの程度宣伝すべきかは問題かもしれない．「貿易商社なら当然だ．自慢のことではない．」とひねくれた反応になるかもしれない．

相手がどういう気持を抱いているか，なにを考えているかは，当然その相手へのメッセージの受けとり方を左右する．またメッセージを与える側がだれであるかによっても，印象が大きく変わる．

よく国際コミュニケーションの問題に習慣や国民性の相違が中心課題になる．相手国民の文化，習慣等を考慮しないと，こちらで意図している表現や行動がとんでもない誤解を招くことがある．日本人が礼儀正しい行動やことば使いと思っていることが相手国民には無礼と受けとれることもある．冬に外套を訪問先で相手に対面するときに脱ぐか脱がないかは，日本と西洋では逆である．西洋では主人が「どうぞ外套を脱ぎなさい」というまでは脱がないのが礼義である．こういう簡単なことでも誤解のもとになる．

しかし国民性の相違，言語の意味の相違，習慣の食い違いなどは，比較的長い年月の間一定しているものであるから，それを知っていさえすれば問題を避けることができる．ところが相手の考えや気持ちというものは，時時刻刻変化するものである．そういうものに対して事前に問題を避ける方程式的な方法はない．時と場合によって周囲の条件をできるだけ広く詳細に考慮し，それに比較的一定している習慣，国民性なども考え合わせて判断しなければならない．容易なことではない．

英語能力を十分身につけることは必要であるが，それだけでは国際社会で通用しないかもしれない．もちろん英語力を備えることは国際化の重要な第一歩である．しかし，それからさらに相手国民の感情をなかば直感的に感じとるまで理解するようになるまでには，大変な努力が必要だろう．相手国に滞在して，その国民と生活を共にする必要もある．また日常の出来事とそれに対する国民の反応を認識することも大切である．

よく海外に滞在する日本人は，仕事だけ現地人と一緒にやって，後はほとんど日本人同士で生活しているとのことである．ある外国では日本大使館の日本人外交官がその国のゴルフ・クラブに入会しているが，現地人の会員と一緒にゴルフをやることがめったにないそうである．他の国の大使館員もそのクラブに入っているが，時折そういう外交官とゴルフをやることはあるそうだ．しかし，時にはこのクラブで，日本人だけのトーナメントをやった．それには現地国民の会員も他国の外交官会員も参加できなかったとのことである．よくもクラブの役員がこんな一方的な日本人のやり方を許したと思うが，こういう態度では国際社会人となるべき外交官にまで失望せざるを得ない．また別の国のゴルフ・クラブでは日本人の入会を断わっているそうである．なにも人種差別のためではない．理由は，日本人は他の日本人と組んでゴルフをやるが，現地国民のクラブ会員と交わってくれないから，入会してもらう目的がないからであると，新聞が報道していた．

恐らくこういう在外日本人も，英語能力は備えているだろう．ところが，このような生活態度では，どんなに長く外国に住んでいても，相手の立場や感情を認識することはできない．しかも不幸にして，そういう自らを現地人から隔離している日本人が会社や組織の幹部級によくある．そして，そういう幹部が，自分の主観に基づいて方針や政策を決定する．

だから意図に反した結果が起る．タイ国学生の反日本製品デモや，最近アメリカの一部に現われている対日悪感情も，単なる経済的な理由だけではなさそうである．相手の状況を十分考慮しない行動やコミュニケーションも，こういう不幸な雰囲気を助長しているだろう．

英語力を向上させる訓練と並行して，国際人としての態度の養成に力を入れたらどうだろうか．相手を理解しようとせず，意外と思う反応に対して，自己流の判断を下したり相手の心を見ぬいたと思うようなうぬぼれ，（時どき新聞の論説などで外国を批判しているときに，このうぬぼれがありそうだ）そういう態度を反省して，まじめに原因を研究しようとする態度，こういうものも英語教育とともに行なわれないものだろうか．

（国際コミュニケーター）

☆　☆　☆

英語はどこまでわからないか

YASUI MINORU
安 井 稔

ことばを用いているとき，われわれの脳細胞の一つ一つが，単独で，あるいは，かたまりとなって，どのような変化をするものであるかということは，少しもまだわかっていないようである．外国語の流れを耳にしているような場合は，わからなさの度合いが，もう一段上のものであると考えられる．翻訳という作業を伴うか伴わないかということとは別に，たとえば，日本語と英語とが，ごちゃまぜ式に共存しているのか，まったく別々に収蔵されているのか問題となってくるし，さらに，ごちゃまぜ方式と別個独立方式とは，外国語習得の環境や条件によって決まってくるものなのか，個人的な差であるのか，また，そのどちらかであるにしても，特定の経験内容と，それに結びつく日・英両言語表現との連合方式は，脳細胞を基準にして考えるとどういうことになっているのか，等々のようなことが問題となってくるからである．

もうわかっていてもよさそうな気もするけれども，みんなわからないことのようである．翻訳という作業は，意識的に行なわれる場合も，ほとんど意識に上らない場合もあるが，いずれにしても，日常きわめて卑近な現象であるにもかかわらず，いくら意識的な内省を試みても，その際における精神の働き方というようなことは，少しもわからないようである．にもかかわらず，われわれは，英語がわかるとか，わからないとか，もっとわかるようにならなければならないとかいうようなことを口にする．また，こういうことを口にする際，いつわりや誇張があると思っている人もほとんどいないであろう．

もちろん，外国語および外国語の世界は，究極的にはいっさい不可知であり，翻訳ということも，厳密な意味においては，いっさい不可能である，という論をなすこともできないわけではない．しかしながら，いっさいを否定するのは，かりにそれが正しいとしても，問題の解明に役だたないという点では，いっさいを肯定するのと同じであり，どのみち，あまり建設的でも有益でもないということになるであろう．また，印象的に言うならば，こういういわば完全主義的懐疑論は，けっきょく，正しくないことになるであろうと，わたくし自身，思っている．

相手のことばを，その流れに従って理解しているというとき，脳細胞の動きがいっさいわからないからといって，たとえば，英語がわかるという現象に，いっさいメスを入れることができないということになるわけではない．問題はきわめて多岐にわたるが，たとえば，英語がわかるというのは，どのようにわかることをいうのかということから考えていってみることにしよう．これも，実は，一筋なわではどうにもならない問題である．が，ここでは，まず便宜的に，英語を母国語としている人々と同じようにわかることであるとしておくことにしよう．実際は，英語を母国語としている人々という表現も，ひどくはっきりしないところのあるもので，「教養のある」というような形容詞をいくつか付けてみてもよいが，それでも大胆な一般化をしていることには変わりがなく，ここでは立ち入らないでおくことにする．

英語がわかるというとき，英語の何がわかるのであるかというと，それは「意味」である．英語の何の意味がわかるのであるかというと，それは英語の「音声」形式の意味がわかるのである．だから，英語がわかるというのは，英語の「音声」と「意味」との組み合わせを一定の方式で作ることができるということである．一定の「音声」と，一定の「意味」との組み合わせを作る方式というのは，まさに変形生成文法でいう「文法」のことである．それなら，英語がわかるためには，変形文法を承知していさえすればよいことになるであろうか．けっしてそうではない．

確かに，英語の変形文法は，適格な，音声と意味との無限の組み合わせを生成することを意図しているものである．その限りでは，標準理論も，生成意味論も格文法も，足並みは乱れていない．けれども，それらは，理想上の話者・聴者がもっている文生成能力を抽象的な形で規定しようとしているにすぎない．適格な文の生成がいかにして可能であるかということは教えてくれるけれども，どういう場合に，どの文が用いられるかということ

を教えてくれるものではない.

他方，英語がわかるとか，思わぬ誤解を生じたというようなことは，典型的に，具体的実際的な場面で生ずる事がらである．英語の表現は概して，いわば直線的で，日本語の，たとえば,「何もありませんが，どうぞ召し上がってください」式の曲線的表現は少ないといわれる．それに違いはないけれども，英・米人も人間であり，遠回しに言うのが習いになっていたり，人前では言うをはばかる表現というものは，当然，存在する．as a matter of fact は「事実は，実は，実際」などと訳されることが多いけれども，E. Partridge, *A Dictionary of Clichés* (1940, 1972) によれば「通例，うその前触れ——でなければ，よくてもせいぜい言いのがれ」(Usually the prelude to a lie—or, at best, an evasion) という付記がある．相手が as a matter of fact と言い出したら，こちらは「きなすったね」と，心の構えを必要とするということである．in fact も，「実際」という訳が与えられていることが多いが，「実際」というのは，そもそも，どういうことなのか．わたくし自身は，in fact を「実際」と訳すことに，しばしば，ある種のためらいを感じてきている．「見かけとは異なって，事実は」ということなのか．確かにそういう場合もある．しかし，もっと多くの場合，in fact は，前言を訂正し，「むしろそうではなくて」,「もう少し正確に言うと」などの意味で用いられているのではないかと思われる．

もっと具体的な場面に密着した例を一つだけあげることにしよう．わたくしは，1963年，アメリカに留学中，ほんとうはカーブであるのに直球のように見える危険な表現の一つとして，Would you like to stay for dinner？ という言い方があることを教えられた．どこかの家庭に招かれて，夕方近く，そこのご主人からこう言われたら，「いえ，そろそろおいとまいたします.」に当たる英語をもごもご言うのが，通例，正しい応答のしかたであるというのである.「晩ご飯上がってらっしゃいますか．というのは,「そろそろお帰りの時間ではありませんか.」という暗示なのである．ミシガン大学の英語の先生で，われわれの英語能力が低くはないことをすでに承知の人が，雑談のおりに教えてくれたものである．

こういうふうに見てくると，英語をよく理解するとか，思わぬ誤解をするとか与えるとかいう言い方がなされるとき，それらは，典型的に，いわば，英語の表現そのものというよりは，それが用いられる際の場面とか，背景といったものにかかわっているということが明らかであると思われる．そうなると，上でふれたような意味における英語の変形文法などは，英語が「実際にわかる」ということには無縁であるかのごとく思われてきそうであるが，もちろん，そうではない．結論的に言うなら，変形文法というのは，実際の場面で英語がわかるとか，適切に英語を用いるとかいうことのめんどうを見てはくれないものであるけれども，そういうめんどうを見てくれる理論を組み立てることができたとしたら，変形文法は，そのわく組みの不可欠の一部をなすであろうということである．

つまり，実際の場面においては，変形文法だけで責任を負うということはできないけれども，変形文法がないなら，そもそも責任を負うとかいう話しは始まりようがないということである．Would you like to stay for dinner？ の例で言うなら，その言語的意味，つまり，文字どおりの意味さえわからないのであれば，誤解さえも生じえないことは明らかであろう．実際の場面における文の理解ということにとって，変形文法は必要条件ではあっても，十分条件ではないということである．また，実際,「英語をより深く理解するために」というような文脈で，構文上の係り結びをまちがえたり，単語の意味を取りちがえたりしたために生じた誤解などが例として引かれることは，ほとんどないと思われる．

英語をより深く，さらにより深く理解しようとすると，とどのつまりは，どうなってゆくであろうか．必然的な結果として，英・米人の信念体系，文化的背景，価値感情などの中へしだいに深入りしてゆくことになるであろう．この際，その必要前提条件となる言語的理解の基本的重要性を見落としてはならないが，さらに，二つのことが問題となってくるように思われる．

一つは，英・米人とまったく同じように感じ，ものを見，信ずるようにならなければ，ほんとうに英語がわかったことにはならないか，という問題である．これと関連する，もう一つの問題は，できるできないは別として英語をより深く理解しようとしているわれわれは，英・米人とまったく同じように感ずることを心がけるべきであろうか，という問題である．

これは，イエスと答えても，ノーと答えても，誤解を招くおそれのある問題であるが，わたくしの考えを結論的に言うなら，英・米人になりきらなければほんとうに英語がわかるようにはならないとは，まず，考えないし，また，英・米人になりきることを心がけるべきであるとも考えない，ということになる．これは，きわめて説明不足の述べ方で，実際はさらに詳述の必要があるけれども，少なくとも，よりよく理解するための努力をしないでもよいと言っているのではない．

（東北大学教授）

鎖国後遺症雑感

SARUYA KANAME
猿 谷 要

ある大学でゼミの時間が終わったとき，1人の学生が追いかけてきて，こういった．

「先生，近く Hawaii へ1週間ばかり行ってくるんですが，観光名所ばかり見てくるのでは面白くないし，何か注意する点があったら教えて下さい」

授業が続いている秋のことだったので，私は不思議に思った．すると彼は，いかにも無邪気にこういうのだ．

「いやあ，新婚旅行らしいことをしなかったんで，ワイフを連れてちょっと行ってきようと思うんです」

私はその学生がすでに結婚していることにも驚いたが，1週間授業を休んで Hawaii へ出かけるというその気軽さに，一層驚いた．

帰国してから，彼は私に報告した．

「おかげさまで，とても楽しい思いをしました．紹介して頂いた家の人が，私たちを車にのせて，いろいろな場所を案内してくれたんです」

私は見知らぬ2人の若夫婦を快よく案内してくれた友人の顔を思い浮かべ，その報告を楽しく聞いたが，ふと多少の不安を感じて，余計なひと言をつけ加えた．

「それはよかったね．ところで，お礼の手紙くらいは，忘れないで書いておいて下さいよ」

一人前の人間に，これはまた何という蛇足だろう．できればこんなことを，誰もいいたくはないのである．

たとえどんなに短期間でもアメリカに出かける人は，そのスケジュールのなかに New York を加えない人はいない．だから，私が New York に住んでいたときには，実に大勢の人びとが入れ替わりに訪ねてきた．とくに夏になると，私がどこか他の場所に逃げ出したいと思ったほどである．

Deep South の Atlanta, Ga. に引越してからも，訪問客はたえなかった．珍しい場所であれば，それなりにまた価値があるのだろう．とにかく，前もって手紙が届いていれば多少の準備もできるが，ときには手紙と同じ日に本人が乗りこんできたり，友人の紹介状一本で，見知らぬ人が訪ねてきたりする．

折角来たのだからと思って，何の義理もないのに，こちらの予定を変更してまで一日つきあって，あちらこちら案内するようなことが少なくない．ところが――である．そういう人びとのうちかなりの数の人びとが，その後の旅の忙しさからか，帰国してほっとしたからか，お礼のはがき一枚送ってくれないのだ．

もちろん，お礼をいってもらいたくて人を案内するわけではない．しかし紹介状を書いた友人の顔を思い浮かべて，一生けんめい世話をした初対面の人から，その後手紙一本こないことが何回も続くと，なんとなく張り合いがなくなり，やがて馬鹿馬鹿しくなり，そのうちとうとう腹を立てたりするようになるのは，自然の人情というものだろう．

しかも，年令的にいうと，若い人のほうがそうである，とはいえないのだ．むしろ常識をわきまえているはずの中年に多いかもしれない．職業でいうと，実に多様な人びとに会ったが，私の同業の教師がいけない．その理由はまったく分らないのだが，まさか教師は，他人に親切にしてもらうのが当りまえ，と思っている人種ではあるまい．

もしこれが私だけの特殊な経験ではなく，かなり一般的な傾向だとすれば，折角外国へ出かけても，日本語で間にあう日本人だけが頼りとされることになり，これは外国で日本人は閉鎖的な社会をつくりやすい，という傾向とぴったり合致するのだ．

New York のように日本の商社マンの多い場所では，夫が仕事のため汗水流して英語ととり組んでいるのに，奥さん同士は電話で日本語のおしゃべりを楽しむだけで，4年間暮して帰国するときも，英語を話したり書いたりする能力が，出かけるときと少しも違わないような例とも，だいたい話が合うのだ．

この場合は，犠牲を払っても自分の意志で積極的に外国へ出かけるのとは違って，夫の仕事のために同行するにすぎず，はじめから気構えが違っている．そういう人たちは，自分の背丈以上の冷蔵庫を使うのがアメリカ的生活様式だと考えて，それ以上あまり発展をしないのだ．

New York で病気になった人が，日系の医者のところへ行けば少しは安くしてくれるだろうと思って訪ねていった．あいにく専門が違っていたので，その医者は専門医を他に紹介してくれた．ところが月末になって，その日系の医者から，20ドルの紹介料の請求がきて，その人は腰を抜かしてしまった．今から数年前の話だから，20ドルもかなりの額であるが，それがアメリカ的生活様式というものである．その人が，これで日本的精神構造の甘さを悟ったとしたら，授業料20ドルは決して高いものではないだろう．

ここで生活様式 (way of life) というのは，むしろものの考え方，精神構造，その国の国民性の土台にあるもの，といった意味である．そしてその生活様式は，いうまでもないが，外国のものがすべて勝れているというわけではない．

ただここでとくに注意したいのは，アメリカという国は，おもにヨーロッパの国の移民から成り立っているために，アメリカとヨーロッパには，何か共通した生活様式というものがある，ということである．そしてその共通性を，実は日本のなかでわたしたちはほとんど見出すことができないのである．いいかえれば，日本語も，日本的生活様式も，先進国仲間だけでいえば，あまり国際的ではない，ということになるのだ．たとえば，英独仏の3カ国語には，なんと共通性が多いことだろうか．タテ書き文字文化は，ここでも肩身の狭い思いをしなければならない．

話をもう一度，一番はじめに戻してみよう．このように考えてくると，私のところへ訪ねてきた人たちが，立ち去ってから手紙一つくれない理由の一部が，なんとなく分るような気がしはじめた．

すなわち，日本人がアメリカを旅行するとき，それは心の余裕のまったくもてない，精いっぱいのものなのだ．フランス人がアメリカを旅行するときとは，まったく事情がちがうのである．

もちろん，旅の途中でどんなに余裕がなかったにしろ，帰国して一段落してから，手紙一つ出さないというのは，本人の性格にもよるだろう．しかし，旅の途中の余裕のなさ，いいかえれば，あまりにも大きな cultural shock が，世話になったお礼状の一つも出せないという欠点を，ここで遺憾なくあらわしているように思うのである．

今日もまた，ある外資系の会社に勤めている若い女性が訪ねてきた．

「冬の休みに，ちょっとパリへ行ってきました．冬の旅行は割安で，ボーナスぐらいで行けるものですから」

いかに景気のいい会社とはいえ，若い独身の女性が気軽に地球の反対側の土地を訪ねられるというのは，たしかに日本のＧＮＰの大きさを物語っているし，いまの若者たちが海外旅行に出かけるこの気軽さには，大いに敬意を表したい．

しかし，さきにのべた学生にしても，この女性にしても，生まれてはじめて外国を訪れるというときに，この気軽さで，しかも１週間か10日だけである程度の範囲を見てくるということは，どれほどの痕跡を心のなかに残すことができるだろうか．一昔前，小学校を卒業する直前に，伊勢，奈良，京都と，１週間ばかり駈け足でまわってきた修学旅行などというものは，ほとんどなんの印象もなかに刻むことができなかったのではないか．それにしても，出かけないよりは，ずっとましであろう．出かける前にはけっして読まなかったようなその文化や歴史の本を，せめて帰ってきてからでも読むようになれば，それで海外旅行の目的はある程度果したといえるかもしれない．

昨年一夏，Boulder にある Colorado 大学ですごしたとき，２組の日本人グループに出会った．そのうちの１組は，出発以前から十分に勉強してきていて，しかも滞在中は付近の家庭に１人ずつ入って生活したり，大学で充実したスケジュールを与えられて過していた．もう１組は，Rocky 山脈のなかの夏の避暑地で，日本人同志が集まって日本語で用をたしながら，盆踊りなどをして遊んでいた．軽井沢あたりで過すのと，それはまったく同じ安易な生活態度であった．

エッフェル塔やエンパイアー・ステイト・ビルなどが，どんな形で聳えているかということを，これだけ情報が発達した現在では，わざわざ現地へ行かなくてもわたしたちは知っている．それらを見て，フランスを，アメリカを，充分に見てきたと思っていると，とんでもない独断と錯覚とに陥りかねない．

日本のような島国に住んでいる人間は，自分たちがよほど特殊な人間であり，他国との間にどれだけ大きな本質的差異があるかを知るところから，まず始めなければならないようである．ベトナム戦争に反対することは，国籍に関係なく人間としての共通性である，ということは確かであるが，そういう面だけからの接近のしかたは，安易で危険なこともある．言葉が世界中でこれだけ違うということは，way of life がそれだけ多様に存在しているという証拠だからである．

（東京女子大学教授）

私の英語歴

NAKAMURA SEITARO
中村 誠太郎

私の英語歴といいましても，とくにとりあげて申し上げることもないのですが，私はごく普通の人と同じように中学校から英語を始めました．中学，高校を通して英語の授業でそれほど強く印象に残っていることもありませんが，先生が非常に上手な日本語で翻訳をして聞かせてくださり，私達はそれを丸おぼえしておいて答案に書くというふうなことだったと思います．なんか小説が多かったようです．こんなふうな授業だったものですから，中学・高校時代はたいして語学の力はつかなかったように記憶しています．

それから，京都大学に入って，湯川秀樹先生の研究室に入れていただいたのですが，そこで物理学を勉強し始めた頃の2，3か月が語学の力がなくて大変困りました．原著はドイツ語か英語でしたが，ほんとうに夢中になって勉強して，やっとのことでどうにか読めるようになりました．それまでに半年ぐらいかかったかと思います．

京大を出て東大の助手として東京に来たのですが，その頃は戦時中でしたし，敵性語の英語はそれほど必要ではなかったし，勉強もしませんでした．

戦後になって，それもこの20年ぐらいですが，国際会議が開かれて，アメリカやヨーロッパへ出掛ける機会が多くなってから，英語の必要性を非常に強く感ずるようになりました．それも聞いたり話したりする力よりも書く力の必要性を特に感ずるようになりましたね．

1953年の夏のことですが，アメリカのコロラド大学で2か月間ほど物理学の講義をしたことがあるのです．そしたら学生から先生の英語はよくわからないと言われました．月給をもらって学生にわからないような講義をしても申し訳ないというわけで，大学の先生と相談して家庭教師を2人つけてもらったのです．1人は英作文の先生で，この方は大学院を出たばかりのアメリカ人の男性でした．もう1人は英会話の先生で，この方は中国人の女性でした．1回2時間の講義をするために4時間ほど家庭教師について練習をしたわけです．講義は週3回ほどありましたから，家庭教師について勉強するのは週12時間ほどあったことになるのです．

その時，会話を教えてくださる先生から言われたのは，「あなたは一つ一つの単語の発音がいけませんから，それから勉強をしましょう」ということで，非常に初歩的な本を読むことから始めました．多分アメリカの小学生が読むような幼稚な教科書だったと思います．それから，講義のために私が書いた原稿を読む練習をしたのです．ずいぶんきびしくなおされまして，とてもこわかったように覚えております．でもその甲斐があって，2，3か月そうやって勉強したあとでは，アメリカ人の言うことが比較的わかるようになりましたね．

英作文の先生は，私の書いた講義の原稿を見てなおしてくれることをしてくれたのですが，この先生は「なかなかよく出来ていますね」とかおせじを言ってくれるのですが，「だがしかし……」というわけでなおしてくれるわけです．この時によく言われて，なるほどなあと思ったことは，主文の主語と従文の主語を一致させるということです．物理学のような自然科学では statement が多く，物事を客観的に記述する必要上 It is said..... のように受身の形で主文を始める場合が多いのですが，そのあと突如として we have..... とかやってしまうことがいけないと注意されました．

こんなふうにしてなおしてもらった原稿を何回か読む練習をしてから，教室に行って講義をしたわけです．ずいぶんつらかったのですが，今考えるといい勉強になりました．

最近の国際会議は，ロシア，アメリカ，スイスなどが持ち回わりで行なわれているのですが，どこでやってもすべて英語だけです．そこで特に気がつくことは，ロシア人と日本人がいちばん英語が下手だということです．ところが，ついせんだってのシカゴでの国際会議で非常にびっくりしたのは，ロシア人の英語が上手になってお

りました．今や我が国の学者だけが取り残されてしまった形ですね．特に私達の世代の学者が．

これは，どうも高等学校の時に読むことに力を入れて文学ばかり読んでいたものですから，これが致命傷になっているんでしょうね．中学の時のような教え方をずっと続けてやってもらえていたらもう少しましになっていたと思うのですが．

日常の英会話は，一度本格的に勉強したいと思っていてなかなか出来ずにいるのですが，これはけっこうむずかしいものです．この間，ロンドンへ家内と一緒に行った折，ある有名な教授の家を訪ねました．秘書が出て来て応待してくれたのですが，私の英語より家内の英語の方がよく通ずるのです．そしたらその秘書が「奥さんはとてもよく英語が出来るから物理の方もよく出来るのでしょう」と言うのです．

私達は国際会議で「やあやあ」てなわけで，ドイツ人ともフランス人ともでたらめな英語を話しているわけです．ドイツ人の英語は比較的わかりやすいが，フランス人のはへんなアクセントがあって非常に聞きにくい．手をあげて質問するときでも，でたらめな英語でけっこう理解してもらえる．全世界の人が一堂に会して話し合う場合は，きちっとした英語で話す人の数はごくわずかです．イギリス人とアメリカ人を除けば，その他の人は皆でたらめな英語で話しているわけです．そんなわけで私などもそれでけっこう用が足りているものですから，ますます英会話が上達しないのでしょうか．

「読み」「書き」「聞き」「話す」力の中では，書くことがいちばんむずかしい．私なぞこの力がなかったものですから一生苦労しているわけです．「話す」ことは一番らくですね．「聞く」ほうは，わからなければずうずうしく聞きなおせばいい．それに講演などの要旨は前もって配布されるのが普通ですから，聞くことにはそれほど苦労はしないのですが，「書く」ほうは印刷されますから，いいかげんなものは書けない．

この間も，あるドイツ人が「日本の学術雑誌には No English Expression が多すぎる」と言われました．私達が英語で書く場合に，なかなか思っている通りに express 出来ない．時に誤解を生むようなことを書いてしまう．英語で書いても，それがほんとうに正しく書けているかどうか自信がもてない．似たところまできているのだが，もうひとついかんのではないかと思うのです．

私も70ぐらいの論文を英語で発表しましたが，そのたびごとに必ず英米人のだれかに目を通してもらっているわけです．これも楽ではありませんね．見てくださる外人の方のそばにいて，いろいろ内容を説明しながら適確な文章になおしてもらうわけです．昔は freehand で書いたものですが，最近は，まず日本語で書き上げて，それから英語に訳すというやり方をとっております．

最近の学生の語学力はまだまだ弱いようですね．私たちが若かった時と同じように書く力がない．まず，三単現が出来ないですね．私が接している大学院の学生がそうなんです．それから，あっちこっちの文章をつなぎ合わせて写してくるのがいますね．なかにはよく出来る学生もいますが，そういうのはごくわずかです．

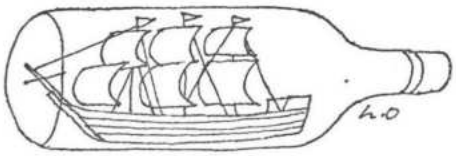
私たちの職業には一生英語がついて回っていますから，高校を出てからも1週に1時間でも2時間でもたえず英語を勉強する機会を持つように心掛けることが大切だと思います．大学院の学生にも英語のプラクティスの授業を受けさせるようにしないといけないと思います．

それから，高校時代には，Charles Dickens などの文学作品ばかり読んでいずに，私達のように理科系の学生には，もう少し理科に関係のあるエッセイなどを読ませるべきだと思います．私なんかそれをやらなかったものですから，大学へ入ったとたんに物理学の原著を読まなければならなくなって非常に困ったことを記憶しております．

それから，くりかえしになりますが，高校時代に英作文をうんとやっておく必要がありますね．それも日本語を英語に置き換える練習ではなく，英米人が見ても立派な英語である英文を書く力の養成が大切だと思います．なかなか大変なことですが，若い人は特に書く力を身につけておく必要がありますね．

（大正2年，滋賀県に生まれる．東京大学教授）

ASIA AND THE ENGLISH LANGUAGE



James L. Stewart

English in Asia is but one part of the broad subject of languages in Asia, a serious subject.

In Asia, as in North America or Africa, people have killed one another over the language issue. In English, we have the word, birthright, implying that some things are vested in human beings at birth. It is not clear what such entitlements are, and of course they change through the years. I strongly suspet that in the majority of the world there is the feeling that they are entitled to use the language they first learn at their mother's knee and in their home circle. To be denied the use of this language as the medium of early instruction in primary school is considered an act of aggression. In certain countries of Asia where the official national language is not the universal language of the country, the problems caused are very grave. On many occasions, I tell my Japanese friends that they may be somewhat unaware of the enormous blessings enjoyed by the Japanese people. In victory or defeat, one country undivided; one people, homogeneous; one language, unfragmented.

Thus, it may be difficult for Japanese (as for most Americans) to grasp the compexities of language problems in Asia. We must cultivate tolerance and understanding of the issues facing nations with diversified language elements.

For centuries, in much of Asia the confrontation of colonialism with nationalism has had a strong influence on language problems. There are two major countries in Asia today where foreign languages have not been a part of the lives of most of the population. These countries are Japan and Thailand, the two countries that have avoided a direct colonial experience. China might be considered in this category, where the long tragic record of extraterritoriality in that country might be considered a form of colonialism; and in modern times in China, there were elitists that rose to political and commercial power through their ability to handle the English and Japanese languages.

Coming at last to the subject of English in Asia, the subject of my talk today, we find that the year 1835 was a year of decision. Few of us, perhaps, recall the name Thomas Babbington Macaulay and those of us who do have heard of him only in connection with his once popular history of England or as an English literary figure of, say, the second rank. But young Macauley, a man of legal training, went to India in 1834 and in the following year prepared a minute on the subject of British responsibilities in promoting education in India. It was his famous decision which prevailed that higher education in the Indian sub-continent should be conducted through the medium of the English language. This decision had enormous consequences in the history of the area that encompasses the modern nations of India, Pakistan, Bangladesh, Burma and Sri Lanka. Let me quote from the writings of Professor K. M. Panikkar, certainly no friend of colonialism or imperialism.

> "Macaulay laid down a few propositions which he considered as axiomatic. He held that English is better worth knowing than Sanskrit or Arabic; that it is possible to

make natives of this country thoroughly good English scholars and to this end our efforts ought to be directed. Accepting this view, the Government of India laid down that the object of the British Government ought to be the promotion of European literature and science among the natives of India. This had long been demanded by the progressive Indian thinkers of the time, and it is necessary to emphasize a fact which has often been forgotten in recent criticism, that the demand for Western education had come primarily from Indian leaders themselves.

"The Macaulayan system, under which a systematic effort was made by a powerful government to educate in a foreign language the upper classes of a vast country has now continued for over a hundred years. India, even after her independence, has not radically altered the system, for in most universities and colleges English still continues to be the medium of instruction.

"The weaknesses of the system are many and can easily be summarized. It created an impassable chasm between the English educated classes and others, including those educated in the traditional way. The wastage of effort involved not only in acquiring mastery in a different language but in studying all other subjects through it was immense. A wholly disproportionate emphasis was placed on literary studies. Also the attempted transplantation on Indian soil of what was an altogether alien culture took many decades to get acclimatized, and at least in the case of the first two generations there was a noticeable tendency to create a class of men, no doubt with competent knowledge of English, but uncertain of their values, barren in their thought and unadapted to their surroundings.

"But when all this and more has been said and the truth of the criticism accepted, the credit balance of this unique experiment still remains substantial and impressive.

"In the first place, the system of higher education in English provided India with a class imbued with social purposes foreign to Hindu thought. The continuity and persistence of thoses purposes achieved the socio-religious revolution on which the life of modern India is based. While British administration did little, if anything, to emancipate the spirit, to extinguish the prejudices, to eradicate the ravages of ignorant custom and pernicious superstition, to encourage and stimulate thought, the New Learning which came to India through its introduction to the English language on a nation-wide scale undoubtedly did all this.

"Thomas Babbington Macaulay is not a popular name with educated India and yet on a true appreciation of values, it will be seen that it is the genius of this man, narrow in his Europeanism, self-satisfied in his sense of English greatness, that gives life to modern India as we know it. The main thesis of his famous minute on education was to promote an education based on the New Learning and through the medium of English. It was the most beneficiently revolutionary decision taken by the British government of India."

And, as another historian has said: "Macaulay planted within the walls of imperialism an institution dedicated to English liberty."

"The schools and colleges taught young men the idea of liberty while the government did everything to supress it. In the educational system the Government created and maintained an opposition to itself. India evolved through the common medium of education which Macaulay introduced. There was a common language for political thinking. Further, this education through the English language enabled India to share directly the results of the great movement of enlightenment in Europe."

Unquestionably, the architects of the inde-

pendence of India were the inheritors of the decision to make English the medium of instruction in higher education in that country.

The use or promotion of the English language in Asia today is not as revolutionary as it was almost a century and a half ago. Its role as unifying agent within a national entity, or as the main purveyor of modern learning is not so great as in the past. Its present role is in the direction of creating international-mindedness in the rising generations and providing the means of expression and commuication whereby the enormously vast and sprawling area of the world called Asia can in fact retain and develop an Asian cohesiveness. That most Asian of all post-war conferences, the Bandung conference of 1954 was conducted in the English language. The great number of new inter-Asian groupings, governmental, quasi-governmental and private, conduct their affairs in English. It may not be absurd to say that English is the language of Asia.

One final brief look at history, that is to say the history of English in Asia. The year 1900 represented the first full year of the American occupation of the Philippines. With utter innocence, the American authorities established primary schools all over the islands. President Mckinley instructed an American commission for the Philippines to establish a free educational system with English the one language. Until the outbreak of the Pacific war in December, 1941, Filipino children learned to read from English language primers.

In the other major areas of Asia where other colonial systems introduced separate European languages—Dutch in Indonesia, French in the former Indo-Chinese states—English is rapidly becoming the second language. So we learn that nearly all the countries of Asia have made their accommodation with the English language.

In Japan, the Republic of Korea, China, Taiwan, Thailand, Burma, Indonesia, South Vietnam, Sri Lanka, Afghanistan and Bangladesh, English may be considered the second language. India alone still designates English as a national language, though second in this category to Hindi. India also designates English as a language for official use. English is a language for official use in Pakistan, Malaysia Singapore and the Philippines.

English is obviously alive and well in Asia today. The question becomes: What kind of English? Is the quality of English today in Asia or America maintaining standards established through the centuries?

On the question of the desirability of some simplified form of English, especially for the developing countries, or of the value of English literature in the preservation of the English language, I find myself quite confused: rather capable of arguing on both sides of the issues.

On the one hand, as a native speaker of English, proud of the growing international character of the English language, I am embarrassed by the terrible inconsistencies in English spelling and pronunciation; and I often have the feeling that it is not fair to continue to propagate a language so illogical in some of its aspects. Through the years, I have had some respect for I. A. Richards and the Basic English he once so enthusiastically promoted.

On the other hand, since my childhood I have been a tremendous reader of the King James version of the Bible, of Shakespeare, the English poets and the novelists, particularly of the 19th century. I am appalled by the influence of the modern linguistic specialists who seem to feel that any contemporary usage is to be accepted. I tend to feel that literature is the guardian of language.

This is a field of endless discussion and I find it a fascinating one, I will take a few minutes at this time to review some of the controversy in the United States over modern usage, on the grounds that the state of English in America has some bearing on the subject of English in Asia.

In an excellent book entitled *The Treasure of Our Tongue* by Lincoln Barnett, the author describes some of the turmoil that raged throughout the United States in the year 1961.

Signs of disintegration of the languge might have gone unnoticed by the public for several years—despite skirmishing, infiltration, and the fall of isolated redoubts—had it not been for the collapse of two major bastions of the mother tongue: The Bible and The Dictionary. "Early in 1961, the New Testament section of *The New English Bible* appeard, the latest of modern translations (its most recent predecessor being the Revised Standard Version of 1952). Since the King James Version and the works of Shakespeare have generally been ranked together as the noblest monuments of the English language, many laymen wondered why the majestic seventeenth-century translation could no be left alone. Remarking that most of the changes seemed to him "unnecessary and even harmful ... mere busywork," Bergen Evans wrote in *The New York Times* Magazine: "In achieving the blandness of contemporary expository prose, the inoffensive language of a commercial civilization, the translators have been dismayingly successful. ... Maybe the Bible can't really be translated into contemporary prose. On the other side of the Atlantic, T. S. Eliot dismissed the new version as "a combination of the vulgar, the trivial and the pedantic."

The reaction to *The New English Bible* seemed but a murmur, however, in comparison to the explosion touched off by the publication a few months later of *Webster's Third New International Dictionary*.

Sounds of alarm rang from coast to coast upon publication of the third edition of *Webster's New International Dictionary*. Never in modern America has an event of scholarly or intellectual significance been met by such an explosion of outrage and dismay. Seldom have American newspapers and magazines expressed themselves with such unanimity and vehemence. The *Atlantic Monthly* excoriated Webster III as "a calamity," "a disaster," and "a scandal." The American Bar Association *Journal* denounced it as "deplorable" and "a flagrant example of lexicographical irresponsibility." *The New Yorker* accused it of "an incredible massacre" (of 250,000 words in Webster II which had been dropped from Webster III). *Life* ran a scathing editorial, damning it as "monstrous," "abominable," and a "non-word deluge."

To some observers Webster III held ominous auguries for the future. For the state of the language reflects the state of the culture, and the decay of a language is both a symptom and a cause of the decay of institutions; its degeneration abets and accelerates theirs.

In further defense of the importance of the purity of the language, I wish to present two further quotations. The first is from the late Ezra Pound. It came to me, interestingly enough in a monograph prepared at the University of Malaya. I was reading the monograph the other day just as the afternoon newspapers reported the death of the celebrated American poet. More than 40 years ago, Ezra Pound wrote;

> "Has literature a function in the state, in the aggregation of humans, in the republic, which ought to mean the public convenience?... It has."
>
> "It has to do with the clarity and vigour of 'any and every' thought and opinion. It has to do with maintaining the very cleanliness of the tools, the health of the very matter of thought itself."

And in the same vein, I now quote from Confucius: The Analects, Book 13; Chapter 3.

> 1. Tsze-lu said, "the ruler of Wei has been waiting for you, in order with you to administer the government. What will you consider the first thing to be done?"
>
> 2. The Master replied, "What is necessary is to rectify names."
>
> 5. "If names be not correct, language is not in accordance with the truth of things. If language be not in accordance with the

truth of things, affairs cannot be carried on to success."

7. "What the superior man requires is just that in his words there may be nothing incorrect."

And yet, to return to my prior attitude, I think there are some steps toward simplification of English in Asia that might be taken. I feel strongly that such steps should be initiated in Asia and supported by those educators and leaders in Asia who recognize the importance of English in their lives. We are in an era of international conferences. I wonder if Japan, perhaps in consultation with Indonesia, China and India or Pakistan, could not begin preparation for a series of conferences on the subject of a standardized English usage for Asia. Such conferences could consider the basic language and also analyse and evaluate the teaching methods for English as a foreign language now being observed in all Asian countries.

The subject of English language instruction in Asia in my next and final general topic in this talk.

English is the first foreign language being taught in every country in Asia. With a few exceptions, English is a compulsory subject at the middle-school level; that is to say at the seventh grade level, occasionally at the fifth grade. I will note the exceptions to this generalization. In China, it is not clear whether English is being taught in the school system at the moment, although many newspaper stories from Peking and Shanghai have noted the sudden popularity of learning English in China, following the visit of President Nixon to the Chinese capital. In the Philippines, English remains the medium of instruction from highschool upward.

In Malaya, there are only two types of schools at primary level and both under the same system. There are Standard Schools where the medium of instrution is Malay, and Standard-type Schools where medium of instruction is one of English, Chinese or Tamil. The last mentioned language medium is necessary because of a sizeable South Indian population which has grown, partly through immigration and partly through the practice, in the past, of employing from time to time an indentured labor force from India. A parent in Malaya may now register his child at a primary school using the language medium of his choice.

In a Standard School, and in an English-medium Standard-type School, English and Malay are studied together from the first year, whereas in other Standard-type Schools, Malay is studied from the first year and English is compulsory for the last four years of primary school. This implies that a Malay child will, in the first instance, learn two languages in his primary school years. If his parent so chooses, and if parents of fifteen of his peers also so decide and request, he may also be taught either Chinese or Tamil or both. The child in a Standard-type School, other than the English-medium school, besides studying the language used as the medium of instruction, must study both Malay and English. He may study the fourth language if his parents so wish it.

In Pakistan, as in India, English remains the medium of instruction at the level of higher education. A government publication of 1969 makes some interesting observations:

> One of the most important social and political problems facing Pakistan today and one which has a tremendous bearing on the question of national cohesion, is the fact that whereas the official language of the Government and adminisration is English, that of the masses is not. There is almost a caste-like distinction between those who feel at ease in expressing themselves in English and those who do not.
>
> It is, therefore, necessary both from the political as well as economic and social angles that the emphasis on the teaching

of English must be reduced. This can be done by changing the medium of instrution at all levels of education to the national languages. At the same time, English should instead of continuing as a compulsory subject be taught as an optional subject.

In Sri Lanka, English is still taught at the secondary level and may still be the medium of insruction in most departments at what was the University of Ceylon. However, the strong governmental insistence on Singhalese as the national language [may reduce earlier emphasis on the English language.

The case of English education in Indonesia deserves some special attention. According to my estimate based on UNESCO statistics on education, some 1,500,000 Indonesian boys and girls may be studying English in their classrooms at this time. There is the need, then, for some 20,000 teachers of English at the secondary level; and the number of trained teachers is well under half this total.

The long-range task of perfecting Indonesia's Englisht eaching establishment is elusive. The task is made difficult because the Ministry of Education has not yet stated a clear policy which is realistically related to available resources. In view of the fact that it is inconceivable that foreign donor agencies could ever provide the levels of support required, the millions of dollars and thousands of teachers it would take to begin to implement the general policy as it now stands, it appears necessary for Indonesia's policy to be recast to more modest dimensions. Operational problems must also be faced. For example, secondary school English might be made elective rather than required, and teacher strength concentrated. Teacher training institutes should produce teachers and should relate their teaching to what goes on in secondary schools. Intensive courses could be offered to those needing English, such as first year students at universities.

The Indonesian Ministry of Education has established teacher training colleges or institutes at many cities throughout the Indonesian archipelago, where the future teachers of English are given intensive instruction. Teaching materials are prepared and tested in selected schools. Over-all, the Indonesian effort to promote education, including the teaching of the English language, deserves our praise, but the problems are enormous.

In my judgment, the greatest experimentation in English teaching methods in Asian countries today is going on in Indonesia and the Philippines.

In South Vietnam, we see an interesting situation in which the demands of modern international communications and national development are causing English to supplant French as the second language in the school system.

In Vietnam as in most Asian countries, the English language has become the predominant foreign language.

Students start to learn foreign languages in high school. They can either choose English or French. In recent years the number of students taking English as their required foreign language has been double that of students taking French, even though the number of qualified French language teachers is substantial and the French Cultural Center often obliges by providing important high schools in Saigon with French teachers on request.

In many universities, students are required to take an entrance English examination, among other examinations, to insure a minimum knowledge of English which will help them in the use of reference books and English technical textbooks. Due to the shortage of Vietnamese textbooks, many teachers have to have recourse on foreign textbooks and often give assignments to their students referring to English texts. Responsible officials in various universities have realized the need to stress on the importance of English language education especially for their first-year stu-

dents. These students must take courses in English designed to give them a knowledge of technical terms in their fields. As a result, to keep up with the students' increasing ability in reading English, school libraries have been established or reorganized. On the average, school and college libraries have about 75 per cent of their holdings in English, about 15 per cent in French, and 10 per cent Vietnamese. This discrepancy reflects the very low output of instructional materials and textbooks in Vietnamese.

In my disjointed preparation for this talk, I have examined educational materials received from many of the countries in Asia. The problems connected with English teaching are remarkably similar; the complaints are those often heard here in Japan; the recommendations too have a familiar ring. The major recommendation seems to be that English (or any foreign language) should not be made a required subject for all students at the secondary level. In this connection, a lack of motivation on the part of many children for learning a foreign language is cited. There are the familiar statements that there are not enough teachers to go around; that the available teachers who are nationals of the country concerned do not have a good grounding in English as a whole—that is to say, many are grammarians; some are literature majors; many have faulty pronunciation or cannot handle oral English. Classes are too large. Textbooks are not relevant. The native speakers of English prvoided predominantly by the American Government's Peace Corps, by the Colombo Plan utilizing Canadians, Australians and New Zealanders, by the Australian government itself in several bi-lateral programs, as well as specialists provided by the British Council and by the Ford Foundation in Indonesia are appreciated. However, there is not much standardization of personnel in such programs, and it is becoming clear that not all of them will continue indefinitely. Meanwhile, for the Ministries of Education concerned to provide foreign nationals as English teachers at the college level, much less at the secondary level, is beyond the capabilities of their budgets. As a result, despite the increasing number of students enrolled in English classes, there is the very real probability that the quality of instruction will go down, not up.

I suspect that many of these arguments are very understandable to the members of this audience today.

Before I proceed to a brief discussion of my conclusions in regard to English in Asia I wish to add a few observations.

The English-language press throughout Asia is a very active one and one that I believe is growing in importance, despite the strong efforts being made to popularize national languages. These English-language newspapers have a very good record in presenting news of Asia that many vernacular newspapers do not bother to cover.

In the countries where English is still a language for official ues, there is a danger of deterioration of the English being used, with the result that politicians and government officials may not understand one another as they need to.

As to my conclusions, they are rather obvious ones.

First, English teaching methods in Asia cannot be significantly better than teaching methods in general. For example, over-crowded classrooms. This is a problem not limited to English classes. The same for shortage of teachers; lack of modern textbooks, etc. And yet, it is not my purpose today to attack education in Asia. As a sometime visitor to many of the countries I have mentioned, I have grown to have tremendous respect for the efforts of the governments concerned to develop education in their societies. Most Asian governments are spending from 10 to 15 per cent of total national governmental budgets on education. This is not bad. Dis-

tricts and cities provide what they can. I wish to pay tribute, too, to the fathers and mothers of children in Asia, who are spending their slender savings or borrowing money to give their children an education, in many cases because they themselves were unable to receive an education.

The Japanese government, meanwhile, is being urged to spend more of its accumulated foreign exchange abroad. From United Nations quarters, the Japanese Government is being pressured to raise the level of official governmental aid to seven-tenths of the total Japanese economic assistance. I know of no greater contribution that Japan could make to world peace and prosperity than to subsidize, say, half the cost of primary education in the developing countries of Asia. The cost could be as much as one billion dollars a year. But what a wonderful investment it would be.

Secondly, there is a considerable body of evidence that many countries in Asia are having serious second thoughts about the compulsory teaching of English at the secondary level. As an amateur, but as an interested observer, I support such a reconsideration for many countries including Japan.

If English instruction is removed from the category of a compulsory subject in middle schools and highschools, then I think the educational system and the schools concerned could establish new, stricter criteria in the teaching of English to those students who elect to study the language. Despite all the social pressures to pass students with inferior records, I think a beginning might be made in English as an elective to weed out students who refuse to study or seem unable to learn a foreign language.

Based on some personal experience, but again putting together considerable evidence from many countries in Asia, I believe that at the college level and for adults, intensive English-language programs are the best and most successful method of learning the language. Would it be so revolutionary to require students electing to take English in their first year of university instruction at certain private universities in Japan to spend the first three or four months of this first year studying nothing but English in a truly intensified manner, confined day and night to an English-speaking atmophere? I would like to see the experiment tried.

Although, as you are well aware, English teaching methods in Japan are often attacked, the teaching of Japanese as a foreign language is much more backward, yet the need for more capable Japanese teachers of Japanese to go to Asian countries is great. The demand is increasing. In fact, the subject of the Japanese language in Asia is one of great interest to me. Did you know that the majority of national universities in Asia have classes in the Japanese language? Did you know that the Japanese language is now being taught in the Requblic of Korea at the middle school level? Asia is changing. My great hope for Japan is that she will keep up with the changes.

And in this connection, I wonder whether such groups as ELEC, now with great experience and some success in the teaching of English in Japan, should not be thinking of making their expertise available to the future teachers of Japanese as a foreign language.

In summation, I would say that the history of English in Asia has been intertwined with the history of modernization in Asia. As we have seen, the educational process in all Asian countries is developing at a faster pace than ever before. Inasmuch as English is a part of this process, the conclusion to be noted is that the role of the English language in Asian countries will expand, not contract. The challenge of English teaching in Japan, therefore, is not merely to heighten Japanese association with the English-speaking world, or further to consolidate Japan's position among the developed, post-industrial societies—the so-called rich man's club—but also in order to keep step

with Asia, to enable the dynamic Japanese people to play their needed role of leadership in the economic, scientific and intellectual development of Asian societies.

I have mentioned the subject of the proliferation of international conferences. This is a rather sore subject for executives of cultural and educational foundations. We all support these conferences. We wonder whether they are worthwhile. We are troubled by the mounting expenses involved. I personally deplore the lavishness with which Japan in the past two years has sponsored international meetings. The cocktail parties, the receptions with enormous quantities of expensive food that have become a part of such conferences in Tokyo and Kyoto seem inapporopriate, even indecent when we consider that hunger in large segments of our populations has not yet been eradicated. We now have the Japan Foundation, toward which we have very high hopes and great expectations. It is my strong hope that the Japan Foundation can somehow establish some limits on the total amount of its resources to be allocated to international conferences.

But the conferences will go on. They will be held, primarily, in English. It is extremely important, in my view, that an ever-greater number of Japanese delegates able and willing to take part in the deliberations in English can be created. Unless new Japanese talent can come forward, there is the danger that the same people will be meeting year after year, discussing the same subjects and adjourning with the same conclusions leading nowhere.

The countries of Asia are looking forward to greater Japanese participation in the discussion of common problems. This participation should be in the English language. The healthy development of Asian nations requires participation.

In conclusion, I would like to remind this audience that in your work of improving the quality of English teaching and learning in Japan, you may be addressing yourselves to one of the central problems of our time.

(Lecture at ELEC Meeting on November 4, 1972)

(Japan Representative of the Asia Foundation)

An Important Book for Teachers of English
A Must for Library Reference Shelves

APPLIED LINGUISTICS AND THE TEACHING OF ENGLISH

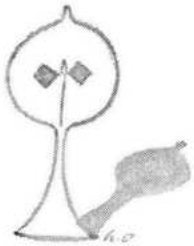
ed. Tamotsu Yambe 343 pp. ¥2,500

A compilation of twenty-four major articles from the pages of *ELEC Publications* now being offered for the first time in book from

Selections by: Charles C. Fries, Archibald A. Hill, Ernest F. Haden, Albert S. Hornby, Einar Haugen, Charles T. Scott, Albert H. Marckwardt, Patricia O'Connor and W. Freeman Twaddell

Send bank draft or money order to:

The English Language Education Council, Inc.
3-8 Jimbocho, Kanda, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan



現代英語の諸相

MURATA KIYOAKI
村田聖明

ことばの新陳代謝

本日はたいへんむずかしい題の講演をやるようにというお申しつけでございますが，私は英語の専門家ではありませんし，言語学の勉強を特にやったものでもありません。ですからそういう方面の専門的なことはよく知らないのですけれども，ただ私が職業人としてこの2,3年間いつも英語を用いて仕事をしてきたという経験から何か皆さん方にご参考になることがいえるのではないかということで，お話しすることをお引き受けしたわけです．英語を言語媒体として情報を印刷するという仕事，あるいは英語を言語媒体として自分の考えていることを文章にして人に読んでもらうという仕事，そういうことをしてきた，あるいはしている人間として英語について特に強く感ずること，それをお話ししてみたいと思います．

私がいままで接触してきた英語について最も強烈な印象というものは実に簡単なことです．それは，英語というのは生きたことばであって，絶えず変化しておるということです．これはどんなことばについてもいえることでして，当然ながら日本語についてもいえます．ただそれはわかりきったことではないかとお思いになるでしょうけれども，外国語として一つのことばを扱っていると自分の国のことばとは違って非常にそういう印象が強くなるわけです．ことばが生きているということは，これを有機体にたとえると，いわゆる新陳代謝が行なわれているということです．新陳代謝というのは老廃物が排せつされて新しい細胞が生まれるということです．たとえば英語というものをある形の生物に考えますと後のほうの古い部分がだんだんと脱落して，前のほうに新しい細胞がどんどんと付着していきます．ですから絶えず成長していくわけです．その成長する過程を毎日観察できるわけです．どこでやるかというと，毎日出される英語の新聞，英語のニュースを見ているとこの過程が明らかになるわけです．ですから国語というものはどこの国の国語でもそれが生きた人間，生きた民族が用いる国語である限りは絶えず生成変化していくものであるということがわかります．

われわれが外国語としての英語を扱う場合にそういうふうに変化していることばをどういうふうに受けとめたらいいか．例えば日本語の世界でも絶えず新しいことばが出てきますし，それから違った，一つの古いことば，いままであったことばに新しい意味が与えられるという例がたくさんあります．日本語の場合ですとわれわれは好きなように取捨選択をして，新しいことばをだれかが使ったときに自分もこれを使ってみよう，あるいはこのことばは自分はいやだから使わずにおこうというふうにできるわけです．しかし外国語の場合にはそれがなかなかむずかしい．そういう問題に直面した場合は皆さん方でもおそらくどうしていいかわからないということがあると思います．それが私などのように実際に英語でものを書いたり，あるいは人の書いたものを編集するという仕事をしていると非常に切実な問題になってきます．

それではどういうふうに変化するかということを具体的に申しますと，まずやはりさっき申しましたように新しいことば，新しい単語というものがどんどんと出てきます．人間の生活が毎日毎日変化して，新しい技術，製品，思想，概念というものが絶えず導入されておりますから，当然それらをあらわすことばが英語の語彙の中に入ってきます．それから，さっきもちょっといったように，いままであったことばに新しい意味が与えられて使われるということが非常に多いわけです．それから構文上の変化というものがあります．構文といってももちろん文章自体の組み立てのみならず，熟語のように文章にならないまでの部分的な要素，そういうものにも新しいものが生まれてきます．それから文法上の変化という項目も考えられます．文法とは何か，文法の規則とは何かというのはむずかしいわけですけれども，ある一定の時点における文法の規則というものを基準にしますと，それから逸脱した規則というようなものが生まれてきているということがわかるわけです．

もう一つの現象は，これはどういって表現していいかわかりませんけれども，言語世界における一種の階級の自由化というものもみられます．言語の世界に標準英語ということば，それから卑俗英語ということば，いうな

ちば，上品なことばと，それよりも少し低い水準のことばというものがあるとすると，上層の英語と下層の英語というものが入り乱れていく．普通の社会でいうと，昔の貴族階級と庶民階級との差がなくなってくるというふうにもいえると思います．それに似たような現象が起こっている．それから，ことばの本来の意味からみてどうしても誤りであるといわざるを得ないような表現が多くの人によって使われるために非常に普遍化してくる，そういう例がたくさんあります．

このように絶えず変化が起こっている英語というものを扱って実際に情報を組み立てて多数の人に配付するという場合に，われわれが直面する問題は，どこに基準を持ってその変化に対応するかということです．英語の世界で起こる変化をそのまま全部無条件に受け取ってそのまま扱えばいいのではないか，ということをお考えになる方もあるかもしれませんが，そういうわけにはいかないのです．なぜかというと，印刷されたことばというものは話されることばとはだいぶ違いまして，その持つ責任が非常に重いわけです．ですから話しているときは，どんな言い間違いをしてもすぐ訂正できますし，あるいは間違ったことを言っても人に忘れられてしまう，大低の場合は重大な問題は起こり得ないわけです。しかし，それが印刷されると多くの人がそれを読んで，それによって何らかの情報を受け取る，何らかの意思を受け取る．その受け取り方が間違うような表現があれば，その印刷されたことばに間違いがあるということになるわけです．新聞というものは社会の公器ですから，そういう意味では，非常に大きな社会的な責任を持っております．それがどこでそういう基準をつくって，どこまではこの変化を認める，どこから先は認めないかということになるとこれはなかなかむずかしいです．けれども，私の考えでは，いわゆる教養ある一般的な知識人の間に共通してみられる基準というものと，編集責任者の持つ見識，知識，常識とかいうものによってきめられる個人的な基準，というものがまじわって，一つの一応の基準ができるというふうにいえます．それに従って出版物は編集されるべきであるというふうに考えます．

標準英語と卑俗英語

ここでひとつさっきいった英語の水準というか階級というか，それについて，ちょっと考えてみたいと思います．ごぞんじの通りことばというものは文字，音声という，二つの媒体によって用いられますが，ことばの水準，品位というものは大ざっぱに分けて，標準英語，もう一つが卑俗英語となります．卑俗ということばは少しきつ過ぎるかもしれません．Vulgate ということばは本来は庶民的なとか，ありふれたとか，通俗的なという意味ですけれども，普通言語学者の間で使われているので私も使ってみました．この卑俗英語という訳語は一般に日本の専門家の間で使われているかというと自信がないのですけれども，大体，こういうことでいいのではないか．ただし，卑俗英語ということばにかわって standard の反対の nonstandard ということば，あえていうならば非標準，あるいは substandard，これは標準以下，亜標準，そういうようなことばを用いることも妥当であるかもしれません．こういう分け方というものは別にはっきりとした世界じゅうの学者の合意があるわけではなくて，大体こういうことであれば大部分の方が賛成するであろうというところです．

標準英語といわれることばの中にも二つの範疇があって，一つは formal English，もう一つは informal English，改まった英語と，くだけた英語というふうに訳しますが，改まった英語というのは学術論文とか法律文書，外交文書，専門書籍，公式書簡，そういうのは書きことばですけれども，話しことばでも非常に改まった演説とか講演というものがあるわけです．他方くだけた英語ですと，これは普通の人の生活の非常に広い範囲に及んで用いられる英語ですけれども，その中にはもちろん演説もあってもいいわけです．原稿なしにやる演説とかあるいは大部分の小説が今日の小説であれば非常にくだけた英語，話しことばに近いことばで書かれているということがあります．それから個人の書く日記とか雑誌・新聞の記事というものはほとんど informal English で書かれている．ラジオの番組なんかももちろん話しことばですから当然そうなる．それから流行歌と映画の中のセリフ，これは当然ながらその映画が現代の人間を扱っている映画であればそうなる．もちろん，たとえば聖書の中のお話を扱った映画であっても，出てくる人物は今日の男や女のことばと同じことばを使っているような映画もつくることができるわけです．それからテレビの番組の内容も同じです．

卑俗英語のほうにいきますと，これは代表的な範疇ですけれども，いわゆる slang とか dialect, jargon，そのほかにもたとえば argot，これは jargon ということばと同じような意味なんですけれども，ある職業人の中だけで使われることばです．例えば，警察の使うことばで，殺人というのを「殺し」といったり，被害者のことを「ガイシャ」と呼んだり，密告することを「タレコミ」といったり，そういうことばが argot になるわけで，そ

れに相応するようなことばが，英語にも当然あるわけです．

それから方言というのは英語にもあって，地方向けのラジオ番組，あるいはある一定の地域だけのラジオの放送局なら放送局で出す番組の中にはそういうことばも出てきますし，会話にしても，例えばテキサスの人同志が話すことばは当然方言の表現がたくさん出てくるわけです．日本でも，例えば鹿児島の人同士が話したりすれば東京の人にはわからないことがたくさんあるということになるわけです．

英語にはそういうふうに，大ざっぱな水準がありますが，最近ではさっき申しましたように，下のものが上のほうにまじったり，上のものが下にまじったりというふうな状態が起きてきているということがいえます．アメリカなんかに特にそういう傾向が強いと思いますけれども，やはり社会状勢の変化がその原因ではないかと思います．第二次世界大戦後のアメリカで非常に大きな社会問題がいくつも起こりましたけれども，そういうことを背景にして一般に，いわゆる昔からの伝統というものを破壊していこうという雰囲気が非常に高まっている．それから体制というか，つまり権力機構というものに対してむほんをしてやろうという気持ちが非常に強くなる．アメリカの民権運動というものはそれのあらわれですけれども，あるいは反ベトナム戦争運動とか，体制が行なっていることをひっくり返そうという雰囲気が非常に強くなってくる．そういう状況では自然に上品なことばというものを軽べつするという風潮が出てきます．それからいままでは下品だから使わなかったようなことば，それをなぜ使わないのだというふうな気持ち，どんどん使ってもいいのではないかというふうな気持ちが多くの人の中に出てくると，当然それもやがては活字にもなる．いままでは活字にできなかったようなことばも活字に用いられるというふうになるのも自然であるかもしれません．

ここでさきほど申しました変化の一つですが，誤用と考えられる表現とか単語が非常にたくさんの人に用いられて，多くの人がそれは間違いでないというふうに考えるということについてお話ししたいと思います．

原則として，ことばというものがある世紀からある世紀に移る間に，あるいは何世紀かたつ間に変化していくという一つの要素は，誤用が非常に広まるからだといえます．あるときにある人があることばを間違って使った，それを聞いた別の人が間違いということを知らずに，このことばはこういうふうに使ってもいいんだなと思い込んでしまう．その人がそれを使ってみる，それを聞いた人がまたそれを繰り返すという現象が起こってきます．そうすると，最初に一人の人が使った誤用が一年の間に何千人，何万人の人が使うようになってしまう．10年の間にはその人口の50%あるいは60%の人が使うようになるというような現象が起こります．最近のように報道機関，いわゆる報道媒体というものが発達した時代ですと普遍化するスピードが非常に早くなる．たとえばアメリカの大統領がテレビやラジオで一言しゃべるとそれは人口の何分の1かの人が同時に見る，聞くということになる．その大統領が演説の中で1か所間違ったことをいったとしても，「大統領が使ったことばなんだからいいだろう」というふうに考えるのは不思議ではないわけで，多数の人が同時にそういった例に直面するとその間違った例が普遍化する速度が非常に早くなるというわけです．

大統領の例で申しますと，いまから16年前，昭和32年頃，アイゼンハワーが大統領のとき演説の中で使ったことばがあります．それは finalize という新しい動詞なんです．当時は未だほとんどの人が使っていなかったのですが，要するに，final という形容詞があってその終わりに -ize をつけて動詞にしたものです．そういう動詞を使うことはけしからん，こういうことばは存在しないのだ，それを大統領が使うとは何事だという意味の批判の手紙が，*New York Times* に出たわけです．ところが今日では，新しい辞書におそらく入っていると思います．新聞によく出てくるのです．私だったら使わないのですけれども，多くの人がまねてしまう．初期のころにはこんなことばはいらないことばだといっている人たちが，なぜ complete ということばを使わないのだ．たとえば計画の立案が来週末までに finalize されるだろうというふうなときは，なぜ complete ということばでいけないんだろうというふうに議論できるわけです．ところが何となく finalize のほうがかっこいいというか，complete と違った意味を持っているという印象を持つ人が使ってみたら，みんなに受け入れられたということがいえると思います．これは一つの例ですけれども，そういうふうに新しいことばをつくり出して，本来は無用であったことばでも一つの同義語として生き残るという場合がたくさんあるわけです．だれかが新しく使ったことばというものは必ずしも全部が全部生き残るわけではなくて，大部分はそのときだけで消えてしまうと思います．しかし多くの人がそのことばが非常に使いやすいとか何となく使ってみたらかっこがいいと思うときにはそれが生き残る，何年たっても人がそれを使っている．ちょうど新しい服装の流行みたいなもので，一人の人が変わっ

た洋服を着てみたところがだれもいいと思わなかったということであれば，その人の着た洋服は一回きりで終わりでしょうけれども，多くの人が私もあれを着てみようということになればそれは広がっていくだろう．しかしまたそれが未来永劫に女性の服装として生き残るかどうか，これはわからないでしょう．ことばの場合も同じであって，多くの人がある時期においてワッと使った．しかしそれが必ずしも英語の語彙の一部として長く残るかどうかということはわからない．そういうことばが，アメリカの slang なんかにもたくさんあって，たとえばいま日本でかたかなで書くナウということば，この now というのはアメリカでは数年前は形容詞として非常にはやったことばです．それがいまはアメリカではほとんど消えてしまっているという説があります．ところが日本で日本語になってしまっている．いまおくれてはやっている．では このことばは10年先まだ使われるかというと，それはわからない．

ひところアメリカで新しいダンスの様式が次から次へと出たことがありました．ジタバグというのは日本語でジルバといって，これはおそらく辞書にも入っていると思います．これができたのは1940年代の前半だと思いますが，戦後日本にも入ってきたわけです．しかし以後，次から次へとアメリカで新しいのができて，いまはジタバクというのは昔のワルツぐらいに古典的になって古い感じがします．ところがその後，10年ほどの間に，次から次へ新しいものが出てきて，日本で最新着のものを覚えた人がアメリカに行ったら，もうそれは3代ぐらい前のダンスだといって笑われたというぐらい変化が早いのです．

ことばもそんなもので，あるときパッと広がって次は消えてしまうというのが多いわけです．日本語でも，たとえば石原慎太郎が『太陽の季節』という小説を書いて芥川賞をもらったときに慎太郎刈りという頭の刈り方がはやりました．慎太郎刈りということばが語彙に入ってきます．新聞記事なんかでも，慎太郎刈りの男がたばこ屋をおそって2,000円の金を持って逃げたなんて，そのことばを使わなくても表現できるにもかかわらず，その時代にはそういう記事を出すわけです．その以前は何といっていたか，あるいは角刈りといったかもしれません．いまはスポーツ刈りというかもしれません．同じものをあらわすことばが時代とともに変わるということです．

英語にみられる普遍化した誤用

ここで誤用の説明に入りますが，本日は特に頻度の多いもの，非常に普遍したものをとり上げてみたいと思います．

1. Ten persons were killed and *another eight* were seriously injured.

これはニュース記事の中にしょっちゅう出てきます．Another というのは同じ数字であればいいのです．次に出てくる数字が同じ数字であって，10人が死んで10人がけがしたというときなら another ten でいいわけです．こちらは数字が違うんだから，正しい文章としては

Ten persons were killed and *eight others* were seriously injured.

こういわなければならない．

それから次にあげるのは，皆さん方はこんな間違いが行なわれているかと思われるかもしないけれども，実際あるのです．

2. *As far as* the Government, the negotiations will be continued.

これは，政府に関する限りは交渉は続けられるであろう，ということです．関する限りはというのは as far as the Government is concerned といわなければならない．ところが is concerned を忘れてしまう人が非常に多い．As far as... といったあとで is concerned といわなければならないのですけれども，as far as... というのが長くなると忘れて主節に入ってしまう．それでこういう間違いが広がる．しかしもう一つの理由は，We went *as far as* Ikebukuro. というように as far as という前置詞句があるので混乱するわけです．

3. *Based on* these reports, I would say....

これまた非常にまちがいが多い．Based on という副詞句と，on the basis of という前置詞句，これが混乱するのです．これも無理もないと思いますけれども，これがなぜいけないかというと，主語は無生物でなくてはいけない．ところが I というのは人間だからいけないのです．生きものが主語の場合には on the basis of といわなければならない．では無生物の場合はどういうか．たとえば "Godfather" という映画があります．This movies is *based on* the story by.... そういうふうにいうのが正しいわけです．

4. I *cannot help but think* he is not really intelligent.

これはおそらくアメリカもイギリスも同じでしょうけれども，100人の中90人ぐらいまでが気がつかない間違いで，まあ文法の試験でもすればわかるのでしょうけれども，人が書いているのを見てもおかしいと思わないという状態になってきている．実は私共の会社でアメリ

カやイギリスやカナダの若い大学出を採用して原稿の整理，つまり他人の原稿を直す仕事をやらせておりますがこういう間違いを気がつかずに通す場合がある．注意を喚起すると，どこがいけないかわからない．説明してやるのです．どういうふうに説明するかというと，皆さんご承知のように，help ということばは他動詞であって，I cannot help thinking とか wondering というときに使う help というのは「助ける」というのではなくて，avoid という意味だから I cannot help thinking. = I cannot avoid thinking. と考えれば but なんか入る必要がないじゃないか．それから，I cannot *but* think. というのは，私は think 以外のことは何もできない．I cannot do anything except to think. という意味です．それを二つ一緒にしちゃって I cannot help but think. というのはおかしいじゃないかというと，なるほどとわかる．次の文章はどれほどこれが普遍化しているかという一つの例にすぎないのですけれども，これはアメリカの元労働長官，元最高裁判事，もとアメリカの国連代表という最高のインテリとも思われる Arthur J. Goldberg という人が書いたものです．

Judging from the vitriolic attacks made upon the Republic of Korea... one *cannot help but wonder* if all these activities have not been motivated by... (Arthur J. Goldberg, December 19, 1966)

次の例にうつります．

5. Increases in expenditures for the nation's defense are largely responsible for the rise in the budget of this Administration *compared to* that of its predecessor... Military assistance expenditures are declining to an estimated $1.4 billion in 1963 *compared with* $2.2 billion five years earlier.... (John F. Kennedy, January 25, 1966)

All this should be amply clear when once considers how few Japanese throughout history have lived or studied in India or the Arab countries as *compared with* those who have lived or studied in Europe or North America or how few Indians or Arabs have played an important role in Japan as *compared to* Europeans or North Americans. (Edwin O. Reischauer, January 25, 1966)

これはまた4番の cannot help but と同じくらい普遍化している compare to と compare with の混同．一つは Kennedy の例，一つは Reischauer の例です．どちらも同じ文章の中で二つを同じ意味で使っている．どっちの意味で使っているかというと，compare with の意味なんです．だから compare to という本来の意味が消えてしまったということです．これは何も Kennedy や Reischauer だけを非難しているわけではなくて，Webster の大辞典にそうなっているのです．Webster の辞書というのは一番初めに出版されたのが 1780 年頃です．何度も改訂されて，1892年ぐらいの版になると彼は死んでいるから別の人がつくっていったわけですけれども，一番最近の二つでいうと 1941 年に大改訂をして *Webster's New International Dictionary* というものができたわけです．それから20年たって1961年の版が出ました．これが *Webster's Third New International Dictionary*. この間に変化が起こった．41年版ですと，compare to と compare with の区別がちゃんと出ているわけです．日本ではこれは間違うはずがない．なぜかというとことばが違うからです．われわれは中学のときに，compare to というのは「たとえる」という意味で，女性をバラの花にたとえるというのは，compare a woman to a rose flower です．ところが with のほうは「比べる」ということです．われわれは，間違えるはずがないのです．"You Are My Sunshine" という歌があります．あなたは私の太陽だ，これは You are comparing a woman to sunshine. ですね．ところが with のほうは，このチョークとこのチョークとどっちが長いかと比べる時に使います．ところが 61 年版の Webster をみるとこの区別がないのです．ただし，Webster のこの辞典は，できたときからたいへんいろいろな人から批判されております．なぜかというと一言でいえばこの辞書は非常に自由主義的なのです．ということは，現実に使われていることばを全部入れようという態度をとったわけです．だからさっきいった，間違いでも 50% 以上の人が使っていれば入れてしまうという方針でつくられた辞書なんです．だからこういうものが入ってしまうわけです．

6. We have to approach this case from a *different* angle *than* previous one.

これは教養のある人はあまり使わないかもしれないけれども，若い人とか高校生ぐらいの人がいつでも使っている．比較する場合の different の次にくる前置詞というのは than だけではなく，人によっていろいろあって different to という人もいるのです．いまから 10 年ぐらい前に読んだのですけれども，いまのイギリスの女王エリザベス2世が This is *different to* ...といって，いわゆる Queen's English というのはこんなのでいいのかとだいぶ問題になったことがあります．彼女は学歴がないわけです．ということは，家庭教師だけにしか習っていない．家庭教師がたまたまそのことについて盲点があ

った場合はそのことしか知らないわけですから，下々の人間と話し合う機会が少なければ当然そういうことになります．

7. effect と affect; further と farther; it is hoped と hopefully; infer と imply の混同

これは一つの例としてあげたのですが，綴りの間違いです．結局区別を知らないで進んでしまう．なぜ effect と affect と同じになるかというと，これは一つには意味がちょっと似ているからだと思います．Affect というのは「影響を与える」，effect というのは「効果をもたらす」．しかも残念なことには，多くの人にとっては発音も同じなんです．なぜかというと，われわれの辞書では effect は [iféktˈ], affect は [əféktˈ] となっています．ところがいまのアメリカでは accent のない母音は全部あいまい音の [ə] になる傾向があります．したがって effective という形容詞でも [əféktiv] というふうに発音する人がいる．Behind というのを [bəháind] という人がいます．ですから耳で聞いている限りではこの二つは同じなんです．

それから7番でもう一つは further と farther，これがまたよくある．われわれは farther というのは far ということばの比較級とだけしか知らないから間違える心配はないけれども，He went farther. というべきところを He went further. という．

それから，it is hoped と hopefully. これは私にとっては非常に気にかかる間違いなんです．たとえばどんな例に使うかというと，hopefully というのは正しく使うと He was waiting *hopefully* for her to come. (彼女が来てくれることを願いながら待っている) となって hopefully というのは主語の人物あるいは動物の心理状態をあらわす．ところがいまどうやって使っているかというと，例えば，The war will *hopefully* end soon. よくこういうふうに使われる．これは，間違いないんです．Hopefully というのでは戦争が希望を持っているというふうになってしまう．いいかえれば The war, I hope,... というふうにいわなくてはいけない．挿入部的にいわなくてはならない．これは文章自体の文脈に関係のない挿入部です．The war, *I hope*, will end soon. というべきところを，これは簡単でいいことはいいけれども，The war will *hopefully* end soon. 私はこういうのは直します．

その次は，案外いま広まってきている infer と imply の混同．これは意味がはっきりわかっていない人が，二つのことばのぼく然とした意味だけを理解しているだけの状態で，だれか他人が使っているのを聞いたわけです．アメリカ人やイギリス人は英語は自分の国のことばですからわれわれのように厳密には考えない．だから他人が初めて He implies that...という表現の知らないことばを使ったときに，前後関係からおそらくこういうことだろうと思ってしまう．帰ってすぐ辞書を引いて意味を確かめることはしない．だからぼく然とした印象しか持っていない．ところが，別の機会に似たような文脈で He infers that... ということばを聞いたとします．そうすると，ぼく然と自分で理解を持っている二つのことばが重なってしまう．両者が混同してしまうということになる．Imply は「ほのめかす」，infer というのは「推量する」という意味です．日本語でも「ほのめかす」と「推量」ということばはある意味ではぼく然と似ているかもしれませんけれども，英語の場合にはその二つが混同されるわけです．

8. Milton Friedman, *who* many people consider to be the leading candidate for the first Nobel Prize in economics.... (*New York Times*)

... two police detectives *whom*, Robert Wood said, had also been involved in the crime. (*New York Times*)

これは who と whom の混同ですがこれまた実に多くて困るのです．*New York Times* のような新聞でも現在のアメリカの英語の世相をあらわしているわけです．

上のほうは whom というべきところを who とした例です．Consider という他動詞の目的語ですから目的格でなければならない．下のほうは who といわなければならないところを目的格の whom にしてしまった例です．Robert Wood という人がいったんだということを挿入的に入れたわけです．ですから正しい文章としては who, Robert Wood said... というふうにならなければならない．それを *New York Times* では whom としてしまった．なぜかというと，そこに said という他動詞があるがために間違ったことなんです．

9. *Irregardless of* the outcome, we will carry out our plan.

この irregardless ということばは regardless という意味なんですが，よけいに ir- をつけてある．そして同じ意味なんです．なぜそういう間違いが起こったかというと，irrespective of という形容詞があります．「〜に関係なく」というわけで意味が同じですから，どっちだったかというときにとっさに正しい判断ができなくて，両方ともやっちゃうというか，二重否定のようなことばを，つくってしまったということになるわけです．このことばは *Webster* に出ております．ただし，non-standard と書いてあります．ですから，自分は教養あ

る人間だと思いたい人は使うなというふうに考えてもいいわけです.

こういうふうに誤用というものは非常にたくさんはびこっておりまして，それについてここにあげたようにある一定の基準を持って対処しなければならないと私は思うのです．これにはいろいろな意見があると思います．若い人たちの中には，われわれはこういうふうに話すのだということを主張して中には議論する人もいます．Cannot help but と同じでこれでいいんだという人もいますけれども，私はそれは通さないことにしています．

日本語における誤用

一言つけ加えますと，われわれは日本語を外国語として考えないから気がつかないのですけれども，日本語にも間違いがたくさんあります．それが一般の人に使われていて，われわれ話すときには不注意に使っていても，たとえば雑誌に頼まれた原稿を書くときには注意して間違えないように書きます．そこにいわゆる話しことばと注意深く書いた書きことばとの差があるわけです．

一番卑近な例が，日本語でいう「御機嫌斜め」ということばです．これは機嫌が悪い，不機嫌だというふうに使われている．これは誤用であって，本来は「ご機嫌ななめならず」ということばしかなかったわけです．ななめならずというのは御機嫌が「なみなみ」でない，普通でないということは非常に御機嫌がよろしいということです．ところがその意味しか知らない人が，御機嫌がななめでないというのは非常に御機嫌がいいのだ，じゃあ御機嫌ななめというのは，機嫌が悪いのだというふうに考えて，「あの人はきょうは御機嫌斜めだよ」というふうに使い始めた．そうすると，だれも疑わない．みんながまねする．だから広辞苑にも「御機嫌斜め」＜機嫌が悪い＞というふうにちゃんと入っている．そうなると，もちろん informal な文章の中では使っても差しつかえないと思いますけれども，そうでない場合は避けたほうがいいのではないかと思います．

それからことばがいろいろ変化していくというのは日本語でもあるのです．最近新聞を見ると，どこかの出版社から『夫につき合う方法』という本が出ました．これは妻が夫といかにうまく暮らしていくかということの秘訣を書いた本らしい．この題がおかしい．「夫につき合う」ではなくて「夫とつき合う方法」でなければいけないと思います．というのは「夫につき合う」というのと「夫とつき合う」というのは意味が違う．ところがこういうふうに考える人はほとんどいないのではないかと思います．「つき合う」ということばは日本語の辞書を引いても区別は出てこない．「夫に」という場合と「夫と」という場合とは違うという説明はおそらくないと思います．夫につき合うというのはなぜおかしいかというと，だれそれにつき合うというのは，その人がある特定の時間において何かしようとするときに一緒にそのことをするということです．たとえばAさんが映画に行こうとするとBさんがAさんにつき合って一緒に行く．そのときは，「Aさんにつき合って，映画に行った」ということになる．ところが長い交際で継続的な関係を持つというときには，「何々さんとつき合っている」というふうにいうわけです．だから，日本語の助詞もばかにならないのです．ですから，「何々とつき合う」ということばは日本語では最近特別な意味を持って出てきます．英語に get along with...という表現がありますが，これの訳語なんです．「何々とつき合う」アメリカにもそういう本 to がたくさんあります．How to get along with...とかいう，その考え方，新しい概念ですけれども，これを導入して「夫とつき合う方法」というふうにいうべきところを「夫につき合う方法」というふうに書いてしまうということになる．英語で最近よく使われるのです．たとえば自分が何か持病を持っている．その病気について心を痛め過ぎたり，ゆううつになったりせずに，その病気とつき合っていこうという気持になれ，それが一つの対症法だという考え方 How to get along with your illness というような表現があるのです．あるいは，アメリカでは大抵の親が，自分の子供たちの扱いに困っている．12 歳くらいになるとたばこを吸い始める．14,5 歳になるとマリファナを吸い始める．女の子は貞操観念がなくなってしまう．どうしていいかわからないというふうにいい出す親がたくさんいる．そういう社会においては，たとえば How to get along with your children というような考え方が，非常に大事になってくるわけです．自分の子供とつき合う方法．そういう概念が日本に導入されてきて日本語で，つき合うということばが出てきた．それが正しく使えなかった例だと思います．ところがああいうように大きな出版会社が本を出してしまうと，もうこれで夫につき合う方法というのは誤法ではない，つまり構文がおかしくないということになってしまう．多くの人が，今度はたとえば，「上役とつき合う方法」というべきところを「上役につき合う方法」という本を書くかもしれません．あるいは「部下につき合う方法」なんて．そしていまいったような間違いがだんだん広まって二つの違った表現の差が消えていくということが起こるのではないかと思います．　(p. 37 へつづく)

英米音の表記法

NAKAJIMA FUMIO
中島文雄

先頃 Oxford University Press より J. Windsor Lewis: *A Concise Pronouncing Dictionary of British and American English* (1972, xx+233 pp., £1.40) が出版されたが，その紹介と表記法の批評をかねて，私なりの対案を述べてみたい．

I.

これは書名に *concise* とあるように，簡潔な発音辞典(以下 CPD と略す)である．Jones の *English Pronouncing Dictionary* (EPD) や Kenyon and Knott の *Pronouncing Dictionary of American English* (PDAE) にくらべれば半分以下の大きさである．収容語数約 24,000 という．しかしこれらの辞書にない特色をもっており，大いに参考になる．

まず1冊で英米両音を記載しているという特色があげられる．といっても英音が主であって，米音の辞典としては物足りない．これについては後で述べる．次に，この辞典は1語に幾通りもの発音がある場合，EPD や PDAE のように，これを列挙することをせず，外国人に推薦できる発音をえらんで，なるべく一つに限っている．それが太字で印刷されており，別音をあげるときは，太字のあとに並字で記している．たとえば次のように——

reputable	**ˋrepjʊtəbl**	
applicable	**ˋæplɪkəbl**	əˋplɪkəbl
disputable	**dɪˋspjutəbl**	ˋdɪspjutəbl

EPD はイギリス英語の Received Pronunciation (RP) を記録したものであるが，本辞典は RP といわずに General British (GB) という名称を用いている．これは General American (GA) にならった命名である．Jones が RP と認めた発音は public school で教育をうけた南部イングランドの人々の発音であるから，今の時代としては RP という名称は古めかしい．それでこの辞書は GB の発音といっている．GB は GA と同じように，

> "the fluent, spontaneous, everyday usage of those educated speakers on either side of the Atlantic whose speech is of the most generally accepted kind and least restricted in terms of geographical region or social grouping" (p. vi)

を指すとされる．RP の英語のように地理的・階級的ににおいをもっていない．

第三の大きな特色は，本書の発音表記法である．特に目立つのは，長音符 /ː/ を一切用いず，その代りに発音記号の数をふやして，母音の質の区別を表わしている．EPD, PDAE と本書 (CPD) の母音表記を比較してみると次のようになる (子音表記は同じである)．

	EPD	PDAE	CPD		
1.	iː	i	**i**	see	**si**
2.	i	ɪ	**ɪ**	sit	**sɪt**
3.	e	ɛ	**e**	ten	**ten**
4.	æ	æ	**æ**	hat	**hæt**
5.	ɑː	(ɑ)	**ɑ**	arm	**ɑm**
6.	ɔ	(ɒ)	**o**	got	**got**
7.	ɔː	ɔ	**ɔ**	saw	**sɔ**
8.	u	ʊ	**ʊ**	put	**pʊt**
9.	uː	u	**u**	too	**tu**
10.	ʌ	ʌ	**ʌ**	cup	**kʌp**
11.	əː	(ɜ)	**ɜ**	fur	**fɜ(r)**
12.	ə	ə	**ə**	ago	**əˋgəʊ**
13.	ei	e	**eɪ**	page	**peɪdʒ**
14.	əu	o	**əʊ**	home	**həʊm**
15.	ai	aɪ	**ɑɪ**	five	**fɑɪv**
16.	au	aʊ	**ɑʊ**	now	**nɑʊ**
17.	ɔi	ɔɪ	**ɔɪ**	join	**dʒɔɪn**
18.	iə	(ɪə)	**ɪə**	near	**nɪə(r)**
19.	ɛə	(ɛə)	**eə**	hair	**heə(r)**
20.	uə	(ʊə)	**ʊə**	pure	**pjʊə(r)**

これは英音の母音であるから，PDAE では東部の発音としてあげられているものを取り出して，括弧に入れて示した．

この対照表を見ると，いろいろのことが問題になる．まず長音符をやめることであるが，日本人の立場からすると，これには長所と短所とある．長所は，英語の母音は質で区別されるので，日本語のように長短が弁別的でないことを明示している点である．そういう意味で長音

符廃止には賛成であるが，その長所の裏返しとして see **[si]**, too **[tu]** などの表記は短く発音されはしないかというおそれが出てくる．もちろん記号について充分の知識があれば，そういう読みちがいはないはずであるが，**si**, **tu** の母音はかなり長く発音されることを考えると，音の長短に敏感な日本人には誤解をあたえかねない．これについては後で考えを述べる．

長音符を用いない CPD は，大体 PDAE と同じようになるわけであるが，それでも両者のあいだには幾つかの差異が見られる．まず 3. の ɛ と **e** である．PDAE は e を 13. の母音を表わすのに用いている．この用法は i と ɪ, u と ʊ の区別と同じように e と ɛ を対立させているので，筋は通っているが，日本人の立場からは CPD のように **eɪ** と **e** の区別とした方が読みやすい．次に 6. の **o** であるが，これは PDAE では 14. の母音を表わす記号である．6. の母音は ɑ で表わすべきであるが，この親しみのない記号をさけてわざと **o** を採用したものと思われる．そういう約束で **o** を用いるのだと言えばそれまでであるが，7. の ɔ と並べてみると，やはり 6. の母音を表わすのに **o** を用いるのは適当でない．記号の用法として ɔ が **o** より開いた母音を表わすと考えるのが常識である．GB の *saw* の母音はかなり狭いので **o** で表わすことができよう．そこで 6. ɔ と 7. **o** とを逆にしたらと考えられる．しかしそうすると ɔ はよいとしても **o** はやはり 14. の母音を思わせるので，これで 7. の母音を表わすには抵抗を感じる．これについても後で考えを述べる．

次は 15. 16. の **ɑɪ, ɑʊ** であるが，これは従来の aɪ, aʊ に当る．これらの二重母音の第一要素は Gimson では aɪ, ɑʊ のように書きわけられている．しかし 15. の母音の方が前寄りであり，16. の母音の方が後寄りであることは，第二要素の ɪ や ʊ でわかることであるから，Gimson のようにわざわざ書きわける必要はない．それなら aɪ, aʊ にするか ɑɪ, ɑʊ にするかであるが，この場合だけに a という別の記号を持ち出すより，5. の記号である **ɑ** を用いた方が記号の節約になるし，発音の面でも不都合はない．CPD のやり方でよい．もう一つの問題は 19. **eə** であるが，これも 3. を **e** で表わすならば 19. は **eə** でよい．PDAE のように 3. の母音を ɛ とするなら 19. は ɛə となる．EPD のように 3. e, 19. ɛə と区別する必要はない．私は **eə** に賛成する．

本書の強勢符は principal stress /ˎ/ と subordinate stress /ˈ/ の二つで，強勢のある音節の前におかれる．これは Roger Kingdon の "tonetic stress-mark" を借用したもので，/ˎ/ には強勢と falling tone が同時に表わされており，/ˈ/ には強勢と level tone が表わされている．これは EPD や PDAE の primary stress /ˈ/ と secondary stress /ˌ/ に大体相当するわけであるが，上記のように単なる強勢符ではないから，その用法も同じとは言えない．二音節以上から成る単語は，どれかの音節が強く発音されるが，その主なものは下降調をもって発音されるので /ˎ/ で表わされる（文中にあるときは，脈絡により強勢も音調も変わりうるが，これは今の問題ではない）．これに対し他の強勢ある音節は level tone で発音される．これが /ˈ/ で表わされる．たとえば misapprehension は **ˈmɪsˈæprɪˎhenʃn** となる．本書の解説（p. xviii）によると /ˎ/ は絶対的なものであるが，その前にくる /ˈ/ は相対的なもので，上の語も速く発音すれば，2 番目の /ˈ/ は落ちて **ˈmɪsæprɪˎhenʃn** になると言っている．本文には ˈ—ˈ—ˎ— —の強勢型だけあげてある．これが EPD では ˈ—ˌ—ˈ— — となっており，PDAE では ˌ— —ˈ— — となっている．これらの辞書では強勢を primay /ˈ/ と secondary /ˌ/ とに区別するのであるから，CPD の /ˎ/ と primary stress は一致するが，あとはちがってくる．EPD の表記では二つの /ˈ/ があることになり，PDAE では **æprɪ** のところが弱音節ということになる．しかしここには **æ** という full vowel が現われているので，弱音節ではない．CPD の表記法の方がすぐれていると思う．

次に /ˎ/ のあとに来る音節であるが，ここには /ˈ/ が現われないのは当然として，low tone の強勢 /ˌ/ (Roger Kingdon の記号）は現われ得る．しかし CPD は /ˌ/ を一切用いない．たとえば newspaper **ˎnjuspeɪpə(r)**, manhandle **ˎmænhændl** のように．第 2 音節に /ˌ/ のあることは，そこに full vowel が用いられていることからわかるとの考えに基づくものであろう．Roger Kingdon の *The Groundwork of English Stress* (1958) を見ると，この本は ˈmisˎcalcuˌlate のように，普通の綴字のままで強勢符をつけているので，/ˎ/ /ˈ/ /ˌ/ の 3 記号を必要とするのであるが，発音辞典ならば full vowel か reduced vowel かは表記法でわかるので，/ˌ/ を用いないでもわかる（**ˈmɪsˎkælkjʊleɪt** のように）．EPD や PDAE は seconday stress /ˌ/ を用いるから newspaper, manhandle は ˈ—ˌ— — となっており，miscalculate は EPD ˈ—ˈ— — —，PDAE —ˈ— —ˌ— となっている．

CPD では 2 語の並列からなる複合名詞も最初の強音節に /ˎ/ が置かれて，あとに /ˌ/ は用いられない．たとえば night-portor **ˎnɑɪt pɔtə(r)**, stock exchange **ˎstɔk ɪkstʃeɪndʒ** のように．EPDでは前者が ˈ—ˌ— —

[ˈ—ˈ— —], 後者が ˈ— —ˌ— となっている．CPD は次の 2 語を強勢型で区別している——

stock car (*railroad*) **ˋstok kɑ(r)**

stock car (*racing*) **ˋstokˋkɑ(r)**

複合名詞はみな ˋ— — の強勢型になるとはかぎらず，ˈ—ˋ— の型もあることがわかる．また night watchman を見ると **nɑɪtˋwotʃmən** とあるが，これは ˈ—ˋ— — の誤植ではなかろうか．EPD では ˈ—ˈ— — となっている．特に名詞をいくつも並べて臨時に造った複合名詞の場合 ˋ— … という型は不可能であろう．生成文法の音形論の規則によると traffic safety committee chairman のような複合名詞の強勢型は /1432/ になるはずであるが，これは ˈ—ˈ—ˈ—ˋ— でよいのではないか．これには 2 番目の /ˈ/ は full vowel のまま low tone に下げられることが含意されている．上の misapprehension と同じに説明される．

さらに CPD の特色として挙げてよいのは，単語内の音節の切れ目を，発音上の注意として，ときにハイフンで示していることである．それは biped **ˋbɑɪ-ped** のような場合で，ハイフンによって **bɑɪ** の母音が eye の母音と同じく開音節における音価をもち，type **tɑɪp** の母音のように子音で閉じられた発音でないことを示している．同様に cartridge が **ˋkɑ-trɪdʒ** と表記してあるのは，この **tr** が trip のそれのように一種の破擦音になるもので，heart-rending の **t** と **r** の連続とはちがうことを表わしている．明らかに複合語である nightshirt のような場合は，EPD も ˈnait-ʃəːt とハイフンを用い，PDAE は ˈnaɪtˌʃət と強勢符で区切っているが，biped や cartridge には区切りがない．また CPD は bedrock を ˈ**bedˋrok**, bedroom を ˋ**bedrom** と表記し，後者には *with* **dr** *as in 'dry'* と注をつけている．上の cartridge の **tr** と同じ場合である．それから rectangle **ˋrektæŋgl** にも *with* **t** *as in 'tangle', not as in 'correct angle'* と注をつけている．この *t* が音素 /t/ の語頭に現われるときの音であって語末に現われるときの音ではないことを注意しているのである．EPD では ˈrekˌtæŋl [ˈrektˌæŋ-] と両方の発音が示されている．

以上が大体 CPD の特色である．次に，これが最新の発音辞典として，英語の発音の近時の傾向をどう反映しているか調べてみよう．序文 (p. xvi) を見ると，EPD は more/mɔː [mɔə]/store/stɔː [stɔə]/ のように，7. の母音 **ɔ** に /ɔə/ の別音を認めているが，/ɔə/ は今では一部の老人に用いられるだけなので，本辞典では記載しないとある．それから soft, loss, frost, cloth などの母音は，EPD では /ɔ [ɔː]/ と二つの発音があげられているが，本辞典は **o** 一つにしたと述べている．米音では 7. の **ɔ** であるが，英音としては，今では "extremely unusual" だそうである．ただし off は例外で **of ɔf** すなわち/ɔf, ɔːf/ の両方が認められている．

同じような変化として，EPD で -shire/ʃiə [ʃə]/とあるのが本書では **-ʃə(r)** だけになっている．米音では古い **-ʃɪər** が優勢で，ただ New Hampshire は **nuˋhæmpʃər** だという．それから were の強勢形に EPD は wəː [wɛə] と別音を認めているが，CPD では **wə(r)** だけになっている．それから外国名の表記が原音に近くなっているのも一つの変化である．たとえば Lyons が **ˋliõ ˋlɑɪənz** のように，原音が先で，英語訛りの発音が後になっている．EPD では順序が逆である．Marseilles は **mɑˋseɪ** で，EPD のように mɑːˈseilz ではない．また pension (boarding-house) は EPD では ˈpãːŋsiõːŋ と英語訛りのフランス発音が記されているのが **ˋpõsɪõ** とすっきりしている．しかし Paris は **ˋpærɪs** だし Rheims (F Reims) は **rimz** で変わっていない．しかし原音に近くというのが第一次大戦ごろからの傾向で今では Majorca は **mɑɪˋjɔkə** と発音されるのが普通だという (p. xv)．EPD では məˈdʒɔːkə [məˈjɔː-]である．

外国語といえば，英語に入ったラテン語はどうかと a priori を引いてみたら ˈ**eɪ prɑɪˋɔrɑɪ** としてある．EPD はこの発音のあとに [ˈɑːpri(ː)ˈɔːriː] なる原音に近い発音も示している．もうひとつ quasi- を見たら ˈ**kweɪsɑɪ**-zɑɪˈkwɑzɪ とある．EPD では ˈkwɑːzi(ː) がさきで，あとに ˈkweisai が来る．ラテン語の読み方は英語式読み方に逆戻りしたのであろうか．

さて，これまでは英音を主にして見てきたが，ここで米音を検討することになった．本稿の最初に述べたように，CPD は英米語の発音辞典と称しているが英音が主である．多くの項目は英音だけしか記していない．その場合は発音記号を読みかえることによって米音になることが予定されているのである．たとえば hot **hot** とあれば，米音は **hɑt** であることが含まれている．また bird **bəd** とあれば米音では ɜ を ɚ と読みかえなければならない．GA では r 音をひびかせるのが一般的であるが，これも特に表記されていない．その種類の語の表記は，次のように GB の発音だけが示されている．

star	**stɑ(r)**	store	**stɔ(r)**
fur	**fə(r)**	fear	**fɪə(r)**
care	**keə(r)**	pure	**pjʊə(r)**

これらに見られる (**r**) は，あとに母音が来たとき発音される 'linking *r*' を表わすもので，米音の /r/ ではない．母音のあとに来る米音 /r/ は半母音（渡り音）で，上記

の諸語には米音としての表記が必要と思われるが，それがない．ただし /r/ のあとにさらに子音が来るときは，一々米音を記している．

farm　**fɑm**　$ **fɑrm** ($ は米音のしるし)
ford　**fɔd**　$ **fɔrd**
beard　**bɪəd**　$ **bɪərd**
gourd　**gʊəd** gɔd　$ **ɡɔrd** gʊərd

この辞書は過去形などはあげていないので cared の表記は見られないが，**keəd** $ **keərd** になるはずである．問題は ɜ の場合であるが，上述のように bird **bɜd**, world **wɜld** とあるだけで bɜd, wɜld はあげてない．これは米音表記としては，はなはだ不完全である．ɜ や ə の音をどう表記してよいかは，後で述べることにする．

大体 CPD は米音を従属的にしか見ていない．米音については，表紙の見返しに掲げられた英米の母音図について，簡単な注があるだけである．その注で言っていることは，6. の **o** は米音にはなく，これは **ɑ** であること，10. の **ʌ** は米音では **ə** になるから **ʌ** という記号を省いてもよいこと，18. **ɪə**, 19. **eə**, 20. **ʊə** は GA ではいわゆる二重母音ではないから，GA の母音図から除いてあること，などである．わが国の英和辞典は米音を主にする傾向にあるが，この立場からすると，本辞典の表記法では不充分である．米音の表記法を考える前に，本辞典の記している米音を少し検討してみよう．

すでに見たように，

cross　**kros**　$ **krɔs**

とあれば，推薦される発音が英米でちがうことが表わされている．その場合は両方が太字である．

roof　**ruf**　$ rʊf

とあれば，米音でも **ruf** が第一で，$ rʊf (並字で印刷) は別音であることを表わす．

room　**rʊm**　$ £ **rum**　*etc*

とあれば，英音では **rʊm**，米音では **rum** が第一音であるが，rum は英音 (£) でも別音として行なわれていること，それから *etc* として米音でも英の第一音 **rʊm** が別音として行なわれていることを示す．これだけの約束を心得た上で，もう少し語を拾ってみると——

half　**hɑf**　$ **hæf**
hero　**ˋhɪərəʊ**　$ ˋhirəʊ
aspirant　**ˋæspɪrənt**　$ £ **əˋspɑɪərnt**　*etc*
renaissance　**rɪˋneɪsns**　-sɔ̃s
　　$ **ˋrenəsɑns**　ˈrenəˋsɑns
missile　**ˋmɪsɑɪl**　$ **ˋmɪsl**
fertile　**ˋfɜtɑɪl**　$ **ˋfɜtl**
juvenile　**ˋdʒuvənɑɪl**　$ **-nl**
senile　**ˋsinɑɪl**　$ ˋsinl
mercantile　**ˋmɜkəntɑɪl**　$ **-til**　-tɪl　*etc*
mobile　**ˋməʊbɑɪl**　$ **məʊbl**
docile　**ˋdəʊsɑɪl**　$ **ˋdosl**
library　**ˋlɑɪbrɪ**　$ **-rerɪ**　etc
ordinary　**ˋɔdnrɪ**　$ **ˋɔrdnerɪ**
primary　**ˋprɑɪmrɪ**　-mərɪ　$ **ˋprɑɪmerɪ**　etc
necessary　**ˋnesəsrɪ**　-sɪs-　$ **-əserɪ**
necessarily　ˈ**nesəˋserəlɪ**　£ ˋnesəsrlɪ
dormitory　**ˋdɔmɪtrɪ**　$ ˋdɔrmɪtɔrɪ
laboratory　**ləˋborətrɪ**　$ ˋlæbrətɔrɪ
obligatory　**əˋblɪgətrɪ**　$ **-tɔrɪ**　ˋobligə-
transitory　**ˋtrænsɪtrɪ**　-nz-　$ **-ɪtɔrɪ**　£ trɑn-

以上のように CPD は一応 GA の発音を扱っており，これについては *Webster's Third New International Dictionary* (Web-3 と略す) の発音の編者 Edward Artin に負うところが多いと序文で述べている．しかし何といっても GB の発音表記が主になっている．英米両音を対等に扱うことのできる表記法が少なくともわれわれ日本人の立場からは要求される．

II.

すでに述べたように，本書の母音表記法は長音符を用いずに，母音の質の変化に応じて別の記号を当てることにしている．すなわち

EPD　iː　i　ɑː　ɔː　u　uː　əː
CPD　**i**　**ɪ**　**ɑ**　**ɔ**　**ʊ**　**u**　**ɜ**

という対照をなし，CPD は長音符を使わない代わりに，**ɪ ʊ ɜ** と三つ記号がふえている．一方 EPD の /εə, ai, au/ を **eə**, **ɑɪ**, **ɑʊ** としたので ε と a の記号がへり，結局記号の数は一つふえたに止まる．これはむしろ記号の簡素化とも言えるが，日本人にとっては必ずしも読みやすいとは言えない．私は長音符の廃止に賛成であるけれども，自由母音 (free vowels) のしるしとして /ˑ/ を用い，1. iˑ, 5. ɑˑ, 7. ɔˑ, 9. uˑ, 11. əˑ としたら EPD の記号に慣れている人にも抵抗感が少なくてすむのではないかと考える．そうすると ɜ は不要になり，また抑止母音 (checked vowels) の **ɪ**, **ʊ** も **i**, **u** ですませることができる．さらに 6. **o** は前に述べたように [ɒ] の音価を表わすには不適当な記号であるから，EPD と同じ ɔ にする．そうすると **o** という記号は要らなくなる．しかしながら 7. の英音は，これに対応する米音にくらべて，かなり狭い母音であるから，ɔˑ を米音にあて，英音は oˑ にしたらと考える．それから英の **əʊ** は米 ou とする．Web-3 の発音解説によると，əu はアメリカの

一部，特に philadelphia 地区では用いられるそうであるが，GA としては ou がよい．米音としては 10. ʌ は ə でよく，11. の英音 əˑ に対する米音は後述の理由により ər で表わすことにする．

以上の提案を表にしてみると次のようになる．

	CPD	試案 英	試案 米	
1.	**i**	iˑ	iˑ	see /siˑ/
2.	**ɪ**	i	i	
3.	**e**	e	e	
4.	**æ**	æ	æ	
5.	**ɑ**	ɑˑ	(ɑˑ)*	arm /ɑˑm $ ɑrm/
6.	**o**	ɔ	ɑ	got /gɔt $ gɑt/
7.	**ɔ**	oˑ	ɔˑ	saw /soˑ $ sɔ./
8.	**ʊ**	u	u	
9.	**u**	uˑ	uˑ	too /tuˑ/
10.	**ʌ**	ʌ	ə	cup /kʌp $ kəp/
11.	**ɜ**	əˑ	ər	fur /fəˑ $ fər/
12.	**ə**	ə	ə	
13.	**eɪ**	ei	ei	
14.	**əʊ**	əu	ou	home /həum $ houm/
15.	**ɑɪ**	ɑi	ɑi	
16.	**ɑʊ**	ɑu	ɑu	
17.	**ɔɪ**	ɔi	ɔi	
18.	**ɪə**	iə	i(ə)r	near /niə $ ni(ə)r/
19.	**eə**	eə	e(ə)r	hair /heə $ he(ə)r/
20.	**ʊə**	uə	u(ə)r	pure /pjuə $ pju(ə)r/

試案に用いられている記号は CPD より **ɪ, ʊ, ɜ** だけ少なく，EPD とくらべても ɛ と a がない．記号数はもっとも少ない．

試案の米音表記については多少の説明を必要とする．5. の英音 /ɑˑ/ は米音の何に対応するかというと arm, farm などでは /ɑr/ である．この母音は 6. の /ɑ/ と同じで，Web-3 は /ä̈/ という記号で表わしている．5. と 6. が同じ母音とすると balm も bomb も /bɑm/ となってしまう．アメリカ人にとっては，それで問題はないのであろうが，われわれの表記としては英 /bɑˑm/，米 /bɑm/ としたのでは不釣合な感じがする．同様に father が /fɑˑðə/ と /fɑðər/，spɑ が /spɑˑ/ と /spɑ/ と書きわけられることになり，語末にくる自由母音に /ˑ/ がないのも気になる．そこでわれわれとしては bomb とか cod などの母音は抑止母音 /ɑ/，spɑ や father などの場合は自由母音 /ɑˑ/ として書きわけた方がよいと思う．Web-3 によると，bomb や cod の類には /ä̈/ 音しかあげてないが，balm, father には /ä̈/ のつぎに /ȧ/ の記号があげてある．これは東部の発音で /ä̈/ よりも前寄りの母音，すなわち英音 /ɑˑ/ と近似の音である．従ってわれわれが米音として balm /bɑˑm/, bomb /bɑm/ と区別しても誤りということはない．綴字が o の場合は /ɑ/，綴字が a, al の場合は /ɑˑ/ として区別したい．この区別は普通のアメリカの辞書が cod, bomb などの母音を /ŏ/，calm, balm などの母音を /ä̈/ で表わしていることによっても支持されると思う．

GA 表記については，そり舌音の /r/ が問題である．これは母音のあとにつくときは渡り音となり，あとに母音が来るときは子音的になる．そして母音間に /r/ があるときは，上の両方の性質が現われる．GB の /r/ は母音のあとでは発音されず，母音間では日本語のラ行の子音のような弾音になるので，GA の発音とはかなりちがう．英米両音を対等に表記しようとすると /r/ の扱いに工夫を要する．

上の対照表で 11. ɜ を英 /əˑ/，米 /ər/ としたが，この /ər/ は /r/ の母音化したもので，PDAE が ə で表わしているように，一つの音である．しかしこれを /ər/ で表わすことは，記号の経済ということのほかに，/ɑr, ɔr/ と同型になって以下に見るような利点があるのである．

まず /r/ を落とす GB と /r/ をひびかせる GA の発音表記をあげる——

GB	GA	
ɑˑ	ɑr	star /stɑˑ, $ stɑr/, farm /fɑˑm, $ fɑrm/
oˑ	ɔr	store /stoˑ, $ stɔr/, form /foˑm, $ fɔrm/
eˑ	ər	stir /stəˑ, $ stər/,

/r/ が母音間にくると，英音では linking *r* が現われて

starry /ˋstɑˑri/　storage /ˋstoˑridʒ/
stirring /ˋstəˑriŋ/

のようになる．これに対する米音はどう表記するか．ただ /ˋstɑri/, /stɔridʒ/, /ˋstəriŋ/ すればよいというわけには行かない．GA における母音間の /r/ は，上述のように前の音節にも後の音節にも関係するので，このような表記法では，英音の /r/ と同じ扱いになるので，正しい米音を表わすことができない．そこで私は，CPD が **ˋbɑɪ-ped** のように音節間にハイフンを入れて，前の母音の性格をはっきりさせているように /r/ のあとにハイフンをいれて，米音 /r/ を表記することにしたい．すなわち次のようになる——

starry　　\stɑ·ri, $ \stɑr-i·
　　(語末の -y は $ /-i·/ とする)
storage　　\sto·ridʒ, $ \stɔr-idʒ
stirring　　\stə·riŋ, $ stər-iŋ

CPD はこの区別をしないで **\stɑrɪ, \stɔrɪdʒ, \stɛrɪ** で英米両音を表わしている．特に最後の ɜ の用法に問題がある．CPD は furry を **\fɜrɪ** として英米音を兼ねさせ，一方 hurry には **\hʌrɪ $ \hɜɪ** と米音をあげている．米音 **\hɜɪ** の ɛ は本来 ɚ であるべきもので，PDAE のように ˈhɜɪ と記すなら，わかるのであるが，furry **\fɜrɪ** の場合には **r** があり hurry **\hɜɪ** の場合には **r** がないというのは，表記法として首尾一貫していない．これらの語は試案のように，

furry　　/\fə·ri, $ \fər-i·/
hurry　　/\hʌri, $ \hər-i·/

とすれば，はっきり書きわけられる．なお二，三の例を CPD からあげて比較対照すると，

worry　　**\wʌrɪ $ \wɜɪ**　　\wʌri $ \wər-i·
courage　　**\kʌrɪdʒ $ \kɜɪdʒ**　　\kʌridʒ $ \kər-idʒ
nourish　　**\nʌrɪʃ $ \nɜɪʃ**　　\nʌriʃ $ \nər-iʃ
furrow　　**\fʌrəʊ $ \fɜəʊ**　　\fʌrəu $ \fər-ou

母音の前の ər を /ər-/ とすることは，Web-3 も /ər·/ としていることと一致する．もっとも Web-3 は /ɑr/, /ɔr/ の場合はあとに母音が来ても /·/ をつけていないが，われわれとしては米音 /r/ を英音 /r/ から区別するために，母音間の米音 /r/ にはハイフンをつける必要がある．そこで次のような表記になる．

mirror　　\mirə　$ \mir-ər
merry　　\meri　$ \mer-i·
carry　　\kæri　$ \kær-i·
sorry　　\sɔri　$ \sɑr-i·, \sɔr-i·

最後の語は CPD では **\sorɪ** $ \sɔrɪ となっている．われわれは CPD の **o** を /ɔ/ としたのであるから，英音 /\sɔri/, /his\tɔrikl/ と区別するためにも，米音は，/\sɔr-i·/, /his\tɔr-ikəl/ とハイフンをつけて区別する必要がある．

英音の 18. **ɪə**, 19. **eə**, 20. **ʊə** は綴字に r をもっているが，これらに対応する米音は，どう表記したらよいか．CPD では near **nɪə(r)**, hair **heə(r)**, pure **pjʊə(r)** とするだけで，米音の表記を兼ねさせているが，われわれの立場からは，これで済ませることはできない．これらの語の米音は，Web-3 によると，それぞれ/nir, niər/, /hær, hæər, her, heər/, /pjur, pjuər/ である．それでわれわれは先の対照表に示したように 18. i(ə)r, 19. e(ə)r, 20. u(ə)r としたのである．括弧の (ə) を用いて二通りの発音を表わすことは Web-3 もやっていることである．Web-3 は 19. に /æ(ə)r/ の発音を第一にあげているが，われわれはこれを別音としてあげることにし，19. の代表的な母音は /e(ə)r/ であるとしておく．

次の問題は，これらの /r/ のあとに母音が来た場合である．この場合は (ə) が現われなくなるので，18. /ir-/, 19. /er-/, 20. /ur-/ と記せばよいのであるが，そのほかに /i·r-/, /e·r-/, /u·r-/ の発音もあるので，私はこれを /i(·)r-/, e(·)r-/, /u(·)r-/ と表記することにする．19. には /ær-/ の発音もある．例をあげると

clearance　　\kliərəns　$ \kli(·)r-əns
hero　　\hiərəu　$ \hi(·)rou
vary　　\veəri　$ \ve(·)r-i·, \vær-
fairy　　\feəri　$ \fe(·)r-i·, \fær-
curate　　\kjuərit　$ \kju(·)r-it
jury　　\dʒuəri　$ \dʒu(·)r-i·

このような表記法により Mary の米音には(1)\me·r-i·, (2)\mer-i·, (3)\mær-i· の種類あることが示される．(2)の発音は merry と同じであり，(3)の発音は marry と同じである．

米音表記の場合に母音間の /r/ のあとにハイフンをつけることは，煩わしいことではあるが，英音と対照するためには，止むをえない．たとえば berry の英音 /\beri/ では，/r/ は舌先で歯茎を一回たたいて発する弾音 (alveolar tap)である．米音では Betty のように母音間にある /t/ は軟音になって [d] のように発音され (Web-3 は /d·/ で表わしている)，これがさらに弾音の /r/ になることがある．従って米音 /\beri·/ は Betty のことになってしまう．これに対し berry を /\ber-i·/ と表記すればそり舌の /r/ であることがはっきりする．Perry はペリーと書くよりペ゛リーの方が米音に近い．英音と対照する必要のない場合は，ハイフンを省くという約束を設けて，簡素化してもよいが，その場合でも /ər-/ だけはハイフンをとるわけにはいかない．/ər/で一つの母音であることを表わすためである．Web-3 は /ər·/ と /ə·r/ とを区別している．

18. の英音/iə/ は綴字に r のない idea, ideal にも現われる．/iə/ のない米音では，これらの語は 3 音節になって /ai\di·ə/, /ai\di·əl/ と発音されるのが普通である．弱音節においても同様に次のような /i·/ 音が現われる．

serious　　/\si(·)r-i·əs/
material　　/mə\ti(·)r-i·əl/
various　　/\ve(·)r-i·əs, vær-/
barbarian　　/bɑr\be(·)r-i·ən, -\bær-/
curious　　/\kju(·)r-i·əs/

glorious /ˎglɔr-iˑəs/
furrier /ˎfər-iˑər/

CPD ではこれらが **ˎsɪərɪəs**, **ˎveərɪəs**, **ˎkjuərɪəs** のように **-ɪəs** となっており，EPD では ˈsiərĭəs, ˈvɛəĭəs, ˈkjuərĭəs のように -ĭəs なっている．この ĭə は [jə] のような rising diphthong を表わしている．Web-3 や AHD (*American Heritage Dictionary*) では ēəs になっており，これをわれわれは /-iˑəs/ としたわけである．同じことが /uə/ についても言える．すなわち，

	CPD	EPD	試案
arduous	**ˎɑdjʊəs**	ˈɑːdjŭəs	$ ˎɑrdʒuˑəs
influence	**ˎɪnflʊəns**	ˈinflŭəns	$ ˎinfluˑəns

/ŭə/ は [wə] のような rising diphthong で，Web-3 に示された発音は (われわれの表記法に移せば) ardous /ˈɑrdʒəwəs/ である．しかし influence の方は /ˈinˌfluˑən(t)s/ のように secondary stress をおき /uˑ/ を用いている．われわれは，このような区別をせず，一般のアメリカ辞書がやっているように /uˑ/ を用いればよいであろう．/iˑ/ /uˑ/ はそれぞれ [ij] [uw] のように発音されるから，強勢のない場合にはに [j] [(ə]w] 近づく．/iˑ, uˑ/ の /ˑ/ は自由母音のしるしであって長音符ではないことに留意すべきである．

アメリカの辞書は horse /hɔrs/, morn /mɔrn/ には /ɔ/ の音しかあげてないが，hoarse, mourn には /hɔrs, hors/, /mɔrn, morn/ と二通りの発音を示している．語原的に /ɔr/ と /or/ と区別されたものが，/or/ をもつ語が /ɔr/ の発音をも発達させたので，この種の語は /or/ と /ɔr/ と両方の発音が記されているわけである．われわれとしては /ɔr/ に統一して，/or/ を無視してしまえば簡単である．そうしてもよいのであるが，アメリカの辞書は 2 種類の発音を丹念に区別しているので，一応このことは心得ておく必要がある．/ɔr/ だけの語と /ɔr, or/ の発音をもつ語をいくつかあげておく．

/ɔr/ cord, cork, gore, gorge, horse, lord, morn, norm, roar, sort, stork, storm, etc.

/ɔr, or/ board, core, course, court, courtier, door, force, ford, glory, hoard, hoarse, lore, more, mourn, pore, pour, soar, sore, store, story, tore, torn, wort, worn, etc.

イギリス英語にもこの区別はあったのであるが，今は無視されている．上の諸語はいずれも英音では /oˑ/ で表わすことができる．

最後に弱音節の母音について英米の発音を比較してみる．EPD とアメリカの辞書とを比較して気のつくことは，前者が /i/ で表わしている音が，しばしば /ə/ になっていることで，特に二つの強音節にはさまれたとき /ə/ が出る．たとえば valid, timid は英米共に /ˎvælid, ˎtimid/ であるが，val*i*date, intim*i*date は EPD や CPD では /i/ を用いているがアメリカの辞書では /ˎvæləˌdeit, inˎtimədeit/ となる．も少し例をあげると，これだけの語からも EPD には /i/ が多く，AHD では /ə/ が圧倒的であり，CPD はその中間ということがわかる．上の語のうち attitude と vigil の *i* は Web-3 によると /ə̇/ となっている．これは [ɪ] と [ə̇] と両方の発音のあることを示す記号である．われわれとしては綴字が i で，Web-3 に /ə̇/ とあるときには /i/ と表わした方がよいであろう．そうすると上の諸語の米音は，われわれの表記法では次のようになる．

	EPD	CPD	AHD
competence	ˈkɔmpitəns	**-pət-** -pɪt	-pət-
compliment / complement	ˈkɔmplimənt	**-lɪm** -ləm-	-ləm-
California	ˌkæliˈfɔːnjə	**-ləf-** -lɪf-	-ləf-
attitude	ˈætitjuːd	**-tɪt-**	-tət
vigil	ˈvidʒil	**-ɪl**	-əl
university	ˌjuːniˈvəɪsiti	**-sətɪ**, -stɪ	-nəv, -sətē
individuality	ˌindiˌvidʒuˈæliti	**-lətɪ**	-dəv-, -lətē

competence /ˎkɑmpətəns/
compliment, complement /ˎkɑmpləmənt/
California /ˈkæləˎfɔrnjə, -ˎfɔrniˑə/
attitude /ˎætitjuˑd/
vigil /ˎvidʒil/
university /ˈjuˑnəˎvərsətiˑ/
individuality /ˈindəˈvidʒuˑˎæləti/

最後の語は Web-3 では ˌindəˌvijəˈwaləd·ē となっているが，ここに [w] の出るのは，上に arduous について述べたことから理解されよう．

/ə/ の用法に関連して問題になるのは，音節をなす /l, m, n, r/ の表記法である．アメリカの辞書は able

/ˋeibəl/, -able /-əbəl/ のように syllabic /l/ を /əl/ と表記することが多い．また

	EPD	CPD	AHD
principle	ˈprinsəpl [-sip-]	ˋ**prɪnsəpl-abl**	-səpəl
principal	ˈprinsəpəl [-sip-]		

のように /pl/ と /pəl/ のちがいが見られる．（この両語は発音が同一のためか，CPD p. xviii に *principle* stress という誤植が見られる．）日本人の立場からはEPD や CPD のように /ˋeibl/, /-əbl/, /ˋprinsəpl/ でよいと思うが，CPD の

moral　ˋ**morl** $ ˋ**mɔrl** etc

という表記は，アメリカの辞書に倣って /ˋmɔrəl, $ ˋmɔr-əl, ˋmar-əl/ としたい．同様に上に CPD から引用した -ile に終わる語の表記法も，CPD のままでは読みにくい．また -ile の米音は一様でない．Web-3 や AHD を参考にして書き直して見ると，

missile	/ˋmisəl/
fertile	/ˋfərtᵊl/ (小さな ᵊ は Web-3 の用法)
juvenile	/ˋdʒuˑvənəl, -nail/
senile	/ˋsiˑnail, ˋsenail/
mercantile	/ˋmərkəntiˑl, -tail, -til/
mobile	/ˋmoubəl, -iˑl, -ail/
docile	/ˋdasəl/

のようになる．

/m/ も音節をなすときはアメリカの辞書では /əm/ である．たとえば rhythm /ˋriðəm/, chasm /ˋkæzəm/, ism /ˋizəm/ となっている．CPD では ˋ**rɪðm**, ˋ**kæzm**, ˋ**ɪzm** である．強勢符がついているから，これらが2音節の語であることがわかる．/n/ も同様で button, cotton は ˋ**bʌtn**, ˋ**kotn** である．Web-3 は小さな ᵊ を入れて -tᵊn としているけれども，AHD などは無しですませている．われわれとしては，以上の語は /ˋriðm, ˋkæzm, ˋizm, ˋbʌtn, ˋkatn/ と表記すればよいと思う．さきにあげた ordinary の CPD における表記 ˋ**ɔrdn̩erɪ** も /ˋɔrdner-iˑ/ でよい．

/r/ の syllabic の用法は library, primary の英音 ˋ**laɪbr̩ɪ**, ˋ**praɪmr̩ɪ** などに見られるが，米音ではここに full vowel が用いられるから /ˋlaibreo-iˑ, ˋpraimer-iˑ/ となることは言うまでもない．ついでに副詞の primarily の発音は /praiˋmer-əliˑ, ˋpraimer-əliˑ, necessarily は /ˈnesəˋser-əliˑ/ が普通である．また dormitory の類の米音は，われわれの表記法によると /ˋdɔrmətɔr-iˑ, -tor-iˑ/ となる．

以上の説明によって，比較的少数の記号で GB と GA とを表記できることが理解されたと思う．復習のつもりで，もう一度母音の記号を英米対照して記しておく．

英			米		
iˑ		uˑ	iˑ		uˑ
i	əˑ	u	i	ər	u
ei	ə	əu	ei	ə	ou
e	ʌ	oˑ	e		ɔˑ
æ	aˑ	ɔ	æ	(aˑ)	a
ai	au	ɔi	ai	au	ɔi
{iə, iər-	{eə, eər-	{uə, uər-	{i(ə)r, i(ˑ)r-	{e(ə)r, e(ˑ)r-	{u(ə)r, u(ˑ)r-

（津田塾大学教授）

(p. 29 よりつづき)

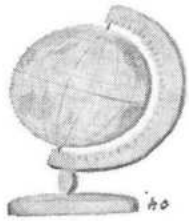
それから，たとえば「あの先生にうちの学校に来てもらってもあの人がどれだけの貢献をできるかどうか」といっておかしくないと思われるでしょう．ところが論理的にはおかしいのです．どれだけできるかということと，あの人が貢献できるかどうか，とは別の問題なんです．ところがわれわれはよくうっかり話していて二つを混同してしまって「あの人がどれだけ貢献できるかどうかはわからない」といって平気でいます．

そういうふうにことばというものは必ずしもいつも正しく使われるとはかぎらない．したがって冷静に考えれば間違いと思われるものが非常に普遍的に使われて，それがいわゆる有機体としてのことば全体の変化の一部分となっていくということがいえると思います．（1973年1月27日 ELEC 月例研究会における講演の速記）

（ジャパンタイムズ編集局長）

Solution to the CROSSWORD PUZZLE on Page 67.

C	A	T	■	■	B	R	O	■	B	I	G
O	■	A	F	T	E	R	N	O	O	N	■
M	A	P	■	H	A	■	E	■	W	■	A
E	V	E	N	I	N	G	■	F	L	A	G
■	E	■	I	N	S	I	D	E	■	N	A
S	N	A	C	K	■	R	O	D	E	■	I
■	U	■	E	■	A	L	L	■	G	U	N
N	E	A	R	E	R	■	L	■	G	■	S
O	■	U	■	■	E	L	S	E	■	S	T
R	E	T	U	R	N	■	■	A	R	T	■
T	■	O	■	A	T	L	A	S	■	O	P
H	A	S	N	T	■	■	S	T	E	P	S



ことばとコミュニケイション

——日本人の場合を中心に——

KUNIHIRO MASAO
國弘正雄

ご紹介にあずかりました國弘でございます．伝統ある御大学の語学教育研究所のお招きを受け，連続講演の一つを担当するようご指名を賜わりまして，光栄これにすぎるものはございません．またただいまは，小林英夫博士の文体論に関する講演を拝聴いたし，大へんに勉強になりました．ただもとより私は小林先生のような碩学ではございません．したがって学問的に重厚なお話しを申し上げるのは私の分にすぎたことで，まずその点をあらかじめお詫びしておきます．

もし私になにか申し上げる資格があるといたしますれば，対外的な意志疎通の場で若干しごとをしてきた，という点でありましょう．それに文化人類学を勉強して参った一人として，文化と言語の問題について少しく物を考えてきたということでありましょう．ご案内のように，アメリカ版の文化人類学では，言語は文化の重要な一環とみなされ，現に文化と言語 (Language & Culture)，ないしは言語人類学というような領域がほぼ独立して存在している位であります．また，私が長年したがって参りました同時通訳もしくは会議通訳という作業は，言語と文化，ないしは異文化間コミュニケイションのいわば第一線の現場でありまして，その面からも本日の主題についてはなにがしかの体験と物を思う立場でございました．私以外にも，たとえば都立大学の光延明洋さん，アポロでおなじみの西山千さんなどの同時通訳者として一流の方々が，この問題に関心を示され，さまざまな発言を行なっておられます．西山さんの近著に『誤解と理解』と題したものがあることは，皆さんもお聞き及びでしょうし，一般意味論の専門家で，同時通訳者の養成に心を砕いておられるＩＣＵの斎藤美津子博士が，ことしの七月九日から十七日まで，異文化間のコミュニケイションについての国際会議を主宰され，大きな成果を収められたことも，われわれの記憶に新しいところであります．また同じ七月に山本正という方が音頭をとりまして，日米間のコミュニケイション・ギャップを主題に通称第三回下田会議を開催，マスコミにも大きくとり上げられましたが，私も参加者の一員として問題提起論文を提出し，またそれら日米双方からの論文数編がやがて一本にまとめられる予定になっております．

そこで本日は，一人の実務家兼研究者として，ことばとコミュニケイションにつきまして，主として異文化間異言語間の意志伝達という立場から若干ものを申し上げて責めをふさがせていただきとう存じます．英語にいわゆる cross-cultural communication もしくは inter-cultural communication であります．

いまさら触れるまでもないことですが，科学技術のいちじるしい発達にともない，世界各地から発せられるメッセージはこんごますます増大することが予想されます．しかもそのことが，却って社会の混乱や動揺を拡大する怖れもなしとしません．その意味では，物理的な距離の破壊や，通信交通手段の進歩は両刃の劍ともいえようかと思います．そこで，われわれがそれと知らずにかけている誤解のフィルターを，適切なアダプターの使用により，理解のフィルターに変えていく，という作業がどうしても必要になって参ります．つまり，お互いに独立の系をなしている文化相互の対話をスムーズなものにしていくために，文化相互間の翻訳と申しますか，転換の技術を開発せねばなりません．この翻訳もしくは転換の技術を作家の小松左京氏や人類学者の梅棹忠夫博士らは，文化工学という名で呼び，その確立の必要を強調しておられます．私自身は工学ということばにあまりなじまないものであり，そこになにか人間操作のにおいを感じて異和感もなしとしないのですが，趣旨はまことに賛成であります．とくに日本が高度の均質性をもった単一集団であること，また他の人間集団との間に意味のある人間的な関係をうち立てることによってしか生きてはいけない地政学上，経済上の条件を考えますと，その必要の緊急性に物をつかれる思いを禁じえないのであります．

では一体，この作業をどう実践していったらよいのでありましょうか．もとよりこれは大問題で私などの手におえる代物ではありませんが，本日は時間も限られてお

りますので，以下の諸点について卑見を述べさせていただき，ご批判を仰ぎとう存じます．

第一に，ことばのはたす役割と申しますか，ことばのもつ社会的文化的な重さの異同を明らかにする必要があろうと思います．とくに日本が世界でも稀れにみるほどの単一性をもった社会であることから，日本社会におけることばの役割ないしは重みには，すこぶるユニークな点がある，と考えられるからであります．

次に，そのようなユニークな点がどのような事情に由来するかを考えてみたいと存じます．

第三には，日本の論理と西欧の論理のちがいについて考え，それが日本語と西欧語との間にどのような差異をもたらしているかに触れたく思います．

第四としては，日本語と欧米語との気分のちがい——あいまいないい方で恐縮ですが，よいことばを思いつきません．——といったものを考えてみたい．具体的にどういうことを指しているかは，いましばらくお待ち下さい．

そしてさいごに，日本人のコミュニケイション，さらには言語観にみられる近年の変化に触れ，あわせて欧米における変化も若干とり上げよう，とまあざっとこんな構成でございます．

ただ一つお断わりいたしておきたいのは，私の話はいわば定性分析，それもかなり印象論的な色彩の強いもので，とても定量分析とはいえない，ということであります．もっとも言語とかコミュニケイションの態様というようなことは，元来がなかなか計量化できにくい分野でして，この点はご海容ねがえるかと存じます．言語学や言語教育の専門家のなにがしかのご参考にもなり，逆にご批判やらご示教やらをちょうだいできれば大きに幸せでございます．

まず，ことばの役割もしくは重さについてでありますが，私どもはどうもことばをあまり重視してこなかったようであります．そしてことばによる表現はこれをできるだけおさえることをもって美徳としてきたようであります．ある方は，点的表現というような用語を使っておられますが，あまりごちゃごちゃとことばを用いて自己表現をせずに，いわばいくつかの点だけをポツリポツリと示す．そして点と点とを結んで線にし，さらにその線を面にまで拡げていくという作業は，話し手の責任ではなく，むしろ聞き手のしごとである，という風にであります．

この点につきましては，すでによく云われていることでもあり，私もなにかと物を書いておりますので簡単にしておきますが，「目は口ほどに物をいい」とか「云わぬは云うにいや優る」とか，以心伝心，腹芸など，ごく一般化し，ときとしては芸術の高みにまで到達しております．そして，たとえば「大石東下りの場」とか「勧進帖」とか，黙契，ないしは無言さに大きな価値がおかれ，われわれもそれに胸を打たれることは事実であります．勝と西郷の江戸城明け渡しのシーンも，ほとんど無言のうちに終始したと，とかくわれわれは信じたがります．これには異説もあるようですが，両者がからからと大笑いしあうことで，黙契がなり，江戸八百八町が無事戦火から救われた，という説の方にわれわれが親しみを覚え，両者を大人物とみなしたがることは疑いありません．

いや，そんな古いことだけではなく，この間もある新聞記事に，ある自民党の領袖が若手議員に対し，君のように思ったことをすぐ口にする人間のことなど，だれも耳を傾けやしないよ，と注意したというくだりがありました．さもありなんと納得されるのであります．そして中野重治氏が「つらいという代りに敵を殺した．恩を感じると胸の中にたたんでおいて，あとでその人のために敵を殺した．いくらでも殺した．それからおのれも死んだ」といういささか物騒な詩に，『豪傑』という題をつけていることも思い出されるのであります．

ことばに対する低い評価はまたことばを使う人間ないしはことばを能くする人間への低い評価にもつながります．つまり大人物もしくは豪傑ではないんですね．口舌の徒といわれて卑やしめられるのがおちですが，日本民俗学の故柳田国男先生によると，どうも昔からそうだったようであります．ことばとか話しというのは，しょせんは amusement であり，真剣にとり上げるべき対象ではなく，したがってそれをなりわいとする人間は低い評価に甘んぜざるを得ない，というわけであります．とくに「言だまの幸う国」という古代をはなれ，王朝期以後になりますと，「言挙げをしない」ことがとくに男子の間では美徳になってきた．とまあこう云えそうであります．いや，女子の清少納言の書いた『枕草子』にすら「下衆のことばには，かならず文字あまりたり．足らぬこそおかしけれ」というくだりがある程です．

ではなぜこのようなことばに対する低い評価があるのでしょうか．むろんこれにはさまざまな理由が介在していると思われます．一つは日本社会がヒエラルキーのきちっとしたものであった，という点が考えられます．日本人の美意識もかかわって参りましょう．表現の寡黙さを貴む傾向は，たとえば俳句のような言語芸術以外にも，墨絵のような絵画芸術にもみられるからです．ブランクを沢山に残しておく，という例の手法です．真理は

ことばによって伝わるべくもないとした仏教思想も一役買っているかも知れません．釈尊が霊山上で例の粘華微笑された，という説話は，その後の仏教，とくに禅家のいわゆる不立文字の伝統に大きく影響していると考えられます．

ただこれらの点になりますと，定量分析はすこぶる困難であります．のみならず，不立文字を唱えた筈の禅家に，たとえば五山文学のごとく多くの語録や提唱のたぐいが存在するなど矛盾する面も多うございます．古代インド人がきわめて精微な論理の体系や言語論をもっていたことも周知のことであります．

そこで私は，以下の二点に限って私見を申し述べます．一つは，日本が人類学でいうきわめて族内婚的な社会である，という点であります．英語ではこれを endogamous と申しますが，要は一つの少さな部族内で婚姻が行なわれる社会，というのが原義であります．族内婚的な社会におきましては，お互いにほぼ同一の生活体験を共有していることが多く情緒や意識の面におきましても公分母が大きうございます．そこにある種の情緒的共同体が生まれます．

その典型的な形態は恋人どうしであり，一つの家族でありましょう．フランスのラシーヌが「目はしばしば口よりも強力である」と欧米人には珍しく言語の役割を低くみた発言を行ないましたのは，恋人どうしの意志疎通に関してでありました．家族間もそうです．「あれをああしておいて」というだけで，あれがちゃんとああされる，というのはお互いに公分母が大きいからで，生活共同体でなければそううまくはいきません．

ところが日本というのは，四面環海の島国で，単一人種単一民族の単一言語集団であり，いわば一つの大家族とみなせぬこともありません．現に戦争中は政治的なレトリックもあり，この面が著しく強調されました．ですからわれわれには同一家族の成員間におけるような点的な表現が可能なのだと思います．

むろん司馬遼太郎氏，さらには鶴見良行氏のように，日本の民族的単一性を過大に評価することに反対する方もおられますし，たとえば地方から上京してきた若者の不安や疎外感を直接聞かされますと，私なども単純な均質性という議論に不十分さを感ずることもありますが，それとてもより大きな族内婚的社会における，より小さな族内婚的村落共同体を離れた若者の不安，といえるように思います．つまり村落共同体は日本というより大きな社会の中で同心円を成すものであり，それだけにわれわれが外円，つまりは日本という均質性の高い社会をはなれ，全く異質な人間集団を接触したときに感ずる不安は，外円内で一つの内円を出るときに感ずる不安以上のものがあるといえるのではないでしょうか．われわれの外国語べた，ないしは外国人との付きあいべたにはこれが大きく起因していると思われます．

そういうわけで，日本のような社会においては，ことばというのは不定冠詞つきの意志疎通手段であり，欧米においてそうであるような定冠詞つきのものではありません．そしてこの族内婚的社会ということに一つ付け加えますならば，世界でも稀れな単一性が，日本のおかれた地理的環境と歴史的条件のつくり出した自然的な統一であるという点であります．つまり民族もしくは国家としての独立が政治的にではなく自然的に保たれてきた，という点で，これまた世界に例をみないユニークな特長であります．このように民族が自然的な統一に多くを負っておりますと，時代や外見上の変化にもかかわらず，その固有性もそのままの形で持続しやすい，ということがあります．あわせて，成員相互間の了解度もきわめて高く，家族内コミュニケイションにおけるとほぼ同じ形態が広く一般社会に通用する，ということにもなります．つまりは人間をつなぐものはことばではなく，まず血縁であり，狭義の血縁でないまでもお互いが熟知しあっているという家族的な人間関係というわけで，どなたでしたか熟知の支配ということばを用いておられるほどです．そこではさきほども触れましたように，ことばは数ある意志伝達手段の一つでしかなく，その比重は比較的軽い，ということになります．

どうも重復が多くて恐縮でしたが，いま一つの理由をあげさせていただきます．それは育児法に関することであります．いささかこれは唐突ですし，私自身もトイレット・トレイニングが一民族の行動様式を決める，というかつて一部の人類学者が信奉した説をやみくもに認めるものではありませんが，アメリカの深層心理学者故コーディエ博士が，日米の各界の専門家をチーム化して行なった共同研究の成果は大へんに興味がございます．これは日米の初生児を集め，一人に一名の調査員を配し，15秒に一度の頻度で母親とその子とのかかわりを記入した，というきわめて実証的な調査として，都市に住む中産専門職階層の第一子を対象に選ぶなど，日米の条件をできるだけ等しくした上で6年にもわたって行なわれたものであります．したがってその知見には実証のもつ強味がございます．アメリカ人のやりそうな調査ですね．

そこで判ったことですが，コミュニケイション，ないしは言語ということに関してだけ申し上げますと，一つにはアメリカの母親の方が初生児に話しかける頻度とそ

の持続度がはるかに高い，ということであります．他方，スキンシップとでもいうのでしょうか．子どもとの肉体的接触——だいたりおぶったり——と子守唄を歌うという度合いは日本の母親の方が大きい，というのです．

第二に，子どもが泣いたりむずかったりした際に，アメリカの母親の方がその原因をつきとめそれにすばやく対応する，というのです．そして unhappy vocalization であれ happy vocalization であれ，初生児の「言語活動」への対処は，一般的に日本の母親の方が時間的にもおそく，内容的にも不十分かつ見当外れだというのです．つまり日本の母親はとかく原因の客観的な究明もしくはその除去よりも，こうであろうという憶測もしくは思いこみで対処しがちだ，というのですね．実はこの説明を当のコーディエ博士から受けたのは，一昨年，ワシントンにおいてでしたが，正直にいってびっくりしました．どうも逆の印象をもっていたからです．これにはむろん家屋構造のちがいなどもからんで来ましょうから，どっちの方が無関心ないしは薄情だなんていうことは申せませんが，もしコーディエ説が正しいとすると，日本人は乳幼児のときからことばのもつ効用を感じさせてはもらえぬ，ということになります．アメリカの子どもは泣いたりわめいたり，つまり言語活動をすれば，騎兵隊ではありませんがすぐに援軍があらわれて，泣いただけのことはある，ところが日本の乳児の場合は，泣けどさけべど援軍来たらず，ということで，あきらめて寝るよりしかたがない．これじゃ言語への低い評価はやむを得ない，とこう思ったことでした．

ちょっと意外な視点かと思われますので，ご参考までに申し上げました．

そこで次のポイント，つまり論理の問題に移るわけですが，その前に一つの橋渡しとして，日本人の理くつ嫌い，という点に触れておこうと思います．例のイザヤ・ベンダサンの『日本人とユダヤ人』ですが，大へん面白い記述がございます．あの著者はどうも日本人らしいというのが今では定説ですが，あの中でかく申すは理くつにてというくだりがあります．つまりそうはいうけどそれは理くつでしかない，というのであります．われわれの社会というのは，どうも理くつになじまない社会のようです．そこには人の世はしょせん理くつで動くものではない，という一種の諦らめ——道元禅師流に明らめ，という方がよいかも知れません——があります．何といったらいいんでしょうか，慣習法的自然法的な人間主義とでもいったらよいかと思いますが，人間それぞれのもつ不調和さとか出鱈目さかげんとか，オモテとウラの不整合みたいなものがはじめからチャンと判っている，というおもむきがあります．ですから人間を理くつでわりきることは非合理だし無理だ，というような認識をもっている．

むろんタテマエとしての理くつの効用は知っています．でもタテマエはあくまでもタテマエでホンネとはちがうということなのでしょうね．ですからわれわれはタテマエ論を耳にしてもそれをちゃんと頭の中でホンネに翻訳して了解することができるわけで，逆に「腹がへってもひもじうない」というような科白にひどく感動したりいたします．とくにタテマエがいわば外来的かつ近代的なものであることが，多くエンドガマスな社会の外に発するものであるのに比し，ホンネこそは正真正銘の土俗的かつ伝統的な存在ですから，近しみを感ずる度合いがちがいます．これは知識人の場合にもそう変わりはないようです．タテマエという外来的な理くつは，もっとアットホームなホンネの中に溶解してしまう，ということでしょう．

理くつ嫌いに関連し，いま一つエンドガマスな社会の際立った特色として挙げられるのは，超合理性とでもいうべきものに重きをおき，ものごとを区分し類別し範疇化するという作業になじまない，という点で，われわれの文化にはどうもこういうきらいがあるようです．たとえば西欧においては，善と悪，神と悪魔，人間と自然，生と死というようにものを類別化し対立させることを通じて概念をくみたててきました．この点はあとで論理のちがいをとり上げるときにいま少し詳しく述べるつもりですが，どうもエンドガマスな社会と，異質なものから成り立つ社会との間の差異といえるようです．異質な要素どうしの間で理解しあおうと思えば，ことばを重視するばかりでなく，なんとか共通項をみつけ出し，できるだけ単純かつ普遍的な論理にものごとを還元することが不可欠です．エンドガマスな社会では，ことばというのは人生のほんの一部でしかありませんが，エクソガマス，つまり族外婚的な複合社会では，ことばとは生きていることそれ自体ですし，そのためには共通のわくぐみとしての単純明快な論理が必要です．その論理をたよりに，お互いに生活の様式も感情も異なる分子の間に何とか理解らしきものを求めようという企て，といってもよいでしょう．家族的な情緒にずぶぬれな伝達は行なわれるべくもないからです．

そこで話はやや脱線しますが，中国に触れたく思います．一口にアジアは一つとか，同文同種とかいうだけで済まないものが日本と中国の間にはあるからです．そし

て，中国の方がむしろこの点でははるかに欧米に近いと考えられるからです．

ご案内のように中国は高度にエクソガマスな社会です．漢民族が人口の94%を占めるとはいえ，言語その他の面で漢民族自体いちじるしい相違をかかえていることはよく知られています．なにしろ面積が日本の26倍もあるのですから．それに残りの6%も，52ぐらいの多民族から成り立っています．たとえば新彊ウイグル地区にはトルコ語系の少数民族が居住していますし，ミヤオやロロという名の山岳民族も西南部には住んでいます．歴史的にみても，元は蒙古人の，清は満州族の手になる王朝です．青海や甘粛辺境の例の「四馬」は馬姓の回族騎兵，つまりイスラム教徒です．ほかにユダヤ教徒，ゾロアスター教徒などもおります．周恩来さんはユダヤ人の血を引いている，という噂がロンドンあたりではかなり行なわれているようで，真偽のほどは知りませんが，ありえぬことではないでしょう．ただ，だから同じユダヤ系のキッシンジャーと上手くいったんだ，ということになると聊かできすぎていて眉つばめきますが．しかも中国人は日本を含む列強のために苦難と屈辱を強いられた歴史をもち，このような意味でも異質なものとのかかわりを原体験してきました．どうもわれわれとは経験の巾と厚みがちがうようです．その上に，われわれが血の同一性のゆえに日本人であり，意識の面でも組織機構の点でも純血主義を離れにくいのに反し，中国問題の世界的な権威であるオーエン・ラティモア教授が強調するように，広義の中国文明を抱懐するものはその人種民族のいかんを問わず中国人である，というより包括的な定義を彼らはとってきたわけです．どちらの方が異質なものとの間に人間的な関係をつくり上げやすいか，どうも答えは明白のようです．

それはとにかく，中国人にとっては言挙げというのは美徳であったようですし，現に右からも左からも「人間とはどう生きるべきであり」「政治と文化とは何のために存在し」「技術と文化とは人間の幸せをもたらすものであるかどうか」など，永遠に古くかつ新しい問題についてまさに百家争鳴をくりかえしてきた，といえそうです．文明の形態として中国の方が日本よりもはるかに言挙げ志向型，つまりは欧米のそれに近いといえるのではないでしょうか．言語によるコミュニケイションや説得に対する評価も当然高いといえるでしょう．あえて図式的にいえば，欧米型と日本型を両方の極とすると，その中間の，ただしはるかに欧米型に近いところに中国があるといえるように思えます．

現にわれわれのいわゆる大人物や東洋的豪傑という類型化したイメージをよそに，たとえば毛沢東という人が民衆の中に入りこみ，彼らを説得し動機づけ，動員し，話せば判るというか，話さねば判らないを実践してきた歴史はよく知られたころですし，周恩来総理のあの炯々たる眼の光には，論敵があれば論破せずにはやまぬ，という気魄のようなものが感じられます．腹芸や以心伝心に長じた人物を英雄とみなす日本的な英雄像とはかなり異なるといえそうです．川端康成が以心伝心を日本的特長の最大のものとしたのは，もっともであったといえるのではないでしょうか．ただし，以心伝心という発想は，釈尊の粘華微笑にその発端がみられますし，以心伝心ということば自体，宋代の『景徳伝灯録』という書物に出てくるものだ，と聞いていますが．

さてそこで話を論理に移したいのですが，せっかく中国の話の途中ですから，中国に例をとって私見を述べたいと思います．

私，さいきん久しぶりで孟子を読みかえしておりました．むかし中国に長い父の強制で素読をやらされたものですから，漢文には親しみがありますし，旧制中学の模擬試験で漢文だけは満点に近い点をいつもとっていたというようなことがありまして，懐しく読みかえしたのであります．ところでこの紀元前4世紀の「孟子」の一節，たしか尽心下篇を読んでおりましたら，「民を貴しとなす．社稷(シャショク)これに次ぎ，君を軽しとなす」というくだりにぶつかり，実は目から鱗の落ちる思いがしたのであります．

一つにはその結論の端々しさというか，近代性であります．民衆をもって最上位をおき，次に国家を，最下位に君主をおくという考え方は，明らかに近代民主主義，つまりはフランスの啓蒙思想やフランス革命以後の考え方とぴたり一致します．それにおどろきました．かつて御大学に五代欣造先生という方がおられ，九大の後藤末雄博士らとともに，フランス革命に与えた儒教の影響について研究され，そのご著書の学恩を私も蒙った一人でありますが，紀元前4世紀の昔に中国においてこんなに新しい思想を喝破した人がいた，というのはまさに新発見でありました．

いま一つの点——本日の主題により関連のあることですが——は，民，社稷(シャショク)，君という問題のたて方がいかにも欧米的だということでした．これはさきほど申しましたエクソガマス社会の問題設定であります．三者択一的とでも申しますか，ものごとを3つに分けてその順序づけをする，というのは，類別化範疇化の好例であります．そして果して日本にこの種の発想があったろうか，とふと思わされたのであります．

私，ただいま発想ということばを用いました．そして実はこのことばは，さいきん外国語教育においてもまま使われることばであります．たとえば発想別表現による英会話というようにです．私もそういう題のカセットテープの制作に加わったことがございますが，まだ論理というところまでは行っていないような気がいたしますが，どうでしょうか．これは私も含めてもっと探究していくべき領域であるように思われます．いま一つ，最近，隆盛をきわめております生成文法はこのあたりをどう捉えているのか，ぜひ専門家のご示教を仰ぎたい点でございます．私にはどうもいわゆる論理——これ自体あいまいなことばかも知れませんが——の面でのちがいが，民族間にはあるように思えてならないのですが，これを表層構造として捉えるのか，それとも深層構造として捉えるのか，例のサピヤ・ウオルフの仮説などの関連はどうなるのか，生成文法家のご解明を望むものでございます．実はこのところ，アメリカの黒人英語についての言語社会学的な調査のいくつかに目を通し，そういう疑問があるものですからつい脱線をいたしました．

そこで話を元に戻しまして，中国は欧米の場合とほぼ同じく，なにか dialectics をもっているように思えるのであります．これは必ずしもヘーゲル流の弁証法という意味ばかりではありませんが，いくつかの立場を立て，それぞれの立場を超越的に包含しながら，その間に往復運動が行なわれる論理とでもいったらよいかと思います．フィードバックという流行語を使うこともできましょう．とにかくある一つの認識なり決定なりに到達するにあたって，できるだけ関連のありそうなテーゼなり事実なりを並べ，言挙げを盛んに行なうというか，できるだけ数多くの往復運動を通じて次の認識段階に進む，という手間のかかるやり方で，そのプロセス自体を論理とも呼べましょう．この点を栗田勇氏は，東洋の言語はプロセスを抜きにして結論を語るプラクティカルな言語，と規定し，決定の言語とも述べておられます．他方，西洋の言語は論理であり，論理はプロセスであって言挙げを沢山することによってプロセスを精細にすればそれだけ真実に近づきやすい，というわけです．前者をのっけから what を説く言語とすれば，後者はその what にいたる過程，つまりは how もしくは why を重視する言語といいかえることもできましょう．私もこの解釈には大賛成なのですが，ただ前者を東洋の言語という風に包括できるかどうかにつきましては，さきほど触れました中国の例などを考えますと，いささか気になります．現に中国人の哲学者で欧米語にも通じ，英語による文筆言論活動で知られた胡適博士は，中国人が近代科学でおくれをとった理由の最大なものは，「how への興味が強く，what への興味がうすかったからだ」と述べている位であります．

あわせて東洋と西洋という二分化自体が，『エッケルマンとの対話』でゲーテも申しておりますように，秀れて西洋的な発想ではないか，とも考えられ，私自身もっと勉強しなくてはならぬ，と心に決しておる次第です．

ところで日本にこのような発想があったかどうかというあたりになりますと，たとえば『東洋人の思惟方法』という大著を物されました中村元先生にでもお訊ねせねばなりませんが，一つだけ申し上げます．実はこれは私あちこちで話したことでやや気がひけるのですが，日本人の心情生活の根底にあるものとしてよく引かれるのは，物のあわれ，ということです．これは，唐ごころのアンチテーゼとして鈴の屋の大人，本居宣長が強調した点で，愛情と悲哀の両方を含み，日本人のメンタリテーの特色とみなされています．いたいけな幼な児をみては心を動かされ，桜の花の散り往くを惜んでは心を動かされるさまを申します．宣長自身の定義も，「見るもの，聞くもの，ふることに，心の感じて出る，嘆息の声」というのです．これにはいろいろな英訳があり，なかにはラテン語を援用したものもありますが，明治初年の日本文学研究家の英人アストンは，ah-ness という訳語をあてました．心の感動にともなって，ああ，という感歎詞を発することが「物のあわれ」の本質だからですが，日本人の行動の背後にある情動は，今日なお基本的には物のあわれの一ことが象徴しているといえましょう．これを日本的な論理と申してはいいすぎでしょうか．そして言挙げをいさぎよしとせず，理くつや議論をことなく思うことからはじまって，たとえば社会全体，もしくは政治経済の分野においても抑制と均衡 (checks and balances)，三権分立 (separation of powers) 拮抗力 (countervailing force) というような発想に何となく異和感を感じる，という現実は，どうもわれわれの基本にある物のあわれ的な論理もしくは美意識と無関係ではないようです．いくつかの相異なる立場を設け，それの対立や拮抗の中から結論を生み出すという形には，われわれはなにか荒々しいものを覚え，荒涼の感を免かれがたい，ということでしょう．

ところでこの論理ということについていま少し考察をつづけたく思います．そしてここではあえてゲーテの警しめを破って西洋と東洋という二分法をとり，両者の間の差異を考えたいのであります．

いうまでもないことながら，西洋の論理学の本を開き

ますと，まっさきに出てくるのは，同一律，矛盾律，それに排中律の3つであります．これは古代ギリシャのアリストテレスに発する論理で，同一律とはAイコールB，一方矛盾律とはAはBとイコールではないということです．他方，排中律とは，英語の the law of the excluded middle ということばからも明らかなように，中を排するというか，ことは黒と白か，イエスかノウかのいずれでしかなく，そのどちらでもないようなものは存在しないということです．中間色を認めない論理といってもよいでしょう．たとえば，ある人間は敵か味方かのどちらかであり，敵でもなく味方でもない，もしくは敵とも味方ともいえるというような存在はありえぬ，ということです．実例をあげれば，かつて反共をもって知られたダレス外交の基礎にあった論理はまさに"これ"であり，彼にとっては非同盟中立などというのはまさに論理的に成立しがたい，道徳的な悪にほかならなかったのです．

ところがわれわれ東洋の世界の論理はこうではなかった．たとえば，名著として知られるアメリカの神学者フロイド・ロス教授の『仏教とインド思想』によりますと，古代インド哲学には，むしろ中こそが正しいという考え方がありました．竜樹の中論がこれで，私もむかし中論の専門家の宮本正尊博士に伺ったことがありますが，私が了解しえたかぎりでは，次のようなことです．これをテトラレンマと申します．四句分別が漢文の名前で，よくこの頃，経済問題に関連して**トリ**レンマということがいわれます．これはインフレ抑制，福祉の増大，それに国際通貨の調整という3つの同時に解きがたい命題ということです．ところがこっちは4つですから**テトラ**レンマというわけです．2つの矛盾は**デ**レンマですね．

で，この**テトラ**レンマですが，具体的に申しますと，たとえば死後に生があるかどうかという命題に対する分別として(1)ある，(2)ない，という肯定，否定の論理以外に (3)あるともないともいえない（両非の論理）それに(4)あるともないともいえる（即）の2つを認める形であります．欧米の論理からすると，このさいこの2つはいかにも理解がむつかしい．あいまいというか，ぬえ的で捉えどころがないというか，女々しくてさっぱりしていないというか，とにかく困りものなんですね．

それも(3)の方は「あっしにはかかわりのないことでござんす」式にまだ無害ですが，(4)となると不信感や警戒心を招くことになる．無原則でいつ豹変するか知れたものではない，と西洋人にとってなんとも uncomfortable な気がするだろうと思われます．とにかく，この(1)と(2)は西洋，(3)と(4)とは東洋と一まずこう割り切っておきましょう．

この中論というのは元来がインドのものですが，やがて中国にも入って参ります．その好例が臨済禅師の『臨済録』の中にみられます．これは樋口久喜さんという篤学者の説ですが，『臨済録』はご案内のように西田幾太郎さんが枕頭の書として身読しておられたもので，西田哲学の絶対矛盾の自己同一という考え方にも大きな影響を与えたと想像されるのですが，四料棟という名で呼ばれている論理です．くわしくは時間の関係で割愛させていただきますが，要するに主観と客観とのかかわりを云うのでして，さきほどのテトラレンマにあてはめると(1)主観をとって客観を捨てる (2)主観を捨てて客観をとる (3)主観も客観も捨てる (4)主観も客観も2つながらとる，という4つです．そして(1)は西欧の観念論 (2)は同じく唯物論 (3)は老荘などにみられるある種の虚無主義，(4)は状況に応じて一切のことがらを抱擁し肯定する捉われない立場，ということになりましょう．(4)はさいきん流行のことばでいうと，ヘンシーンということにもなり，状況主義に堕することもありますが，随所に主となる，というわれわれ日本人にとっては理想的な自由濶達な境涯を指すことにもなります．

ところで，鈴木大拙博士が生前よく云われていたことに「即非の論理」というのがあります．大拙居士の書きものにはよく出てくることばで，たとえば，禅仏教ではよく「煩悩即菩提」とか「生死一如」とか申します．普通の論理ですと，煩悩と菩提とは黒と白のように相容れない概念で，煩悩は菩提，すなわち解脱のさまたげにこそなれ，煩悩がすなわち菩提というのはおかしいのですね．あるいは，生と死というのはお互いに反意語を成すわけで，生きているものは死んでいないし，死んだものは生きていないわけですから，まさに両極端に位している筈なんですが，これを一つの如し，といっています．西洋人には判りにくいじゃないでしょうか．ところが生と死とが未分化の境に立つと，両者は両極にあって対立するのではなく，まさに一枚に合一したもの，とこういうことなのでしょう．西洋人のみならずわれわれ悟っていない俗人にも判るわけはないのですが，でも「論理」としてはなにか判るような「気」がします．この気がする，というところがわれわれの東洋人たるゆえんなのでしょう．現に日本化した鎌倉仏教のたとえば親鸞聖人なども，「善悪の二つ総じてもて存知せざるなり」といっていますし，現代のわれわれも「喧嘩両成敗」とか，「あちらを立てればこちらが立たず」式のいい方を沢山に用意しています．

そこでこういう疑問が発せられると思います．すなわち，とかく物事を黒か白かのどちらかに割り切り，両者の間に対話がないのはむしろ日本人の特質ではないか，という疑問です．オール・オア・ナッシングは日本人の特長とみなされているのではないか，という問いです．この点については，奥山益朗さんの『話し合いと対話』という興味ぶかい本がありますが，私はこう答えたいと思うのです．

例はちょっと突飛なのですが，日本人のインテリによくみられる「無神論者」についてです．日本人の無神論者というのは，どうも西洋人のそれとはちがうようです．西洋人にとっては，神が実在するか否か，ということは大へんな問題です．むろん宗教の力が大巾に減じた今日では，欧米人といえどもむかしほどこの点を問題にしてはいますまい．ニーチェではありませんが「神は死んだ」のですね．もっとも，「神は死んだ」という落書のすぐま横に「ニーチェは死んだ．神」と書かれてあったのを見た位ですから，神の実在いかんはまだまだ大きな設問です．そこで彼らは，神が実在するかどうかについてさんざん考えあぐみ，苦悩します．この点についての苦悶がどれほど大きく切実なものであるかは，西欧知識人の精神の遍歴記を読むと一目瞭然です．自殺まで思いつめるほどです．そのあげくのはてに，無神論なり，不可知論なり有神論なりが出てくるんですね．ところがわれわれの無神論者には総じてこのプロセスはありません．むろん例外は正宗白鳥ほか皆無とはいえませんが，概して棄教の苦しみや遍歴の激しさ，とつおいつの不安定はないといってよい．むしろきわめて気分的にはじめから無神論者である，という方が多いのではないでしょうか．したがって形の上では一見黒か白かにみえても，そこに至るプロセスは大いに異なると思います．さきほど栗田氏の説を引いて，決定の言語とプロセスの言語ということを申しましたが，日本人の無神論には神の実在と不実在という相反するテーゼを立てた上でのものではなく，なにか情緒レベル，つまりは論理以前の決定論のような趣きがあります．

同様に，日本人の黒か白には，相異なる立場のインターアクションの結果として出てきた黒なり白なりであるよりは，始めから直観的に黒か白の何れかが決まっている，という風情があるように思えるのです．まっしぐらに，禅語でいうと直入そのものという気がするんですがいかがなものでしょうか．

というわけで，日本人には反対概念をいくつか立てた上での割り切りはやはり不得意のようです．たとえば，これもよく私が引く例ですが，アメリカもとくに中西部のご婦人の間でよく聞かれる挨拶に，Are you happy？というのがあります．これは例の『文明としてのアメリカ』を書いたマックス・ラーナーの説ですが，それはとにかく，こういう挨拶を朝のっけからやられたら，われわれは面くらいますね．むろんこれは慣用語ですからこれにあまり大きな意味を読みとることはどうかと思いますし，日本だって大阪あたりでは「儲かりまっか」という挨拶が日常化していますから，アメリカのこととばかりは云い切れぬのですけど，「儲かっているかどうか」というのと，「幸せかどうか」というのとではなにか次元がちがうような気がします．

それはとにかく，大阪なら「ボチボチでさあ」と逃げることもできますが，英語のこの種の疑問文は，やはりイエスかノウのどちらかで答えねばならない．という決まりのようなものがあります．事実，アメリカ人ならYes, I am. とか，No, I am not. とか平然と答えます．でもわれわれですと，イエスというのはいかにも屈たくのない廊下とんびみたいに思われるし，さらばといってノウというのは非社交的にすぎるというわけで，そう単純には答えられない．困るわけです．大体，イエス，ノウの何れかで答えるというのはわれわれには苦手です．ですから国際会議などでよく日本人は，イエス……バットという．すると日本人をよく知っているアメリカ人はにやっとして，ああまた日本人の Yes-but syndrome がはじまった．という．イエス・バット症候というわけですね．病気扱いです．でも日本人にしてみれば，そんなに截然と分けられるもんか，という気があります．世の中のことというのは割り切れないところに真実があるんだ，という前提がある．つまりさっきのテトラレンマでいえば，4番目です．どちらともいえる，というわけです．そして1番，2番を通らずにいきなり4番目に自分を定置させるのがわれわれにはもっともアットホームなんですね．ところが欧米人にはいかにも煮え切らぬ，男らしくない態度と映るのです．いや，こいつは俺たちを欺そうとしているのではないか，とすら疑われる．実例は省略しますが，日米間のいろいろな交渉にかかわった私は，こういう契機でアメリカ側の代表のみけんに影がよぎった例をいくつもみききしています．日米間のコミュニケイション・ギャップにはこういう一面があります．

同じく，国際会議などでの日本人の発言が多く身辺雑記的な次元での事実の羅列になるか，それとも高踏的かつ演繹的なテーゼの提出に了るのかの何れかである，ということも指摘しておきましょう．これはいずれも決定の言語もしくは論理のあらわれのように思えます．つまり個別的な事実もしくは結論を断定的に述べるやり方

で，ロジックに従うよりはむしろそれ以前の形をとる．これは決して西欧論のイロジカルというのではないのでして，むしろ論理以前といった方がよいとも知れません．『英語道場入門』というユニークな本の著者である松本道弘氏はこれを pre-logical と呼び，日本的な発想の典型としていますが鋭い指摘といえましょう．

ただ，こういう発言を聞く西洋人，とくに帰納論の上に立つ英米人にとっては，どうもピンとこない．身辺雑記的な，私小説的な発言に対しては，だからどうだっていうんだ，という反応を示しますし，抽象的な演繹論に対しては，事実を示してくれなくちゃ，とデータなり根拠の呈示を求めるのです．

それに対し実証を重んずる英米人の発言は，まず具体的な事実なりデータを提出し，そのデータにもとづいて，その個別的な事実の背後に在るであろう理論なり統一原理なりを，聴衆と一緒に抽出していく，というのが通常のやり方です．これが英語のいわゆる abstraction という作業でして，それに従うことが英米人にとっては判りやすく納得しやすい論旨ということになります．個別的なデータの中から統一原理を導き出していく，というのが抽象化作業でして，日本語の抽象的というのとは大へんに異なるわけです．われわれにとっての抽象的というのは，その抽出過程を捨象して結果だけを先験的にポンと放り出すことですからね．でもこれじゃ彼らにはピンとこない．さらばといって個別的な事実の羅列だけじゃ，大人の討議とはいえぬ．そこには材料はあっても，料理がない．やっぱり加工してみてくれなくちゃ，ということになるんです．西欧の言語とは論理でありプロセスである，とい栗田説がここでも生きてきます．

ですから，どちらの方が秀れているかという議論はさておき，このやり方に固執しているかぎりは，いくら国際会議をやってもどうにもならない．むしろ誤解が増すという結果になります．私としては日本的なアプローチにより近しみを覚えるんですが，われわれのやり方の方が少数派であることを思うと，やはり多数の暴力(！)に従わざるをえぬのじゃないか，相手方の武器を一先づ身につけた上で，おもむろにこちらの論理の今日的な意義や先天的な価値をご教授申し上げる，ということにならねばますます孤立してしまう．と思うのです．彼らの論理のみが唯一無二でもなく，本来的に秀れているわけではない，ということを納得させるためにも，まずというのが私の立場です．独りよがりはいけません．

もっともこれはまだいい方でして，こっちが無言の行に終始したり，いいたいことの半分もいわずに，相手がこっちの意のあるところを忖度してくれる筈だ，なにしろ相手——この場合はアメリカ人——は兄貴分なんだし，目上は目下の意のあるところを察し得てこそ目上の資格がある，というようなアニ・オトウト・症候という厄介なものが介在していることもしばしばでしたが．

ところで中国人もまごうかたなき東洋人ですし，事実，林語堂(リンユータン)のように，「中国語ではイエスかノウかの何れかで答えよという設問は文章法的に不可能である」という人もいるほどですから，日本人と論理的に共通な部分も多いとは思いますが，たださっきも孟子の例で申しましたように，日本人よりはもう少し欧米的なんですね．あるいは，いわゆる欧米の論理と日本的なものとを二つながら持っている，というべきかも知れません．現にこの間にあったミュンヘン大学の中国専門家のオビッツ博士という人は，毛沢東主席の偉大さを，東洋と西洋とのジンテーゼをつくり出しつつある点に求めていました．たとえば環境破壊防止について，58年の大躍進政策の中で，まだ工業化が行なわれていない時点において，すでにその予防策を前面に押し出していた，ということなどはやはり老荘の思想などにある「物質的な富の増大ははたして人間の幸福に連なるか」というようなダイヤレクティックな言挙げの姿勢，と無縁ではないでしょう．そういう複数の視点の対決なしに，たれ流しをつづけて今日の公害列島を招いてしまった日本との対比は，論理の問題としても考えられてよい点かと思います．つまり一つの文化のもつ基本的な論理，エトースといってもよいでしょうが，が政治経済社会などの具体的な面で大きな影響を与える，ということです．

ところでこの論理の問題についてあと一言だけ申せば，なにがこの論理のちがいをもたらすのか，という点です．たとえば和辻哲郎さんのいわれる「風土」的な条件の役割はどうか，などいくつも大問題があります．たとえば，天と砂漠が無限に拡がり，そこには僅かばかりの草がはえ，羊がそれをはんでいる．こういう自然地理的な条件からは，幾何学的な抽象思考が生まれやすい，というたぐいの議論です．ただこの種の環境決定論には大きなおとし穴がある．たとえばある地方の小邑でやたらに西洋音楽が盛んである．なぜかと思って自然環境からとき明かそうとしたら，何のことはない，そこにはたまたま高名な音楽家が出生しており，そのことが引き金をひく役割を演じていた，というようなこともあるわけでして，あまり単純な環境決定論を採るべきではないかと思います．

この辺で次の点，すなわち気分とでも呼ぶべきものに

話を移します．これは私の実感なのですが，私ども英語を話すときと日本語で話しているときとは，なにか自分のパーソナリティが変化するような感じを覚えるのです．パーソナリティというと大げさかも知れませんし，私あるところでジキルとハイドという比喩を使いましたら，國弘は英語学習者にウソつきたれというのか，といって大変にお叱りを蒙ったことがありました．決してそういうことではないんですが，あえていえば英語のときと日本語のときではギャーをチェンジする必要を感ずるのです．そのギヤー・チェインジがうまくいかないときは，どうも思うことがスムーズに出てこない．そこで思いますことは，どうもそれぞれのことばにはそのことばに独特な気分があるのではないかということなんです．

一ついえることは，どうも議論をするときには英語の方がしやすい，という点です．むろん私の英語の運用能力は限られたものですし，前置詞だ冠詞だということになりますと，まちがいだらけですし，事実，NHKの対談番組をあとでトランスクライブしたものをみなおすと，ずい分とおかしなことを云っています．あれは完全にoff-the-cuff，つまりその場で原稿なしにしゃべるのですから，不備な点があるのはあたり前ですが，にもかかわらず議論には英語の方が便利なような気がいたします．一体なぜそうなんだろうと考えるんですが，英語の方が個人間の対立をあらわにし，それを保ちやすい道具だといえるでしょう．ことばを換えていうなら，英語——広く欧米語といってもよい——の場合には，話し手と聞き手の間にたえず理性というか論理の風を送り，お互いの個の独立を保証することができる．他方，日本語では個と全体とが有機的に結ばれていて，あらかじめ与えられたわくぐみの中の決まった回路を通ってさえいれば，コミュニケイションはほとんど自動的に行なわれる，という違いがあるように思えます．ですから内容のある討議をやるときには英語の方がかえって便利である，といえましょう．日本語だとぎくしゃくするようなことでも，英語でならあたり前とみなされる，というわけです．

ただ，のんびりとことばというボールを投げあって，お互いの反応をみるという目的のためには日本語の方が便利ですね．欧米語ですと，自己の存在証明みたいなものを刻々に激しく強要されますから，ボール投げを楽しむわけにはいきにくい．ですから，はっきりいってくたびれます．われわれにとって外国語だからそうなのかな，とも思いますが，どうもそれだけじゃない．その証拠に，トロント大学の鶴田欣也助教授がどこかに書いておられましたが，漱石の研究で学位をとったヴィリエルモというアメリカ人ですが，日本語はむろんペラペラなんです．ところがこの人が，日本語で話す方が気らくだ，というんです．変な外人というわけでしょうが，日本語で話しているときは素肌の童心に帰るというか，なにか手ごろな温度の風呂につかって，人間どうしの肌のぬくもりをしみじみと楽しむ，という趣きがある，という．これは面白い指摘だと思いました．ですから，それぞれのことばには一種独特な気分があり，それに応じてギャーを切り換えていかないと，うまく「のらない」ということになるといえると思います．

なお，この点に関連して慶応大学の社会言語学の鈴木幸夫教授に大変興味ぶかい論文がございます．鈴木さんは，日本人が外国語に不得手なのは，なにか日本語そのものの中に要因があくるのではないかという問いを発し，「日本語の自称詞」という論文を物されたのですが，講談社の『日本文化と世界』に所収されていますので，お読みになることをお奨めいたします．この論文はたとえば学校の先生が，自分のことを指し示す際に，自分の生徒に対しては「先生」近所の子どもに対しては「小父さん」，自分の子どもに対しては「お父さん」と呼ぶなど，相手にとって自分が何であるかを指すことばをそのときどきに応じて使いわけることを指摘，両者の関係が安定的に捉えられているときには意志伝達がスムーズにいくのに反し，両者の関係がはっきりと措定されぬ場合にはぎこちないものになると述べ，その措定がもっとも不明確かつ不安定なのは，みず知らずの外国人相手の場合であると結んでおられます．そして日本人の外国語べたの主要な原因の一つをそこに求めておられるのですが，面白い視点だと思います．気分ということの周辺的な事実の一つとして一寸ご披露いたしました．

なおこの気分ということに関連してあと二つほど付け加えたいのですが，一つは，この間ジョン・キャロル博士をかこむの対談で，安岡昇太郎さんが話しておられた点です．安岡さんはいかにも小説家らしいものいいをされたんですが，外国語をしゃべるのはどうも嫌だ．なにしろ自らを偽るというか，ウソをついているような気がしてならないから，というわけです．つまり母国語を話しているときのパーソナリティを真正なものとするなら，外国語を操っているときのそれは偽りのパーソナリティというべきもので，この乖離に耐えられぬ，というのです．さすがに感受性に富む文学者の発言だと思いました．それに外国語ではしょせんは多くを省略せねばなりませんし，かゆいところに手がとどかない．あわせて，欧米語はなにかを一刀両断に切って捨てる，という趣きが強く，多くを捨象せねばならない．それに耐えら

れぬということもありましょう．そういうことを考えさせられました．

これとは逆に，外国語を操るたのしみの一つには，仮面をまとう楽しみもあろうと思うのです．変身のたのしみとでもいいましょうか．そして素顔を一時的にぬぎ捨てて，仮面をかぶるという作業はわれわれの生活面というか意識や行動の日常性にある種のふし目を与え，人間的な拡がりを可能にし，創造性を高めることにも通じようかと思います．ベルギーの有名な経済学者で実業人でもあり，文明批評家としても高名なバジール氏は，創造性を生むものは，日常性の意識的な打破である，といっていましたが，外国語運用の一つの効用をここにみるといったらあまりにもこじつけに過ぎるでしょうか．

さていよいよ時間もなくなって参りましたので，いままで申し上げたことにみられるいくつかの変化について触れてみようと存じます．

第一は，欧米においてすらいわば「言語からの退却」と申しますか，言語への信頼に対するゆらぎがみられつつある，という点であります．これは，十七八世紀に数学が完成し，自然言語にかわるに，数量言語と申しますか，方程式や数式に代表されるような人造言語が有力化してきたことと関係があろうと思いますし，昨今コンピューター言語というようなものすら生れつつあります．この言語の地位の相対的な低下という点はジョージ・スタイナーの『言語と沈黙』に詳しいところでして，東大の由良君美先生の翻訳が出ております．またマクス・ピカートの『沈黙の世界』も佐野利勝氏によって訳出されております．ただ，われわれの世界における沈黙と，西欧の沈黙とはその機能や生成過程，評価が異なるということは忘れてはならないでしょうし，他方，演劇の世界におけるパントマイムの隆盛なども考えられてよいでしょう．

第二に，言語以外の意志伝達手段，つまり non-verbal communication 手段への関心の増大をあげられましょう．これは，例のエドワード・ホールの『沈黙のことば』が有名で斉藤美津子，長井善見のお二人と私が共訳を出したのは数年前のことですが，おかげでよく売れております．とくに異文化との接触の第一線に在る商社員や外交官などに広く読まれている点が面白とい思われるのですが，それはとにかく，この傾向はホールの『かくれた次元』につづき，さらには例の *Body Language* にいたり，この頃では skinship を重んずる touch game などというのすら流行のきざしがみられます．ことば以外の伝達手段が重視されつつあるわけですね．さきほどのヴィリエルモ博士の述懐ともあわせて興味がもたれる点です．なお，しぐさというようなものが，『しぐさの日本文化』など巾広い研究の対象になっていること，また立教大学の香原志勢助教授のように自然人類学を専攻される方が，肉体と表情とのかかわりというか心と体との相関性について綿密な調査をつづけておられ，しかもそれが人種間民族間でどのように異なるかを明らかにしておいでになることも指摘しておくべきかと思います．異文化異民族間の伝達では，身のこなしとか，微妙な表情の動きといったものがあらぬ誤解の種になることが少なくないからであります．

第三は，当の西欧においてすら，アリストテレス流の論理の妥当性に大きな疑念が寄せられるようになった，という点であります．たとえば，コジブスキーの名とともにも知られる一般意味論では，アリストテレス流の切り方を二値的なオリエンティションと呼び，非アリストテレス的ということを盛んに申します．一般意味論つまりＧＳの目指すところは，アリストテレスの超克にある，とすらいえるように思われます．この点，コジブスキーが自然科学ないしは工学分野の出身であったということが興味を惹きます．というのは，西欧の自然科学というのが元来はアリストテレス的な論理の帰結として今日の大を成した，ともいえるからです．とくにニュートンに象徴される物理学はその物質観，自然観，宇宙観においてきわめて mechanistic であり，アリストテレス的でありました．これは政治や社会全般にも大きな影響を与えたわけでして，さきほど一寸触れました抑制と均衡，三権分立など政治制度や社会機構にしてからが，すこぶるニュートン的であり，つまるところはアリストテレスに淵源しているとは，歴史家のＨ・Ａ・コマジャー教授も説くところであります．

ところが，ニュートン物理学はやがてアインシュタインの相対性原理やハイゼンベルグの量子力学などによって止揚されて参ります．一方，生物科学の進歩は分子，電子生物学などの分野で従来のメカニスティックな生命の構造という考え方に大きく修正を迫ります．私の素人論ですと，この種の自然科学次元での変化が，世界観や宇宙観，身近かには人間観や社会観を変え，それが一般意味論の登場を助けたといえると思うのですが，いつか斎藤美津子先生にでも伺わねばと考えながら，まだその折を得ておりません．興味ある点であります．二値論理から量子論理への移行といえましょう．また一般意味論のみならず，文芸批評の分野におきましても，いわゆる新批評，つまり New Criticism の誕生はこの辺と無縁ではないと想像するのですが，どんなものでしょうか．

なお，いま一つ付け加えるならば，一部の西欧の思想家にみられる最近の傾向として，西欧のもつ dialectic な発展過程よりも，むしろ日本が示してきた non-dialectic なプロセスに，より大きな価値を付与するという点であります．トインビー博士などもそのお一人のようですが，いま一人この点をはっきり強調するのは，イギリス生まれでいまはコロラド大学で教鞭をとっているK・E・ボールディング教授であります．この人は元来が理論経済学者ですが特異な思想家としても著名で，しばしば日本を訪れておりますが，さいきん私は彼の日本での講演集を『変革をどううけとめるか』と題して訳出しました．その訳者あとがきでも触れたのですが，ボールディングさんは日本の徳川期を高く評価し，こんごの世界は徳川期に習うべき点が非常に多いとしている．これからの世界というか宇宙船地球号は科学技術の発達によっていきおい閉鎖的な有限なものになる．ところが徳川期の日本は同じく閉鎖的な有限のわくぐみの中でみごとに文運を盛んにし安定を楽しんだ．それは dialectic ではなく，non-dialectic というか evolutionary な形においてであり，この点はこれからの世界が範とするに足る，とまあこういう意見なんです．

私はここに，西欧のもつたけだけしいまでの自己主張と，異質なものが対立し，もろに噛みあうことによって生ずる dialectic なものの荒々しさに倦み疲れた一人の秀れた西欧的知性のうめき，をみるものです．今日の欧米の混迷を知るだけにさもありなんという感じがいたします．また私は西欧の論理や考え方がわれわれのそれにすぐれているなど，絶対的な優劣を信ずるものでもありません．両者のちがいに目を向けよう，というのであります．

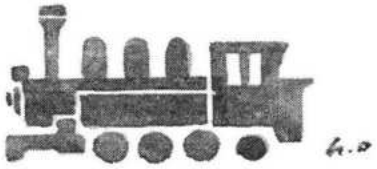
ただ日本についてはあまりにもロマン的でありすぎるという気もおこります．いまの日本社会がかかえている数々の難問を思いますと，dialectic の欠如に帰因している，としかみなしえないものがあまりにも多すぎる．さきほど触れました環境破壊の深化にしても，物のあわれではどうにもならないばかりか，物のあわれが過重にすぎ，老荘にみられるような視点が欠けていたあまりの今日のこの実情だ，と断ぜざるを得ません．ですからボールディング説は判りますし，「non-dialectic なものの持つぬくもりや暖かさをありがたいと評価しつつも，また，以心伝心や目は口ほどに物をいう方が，一々口に出さねば判らないというよりは遙かに高級な伝達手段だと確信しながらも，そうやみくもに日本の現状を肯定するわけにはいかない．あわせて日本が世界でも稀れな単一社会であり，世界的には例外にしかすぎぬことを思い，しかも対外的なかかわりをうまくやっていかねば成り立っていかないというしくみを思いあわせますと，例外の方から常態というか多数派の方に近寄る努力をしないでどうなるか，という危機感に捉えられるのであります．

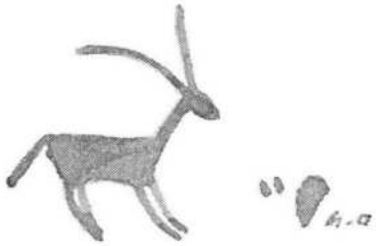
さいごに第四の点をいそぎ申します．西山千さんもいわれるように腹芸に類するものはたしかに西欧にもありましょう．ただ頻度や社会的な意味は少なくとも同一ではありますまい．他方，日本自体，だんだんと伝統的な無言の文明を離れ，黙契の失なわれた社会になりつつあるようにみえます．家庭すらが暗黙の相互理解の許される場ではなくなりつつあり，「男は黙ってビールを飲む」ではありませんが，黙りこくって新聞ばかり読んでいるご亭主は非難の対象になります．とくに若い女性がきわめて自己表現に強くなったことは，私がかつてある国立の女子大で，「今夜の月はきれいだねえ」の一言が，実は鮮烈な求愛表現であることが判るかどうかを調べた際に，大多数が否と答えたことからも察しうるのであります．

のみならず，明治以降，とくには戦後の日本で，ことばの行使によって支配を行なう少数の集団と，無口のままにその支配に甘んぜざるをえぬ大多数との陰微な対立が増大している，という観察もあるいは妥当かと思います．ある人は，さいきんの学生運動の激化を黙契が失なわれた家庭に生い育ち，社会的には寡黙を強いられた若い人々が爆発的に示す怨恨のあらわれとみていますが，不幸な事件が勃発したばかりの貴大学に伺って，そういう思いにも捉えられるのであります．

以上，ことばとコミュニケイションというまことに大きな題にへきえきして，苦しまぎれに思いつくままを申し述べました．系統的でもなく，それぞれの点については突っこみも不足で，お聞き苦しかったかと存じますが，このあたりでお開きにしていただきます．長時間にわたりご清聴まことに忝けのうございました．厚くお礼を申し上げます．（本稿は早稲田大学の語学教育研究所の創立十周年を記念して行なわれた一連の記念講演（72年11月18日）の一部である．）

（国際商科大学教授）





日・英慣用表現の比較 (4)

——日本文学の英訳作品を資料として——

HASEGAWA KIYOSHI
長谷川　潔

I-J 胸

顔・肩・手などの表現に続いて胸にくる．「胸を痛める」，「胸をしめつけられるような」，「胸がふさがる」など，精神状態の苦悶は胸であらわされることが多い．「安堵の胸をさすった」,「胸がすっとした」などは，「胸のつかえ」がおちた時のことばである．胸の中には心臓がある．人の感情は心臓の鼓動に影響するから,「胸」を使った感情表現が多いのである．

英語でも throw out a chest (度胸を示す), get... off one's chest ; make a clean breast of (打ちあけて心を軽くする) など，肉体的な「胸」を使った感情表現があるが,「胸」よりもむしろ「心臓」そのものである heart を使った表現の方がはるかに多い．

〔例 147〕 As grateful as they were to him for keeping her in a good humor, it **distressed** them to think that his habit of yielding to her every whim might gradually make her even more of a problem.

(佐助が彼女の機嫌を取ってくれるのは有難いけれども，何事も御無理御尤もで通す所から，次第に娘を増長させる結果になり，将来どんなに根性のひねくれた女が出来るかも知れぬと，密かに胸を痛めたのであろう．『春琴抄』)

〔例 148〕 The shipwreck of small fishing boats that went out in heavy seas to catch fish, even when it was known to be dangerous, is **heart-breaking.**

(あぶないとわかっていながら漁獲のために，ムリな出漁をした小型漁船の遭難など，胸がいたむことだ『天声人語』)

以上の 2 例では，日本語の動詞表現・名詞表現を英語も同じように訳している．

〔例 149〕 Nothing has been as **disgusting** recently as the Tokyo "serum pig case."

(東京の病菌豚事件くらい，ちかごろ胸が悪くなる『天声人語』)

〔例 150〕 My **chest** was painfully tight.

(胸が苦しかった．『伊豆の踊子』)

〔例 151〕 Troubled as they were, Shunkin's parents **felt relieved.**

(愁いのうちにも安堵の胸をさすり…『春琴抄』)

〔例 152〕 **My heart leaps** when I think how I've triumphed over that coward.

(卑怯な奴の裏を掻き鼻をあかしてやったかと思えば，胸がすくようでございます．『春琴抄』)

〔例 153〕 Traces of make-up were left from the evening before, rouge on her lips and dots of rouge at the corners of her eyes. *A thoroughly appealing little figure.* I **felt** *a bright surge of happiness as I looked down at her.*

(昨夜の濃い化粧が残っていた．唇と眦(まなじり)の紅が少しにじんでいた．この情緒的な寝姿が私の胸を染めた．『伊豆の踊子』)

後半はかなり原文から離れた英訳である．A thoroughly...以下のイタリック体の部分は英訳というよりも訳者 (E. Seidensticker) 自身の文章といった方がよいかもしれない．「情緒的な寝姿」とか紅にひっかけた「胸を染めた」などをうまく英訳するのは不可能かもしれない．英文からは原文にある一種のなまめかしさは感じられない．

〔例 154〕 I was not hold to them by curiosity, and I felt no condescension toward them. Indeed I was no longer conscious that they belonged to that low order, traveling performers. They seemed to know it and to **be moved by** it.

(好奇心もなく，軽蔑も含まない，彼等が旅芸人という種類の人間であることを忘れてしまったような，私の尋常な好意は，彼等の胸にも泌み込んで行くらしかった．*Ibid.*)

日本語では「記憶にとどめる」とか「強い印象に残る」の意味で「胸」を使うことがある．英語の learn by heart などと同じ発想である．

〔例 155〕 The name Miike Shuntarō **must be inscribed on men's hearts.**

（是が非でも三池俊太郎の名は，人々の胸に銘記されねばならぬ．『比良のシャクナゲ』）

〔例 156〕 Only the name, Kadota Reiichirō, I **stored in my heart.**

（間田礼一郎というお名前だけを大切に胸の奥にしまっておいたのです．『猟銃』）

このように「胸の奥に」しまってあることを率直に述べることを「胸をひらいて」という．

〔例 157〕 Nevertheless, the Prime Minister could have **been** more **frank about** his own thoughts and impressions.

（が，首相自身の考えや印象は，もっと胸をひらいて報告してもよかろう．『天声人語』）

「胸」ということばを使いながら，感情ぬきの表現が次の例である．

〔例 158〕 The road wound up through a forest, so steep now that chimbing it was like climbing **hand-over-hand up a wall.**

（落葉で辷りそうな胸先上りの木下路だった．『伊豆の踊子』）

これも原文を離れた訳であるが，原文の雰囲気はよく出している．「胸先上り」は山道のけわしさを示す時によく使われる表現だが，『大和英』をはじめほとんどの和英辞書に記載されていない．climbing hand-over-hand up a wall は，「さしのべた手を越えて別の手をのばし，壁をよじのぼって行くこと」で「胸先上りの」のけわしさを表わすのに適訳．

I-K 心・気

身体の部分を表わす慣用表現ではないが，「胸」，「腹」とともに，人間の内面を表わす感情表現と密接な関係があるのが「心」と「気」を含む慣用句である．

〔例 159〕 We felt as if we could understand each other's **innermost feelings.**

（お互いの心の底がわかったような気がした．『愛と死』）

〔例 160〕 Sasuke, however, denied any knowledge of the matter. **"I can't imagine** who it could be," he said.

（佐助も知らぬ存ぜぬの一点張りで，自分の身に覚えのないのは勿論，誰といって心あたりもないという．『春琴抄』）

この「心あたり」は感情よりもむしろ判断を示す表現であろう．英語でも can't imagine と訳されている．その前の「自分の身に覚えのないのは勿論」は，英訳するとくどくなるので，訳者 (H. Hibbet) によって省略されてしまっている．

〔例 161〕 But in that case why had she **tried to deceive** them last year, when they were encouraging her to marry him?

（そのくらいなら去年縁組をすすめた時なぜあのような心にもないことをいったのやら．*Ibid.*）

この訳では英語の方が意味がややどきついような感じがする．

〔例 162〕 A maid fifteen or sixteen years old brought hot water, and as I sat down on the sill, rolled up the skirt of my robe, and soaked my toes, red from the cold, I **felt a little like human being** again.

（十五，六の女中が湯を持って来た．上り框に腰かけ，衣の裾をまくり上げて，盥(たらい)の湯の中に赤くなって感覚を失なっている足指を浸した時，初めて人心地がついた．『比良のシャクナゲ』）

この例では日本語をほとんど直訳しているところがおもしろい．参考までに『大和英』では Now I **feel quite myself.**（これでやっと人心地がついた）の例が記載されている．この訳例もよいと思うが，もう一つの recover consciousness は気を失っていた人が「意識を取りもどす」の意味であって，「人心地がつく」の訳としては不適当のように思える．

同じく「心地」で次の例も直訳によってうまく原文の感じを出している．

〔例 163〕 Sasuke felt as if he had soared up to Heaven

（天にも昇る心地し…『春琴抄』）

〔例 164〕 I felt the **searing pain at my heart** recede.

（灼げ爛れるような心の痛みは，薄紙を剝がすように次第に鎮まって来るので御座いました．『猟銃』）

「薄紙を剝がすように」を訳者 (George Saito) は省略してしまっているが，巧みな訳だと思う．「気にかかる」，「心にかかる」のように「気」と「心」が同意義に使われることがある．しかし「気」ということばには，日本語独特のとらえどころのないひろい概念の含まれたことばである．「心」，「胸」などよりもはるかに慣用表現が多く，日本文学の英訳者たちも，その微妙な言いまわしに苦労している．

〔例 165〕 She told me about the operation, and

she said that you named me, and she said that what **worried** her was the bill.

（先生が私の名づけ親だったとも云いました．母が気にするのは手術代のことでした．『本日休診』）

〔例 166〕 Suddenly **concerned about** the sick woman, she had hurried to the hospital and sent the other two home.

（さっき急に病人のことが気になり出したので，大急ぎで駈けつけて来て，春三と悠子を先に帰したそうである．*Ibid.*）

〔例 167〕 The nurse from the Yokota clinic had left, no one quite knew when. It probably **made her nervous** te be in an alien operating room.

（横田医院の看護婦は，いつ帰ったのかわからない間に帰った．その手術室に来たので頗る気をつかっていたと思われる．*Ibid.*）

この訳では原文にない alien ということばをおぎなうことによって，**make her nervous** の意味を巧みに強めている．

〔例 168〕 It was not good to excite the patient, of course, but Omachi already knew what had happened, and **was upset.**

（病人にそんなことを云って刺激してはよくないが，もうお町さんは事情をすっかり知って気に病んでいた．*Ibid.*）

前後の文脈から判断して，be upset ではやや強すぎる気がする．『大和英』には，worry about; feel nervous about, be sensitive over などの訳が記載されている．

〔例 169〕 If she's **worried about** the bill, tell her we'll take the price of the cart. That should **make her feel better.** Do something to make her feel better.

（あの病人，入院費のことを気にするなら，リヤカー代と差引くと云っておけ．それなら気がすむだろう．とにかく安心させればいいのだ．*Ibid.*）

『大和英』では「気がすむ」を be satisfied, be gratified; be appeased と訳しているが，口語訳としてはかたすぎる．また〔物事を主語として〕は，satisfy one's sense of justice としてあるが，上記の文にあてはめて，That should satisfy her sense of justice. ではどうにもおさまらない．

〔例 170〕 When he had seen the other patients, Dr. Yaharu called Harumi's mother into his office and told her to **calm** Omachi somehow.

（病室を一巡した後で，先生は春三のお袋を診察室に呼んで，病人の気の迷いをしずめるように云い含めた．*Ibid.*）

ここでは calm 一語で「気の迷いをしずめる」を巧みに訳出している．

〔例 171〕 She said she **felt bashfull** about going by herself, and asked me to go along, and on the way I kept asking myself which of the customers' initials I would have tattooed.

（マダムは一人で行くのは気がひけるから私にも行かないかと云いますので，私もいっしょに行く途中に，お店のお客さんのうちで誰の名前を入墨しようかと考えました．*Ibid.*）

〔例 172〕 Dr. Yaharu at length agreed, although he **was** naturally **unenthusiastic** about the idea of turning the lobby into a sick room.

（八春先生は「では，引受けよう」と答えたが，応接室を病室に代用するというようなやりかたには，あまり気乗りがしなかったのは云うまでもない．*Ibid.*）

〔例 173〕 She had decided to go ahead with the operation. Her irascibility had quite disappeared, and **apprehension** had taken its place.

（病人は手術を受ける決心がついたと云った．さっきの癇性な調子がすっかり消え，手術の結果を専ら案じる気後れのした患者になっていた．*Ibid.*）

〔例 174〕 "I should be going." Harumi's mother stood up. She was **being tactful.**

（「では私，これで…」と，春三のお袋が椅子を離れた．いそいで席をはずすべきだと気をきかせたのだろう．*Ibid.*）

〔例 175〕 Omachi in the next bed **did not know** when it had happened.

（隣りのベッドのお町さんにたずねると，その男がいつ逃げたのかも気がつかなかったと云った．*Ibid.*）

ここでは「気」ということばが判断を示す意味に使われている．

〔例 176〕 It would be better to avoid **embarassing** the man.

（なるべくなら顔を合わせるのを避けて，遊び人に気まずい思いをさせたくなかった．*Ibid.*）

原文の最初の方は訳者によって省略されているが，これでも充分意味が通じる．

〔例 177〕 Always, without exception, Dr. Yaharu asked why the tattoo had been done in the first place. "Because I **sort of felt like it,** "was the

answer in more than half the cases.

（先生は刺青を抜く患者を扱うとき，そのつど男女の区別なしに，なぜ刺青なんかしたかとたずねるが，ふらふらっとその気になったという答えが過半数である.）

意向を示す「気」の訳について，『大和英』を調べてみると，take it into one's head to《do》; take a fancy to《do》; bring oneself to《do》; be so minded; feel like《doing》などが記載されている．用例としては，I took a fancy to drop in at his house,/I can't bring myself to undertake such work などがある．実際に口語として最も多く使われているのは，上の訳例にある feel like…ではなかろうか．

次にあげる二つの例では「気」ということばが形容詞として使われている．

〔例 178〕 As surgery patients go, she was an **easy** one.

（手術患者としては気難かしくない方である．*Ibid.*）

〔例 179〕 But she's very poor and **very proud**, Doctor."

（でも先生，あの子は，貧乏で気の勝った娘で御座います．*Ibid.*）

以上の用例で，日本語の「気」ということばが，いかにひろい意味で使われているかがわかると思う．

I-K 腹（肝・胆・腑を含む）

身体の部分に関する慣用句で，日・英語の発想が最もことなるのは「腹」に関するものであろう．英語では belly とか stomach を使って抽象的な心情を示す表現はほとんど見当らないが，日本語の「腹」は，日本語独特の表現を多く生み出している．「腹」に関する日本語の慣用句について，芳賀矢一博士の次のことばは，「腹に対する日本人の発想をよく説明している．

「腹の中には食物を消化する胃腸がある．腹が減る，腹がふくれるは至当の事であるが，ここも感情をあらはす処と見られて腹が立つといふのは，考へれば面白い．腹に据えかねるから反対に立つのであろう．それが落付くのを腹があるといふ．腹いせといって，日頃の無念を晴すこともある．胆力といって腹の中の胆から元気が出ると考へたから驚くのを胆を潰すという．腹黒といひ腹がきたないといふに至っては，全く精神が腹の中に在ると考へたらしい．よく腹で味って見ろといふのも考へて見よといふことである．

武士の切腹は腹の綺麗なのを開いて見せる為だといふ人もあるが，これは疑はしい．笑ふ時に腹筋をよるといふのは実際の状態である．又腹の皮をよるともいふ．それと同じように臍で茶を沸かすといひ，又甚しく嘲り笑ふことを臍が西国するともいふ.」

精神が腹の中に宿るという発想は，英・米人にはないと思われるが，「腹」に関する日本語の慣用句がどのように英訳されているか．見てみよう．

〔例 180〕 He does not understand my **innermost sentiment.**

（腹の中がわからないのです.『愛と死』）

〔例 181〕 Nonomura langhed as if he had **read my intention.**

（僕の腹を見すかしたように笑った．*Ibid.*）

〔例 182〕 It was as if she had read Kikuji's **mind.**

（ちか子は，たかをくくって菊治の腹を見すかした言ひ方だった．『千羽鶴』）

〔例 183〕 But before that I'd like to find out exactly **what you have in mind** yourself.

（その前に君の方の腹をたしかめて置く必要があるんだ．『蓼食ふ蟲』）

以上の例では「腹」は「相手が考えていること」，それも理性ばかりでなく心情も入っていて，前後の文脈から sentiment, intention, mind などのことばに訳されている．

〔例 184〕 I thought, I'd just stop by **for your answer** before I went.

（ちょっとこちらへお寄りして，菊治さんのお返事を腹に入れてと思いましたの．『千羽鶴』）

ここでは特に訳出されていないが，要するに「菊治が考えていることを確かめる」という意味を「腹に入れて」とのべているのだから，for your answer の中に意味が含まれているように思える．

〔例 185〕 You keep the poison **dammed up inside you.**

（奥さまが毒をお腹に呑んでらっしゃるからいけませんよ．*Ibid.*）

〔例 186〕 Are you *really* sincere?

（あなたは腹の底から真面目ですか）

この二つの例では「心の奥底で考えていること」の意味で「腹」を使っている．日本語ではまた「心の奥底」をさらけ出す時にも「腹」ということばを使う．

〔例 187〕 We could not understand what the Prime Minister meant when he said, "I talked **very frankly** with the President as a close friend."

（大統領とは，「友だちとしてハラとハラで語りあった」というだけでは，何のことだかわからない．『天声

人語』)

〔例 188〕 This time his slogans were "grasping the actual situation in these countries" and **"frank discussion."**

(この時は「実情掌握」「ハラを割って話す」がキャッチフレーズ. 『天声人語』)

政治家が「腹」ということばを好んで使うのは, 具体的にものごとをのべて言質をとられることをおそれるからであろう. 「腹」については, アメリカの未来学者ハーマン・カーン氏を評して, 佐藤元首相が「腹のでかい男」とのべて, 同時通訳者が英訳に苦労した話が伝えられている. 要するに, 「大胆に先の見通しをする人 (a man of bold vision and imagination)と, 肉体的に「腹の出ている男」(a man with a big stomach (belly) とをかけた首相のしゃれなのである.

〔例 189〕 By the time the man from the Omoriya was ringing the doorbell, my **mind was made up.**

(そして大森屋の番頭が這入ってくる玄関のベルが鳴りひびいた時, わしの腹は決まったのだ. 『比良のシャクナゲ』)

以上の例から見られるように, 日本語の「腹」は多くの場合, 英語の mind に当たり, 状況によって heart, intention などに訳されることもある. 次にあげるのは「腹」が「怒」の意味に用いられている例である.

〔例 190〕 But these facts **make us angry.**

(あれやこれや腹の立つことだ. 『天声人語』)

〔例 191〕 Kikuji **left** less **angry** than relieved.

(腹が立つよりむしろ肩が軽くなったようだ. 『千羽鶴』)

〔例 192〕 **I became spiteful (aroused).**

(私は少し業腹になった.『こころ』)

『こころ』は二人の訳者 (近藤いね子, E. McClellan によって上述の 2 種類の訳がある.

〔例 193〕 I'm afraid I **was** very **rude.**

(お腹立ちでしょうと思う. 『千羽鶴』)

この例では日本語の主語が省略されているあなた (相手) であるのに対して, 私(I)の立場から訳されている. 「腹」が「あざけり」の意味を示す例を次にあげてみよう.

〔例 194〕 To those who knew what went on in private between them, his humility must have **seemed ridiculous.**

(裏面の消息を解する者には片腹痛く思えたであろう. 『春琴抄』)

「腹」が人間の心情とか意図ではなく, 文字通り stomach, belly の意味を示す場合もある.

〔例 195〕 You, the son of an emperor, go about **with an empty belly,** in those rags and worn sandles.

(天皇の子とも生れながら, すき腹かかえてその布直垂と切れ草履はなんのざまだ. 『平家物語』)

「腹」に関連して, 肝, 胆, 臍, 腑などの慣用句を見てみよう.

〔例 196〕 There is need for people to **realize keenly** that going to an accident site is mistaken action.

(事故現場に集ることが即ち, まちがいだということを, 肝に銘じておく必要がある. 『天声人語』)

〔例 197〕 The peoples of the world are not being servile if they are happy when the two men smile and fearful if they scowl. Their feeling is the noble one of hope for peace. This should **be deeply engraved in the minds** of the two leaders.

(二人が笑わなかったと一喜一憂する世界の人々の気持, それは決して卑屈なものでなく, 平和を願う尊い気持であることを, 二人とも肝に銘じてほしい. *Ibid.*)

〔例 198〕 At least, it seems possible that a chance remark of hers, uttered on a momentary impulse, **made such a strong impression on** him that he kept barking back....

(少くとも, 彼女が一時の感情に任せて発した言葉を有難く肝に銘じて聴き, 彼女を偉くするために, 重大な意味を持たせた嫌いがありはしないか. 『春琴抄』)

同じ「肝に銘じて」という表現が, 前後の脈絡によって異なった訳になっているが, 英語の mind に関連があることでは共通している.

〔例 199〕 We both knew the dignity of scholarship, and we **respected each other** as scholars.

(学問の貴さを知り, 学徒としての二人の人格を互いに尊敬し合うことにおいて, 肝胆相照した. 『比良のシャクナゲ』)

〔例 200〕 All Sadamitsu knows about is Goeth, and he doesn't care whether his **own** father is alive or dead.

(ゲーテ, ゲーテの一つ覚えで, 肝心の父親が何をしているか知らぬ息子にも困り者だ. *Ibid.*)

ここでは「肝心」を特に英訳していないが, own を入れることによって,「肝心」の意味を出している.

(p. 59へつづく)

世界における外国語教育(4)

——視 察 の 栞——

HOSHIYAMA SABURO
星 山 三 郎

(1)

旅はひとり旅に限る．ことに海外教育視察の場合はそうである．一昨年わたくしがメキシコ・シティを訪れた時は VARIG（ブラジル航空）の団体旅行に加わってこれはひどいと思った．市街見学のコースには，メキシコ大学も博物館もちゃんと入っているのに，いざ行って見ると，チャプルテペック公園 (Bosque de Chapultepec) 越しに，森の間からはるか彼方にメキシコ大学の建物の頭の部分を見ただけ，博物館の前にバスが来るとガイドが「あれが有名な博物館です」と指をさすだけで素通りし，そして街中の郷土みやげ物店へと急ぐ．そのみやげ物店では1時間も費やし，その上さらに街の宝石店へ，「メキシコはオパールが世界的に有名で…」と店員といっしょになって説明に夢中である．ここでもなんと1時間を費やした．朝の9時から午後の1時まで4時間の市内見学とは名ばかり，正味はただの2時間で，私にとってみやげ物屋の2時間は心にもないものを眺めてすごすという次第であった．如何に少人数でも団体旅行はこりごりである．そこで私は午後2時昼食をすますと，午後4時に飛行機が出発するまでの僅かの時間を惜んで，ひとりタクシーをメキシコ大学のキャンパスへとばした．博物館へはもうダメ，時間が無い．わたくしはこれまでも，未知の土地を訪れる時は，先ず市内観光バスを利用し，先ずその土地の全体を掴み，それから後で，ゆっくり一人で，もっと見たいと思った所へ行くことにしているが，時間ぎりぎりである場合はお手あげである．やはり旅は，予定通りには行かない場合があるにしても，前もって，緻密な計画を立て，訪問先と打ち合わせて行くのがよい．

近頃海外渡航案内書という重宝なものが，たくさん出廻っていて，一般の観光旅行者には便利になったが，私たちのように，特殊な目的を持って何かを見て来ようとする場合にはほとんど役に立たない．見学先については，それぞれ自分で調べ，手続きをとっておくこと，それにはどうすればよいのか，何から手をつけたらよいのか．これについてよく相談を受けるので，自分の経験をもとにして具体的に書きとめてみることにした．

(2)

いちばんよいのは，自分の訪れようとする国々に，専門を同じくする友人を持っていることである．それには研究雑誌などについて，自分の興味ある問題について発表した論文を見つけたら，それにつき自分なりの意見を述べ，手紙を書き送ることである．一般に外国人は気軽に返事をくれる．文通と言っても日本の暑中見舞のような形式だけで，内容のないものはダメであるが，クリスマスカードだけは喜ばれる．

わたしの場合は1953年と1957年の2回ほどユネスコ主催の語学教育に関する国際会議に出席し，何れの場合も1か月あまり起居を共にしているうちに親しくなった人たちが，世界の各地に10名あまり居ったから，これらの人たちには毎年少なくともクリスマス・カードだけは送っていた．

長い年月の間には先方から来なくなることもあるが，健在である限り，留守をしていない限り返事はくれる．こうしてわたしは20年近く経っても文通を続けている人が，イギリス・ドイツ・フランス・アメリカに居て，この前の旅行には，見学先についていろいろと世話になった．

こちらの希望を知ると友人たちは訪問先とのアポイントメント，宿舎の交渉までしておいてくれる．自宅へ招いてくれ，時には同学の人々を食事に招き，紹介の労をとってくれる．友人知人には用事のある時だけでなく，少なくも年1回ぐらいは，わが国の斯界の事情を報告するとか，研究の抜刷などを送っておくと，心のつながりが切れないでよいと思う．

(3)

全然訪問先に知人のいない場合はどうするか．

(イ) わが国の海外駐在の大使館のアドレスを調べ（私は朝日年鑑で調べた），そして大使または文化担当官に手紙を出して，教えを乞うとよい．この場合，先方はこ

ちらの履歴や専門のことは知らないのだから，自己紹介を簡潔にし，自分の訪問の目的と日程を伝える．わたしがフィリッピンのマニラを訪れたのは1957年であったが，朝海大使に手紙でお願いしておいた．返事はなかったが，マニラ到着の夕には，わたしのホテルまで大使館員が出むいてくれ，訪問先の大学としてキリスト教大学をえらび，連絡をとっておいてくれた旨，知らせてくれた．

(ロ) ベルギーにはわたしは一人も知人がいなかったので，ブラッセルに到着してから大使館の所在を地図で調べた．そして例の「小便小僧」の前を通り，王宮近くの日本大使館を訪れて，受付の人に来意を告げた．しばらく待っていると甲斐君という若い文化担当官が現われ，わたしの話を聞くと，早速，同市内にある高校に電話で問い合わせてくれ，私に次のメモをくれた．

Lycèe Gitti de Gaumond, 20 rue de Ligne Brussels.

しかも大使館の人を一人つけて学校まで案内してくれた．その日はもう英語の授業はなかったが，女子の英語の先生が，自分の学校や，この国の外国語教育のようすを話してくれた．「英語の授業は1クラス20名ていど，30名を越す場合は，1クラスを2つに分けます」と言ったことばを思い出す．なおこの先生 Miss Walschot といったが，「この国の教科書が欲しいなら，14 Rue des Comediens にある DIDIER という出版社がいい．道順はこうです」と地図をかいてくれた．

(ハ) 大使館に行くのがおっくうなら，航空会社のデスクがよい．これは日航だけとは限らない．ドイツのルフト・ハンザは他の会社の乗客にも親切との評判が高い．わたしがロサンゼルスの University of Southern California を訪れた時は日航の社員が，南米サンパウロの中学校や，ペルーのリマにある日本人学校参観の際は，ブラジル航空，VARIG の職員がその労を取ってくれた．

(4)

ソ連の場合　わが国としきたりがちがうため，海外旅行の手続で面喰らうのはソ連である．

ソ連は訪問校や研究所との直接交渉は不可能である．すべて INTOURIST（国立外人専門観光局）を通さなければならない．わたしの場合，渡航前，東京の狸穴のソ連大使館へ行ったら，視察のことなど，ここでは受付けない，六本木にある INTOURIST の支所へ行けという．その支所をやっと探しあててそこへ行ったら，君のような視察旅行なら，ここでは受付けない．日本の航空代理店を通じて，モスコウの本部へ頼めという．その旨航空代理店に話をすると，早速モスコーの本部へ問い合わせてくれた．この本部はモスコウに行って分ったのであるが，「赤い広場」のすぐそばにあって，そのアドレスは次の通りであった．

Karl Marx Ave. 16, Moscow, U.S.S.R.

ソ連へは出発の2か月前から，詳しい日程や訪問希望校を具体的に調べ，航空会社から送ってもらっていた．その大体の項目は次の通りである．

訪問希望地：Moscow, Leningrad

訪問先：1. 外国語教員養成大学
2. Special School の授業参観
3. Kindergarten で英語を教えている学校の参観

この国への滞在期間中の旅費（ホテル；食事；タクシー代）は全額前払で，航空代理店に支払って，いよいよ行くときには，その金額納入証明書（Voucher）だけを持って入国する（1日に付20ドル）．

こうして2か月も先から頼んでいても，日本を出発するまでには，泊まるべきホテルの名も訪問する学校の名も，その訪問がO.K.であるかどうかも全然わからない．この先どうなるのか，始終不安がつきまとう．

時来りモスコウの北郊シェレメーチェヴォ空港につく．夜で外はまっ暗．この空港におり立つと INTOURIST の受付があって，ここで始めて市内で泊まるホテルの名がわかり，そのホテルの名を Voucher に書きこんでくれる．乗客の取扱いはすべて団体客が個人に優先する．同じ飛行機で来た団体の連中が皆バスでモスコウ市内へ運ばれているのに，わたし一人が，うす暗い空港に取り残された．あわれ，わたしがこの国へ来て，頼りにし，すがりついているのは INTOURIST という名前とホテル Minsk という名前だけとなった．

翌朝そのホテル・ミンスクに INTOURIST の出張所があることがわかった．ここでソ連滞在中の食券をもらい，見学の件について尋ねてみた．何月何日，航空代理店を通じて見学を申しこんであるがと聞くと，「書類は来ています，しかしその学校との交渉はこれからいたします」これからの交渉では学校の見学は間に合うわけはない．こちらは日本流に予定をぎっしり組んである．けんかをしても始まらない．その日は近くのクレムリン宮殿参観と腹を定めた．

翌日，訪問校3つのうち1つだけはよろしいということになった．訪問先にはガイドが必ず付く．運転手が行く先へ連れて行ってくれさえすれば，ガイドはいりませんと言ったが，つけてくれるという．幸いトムスク大学で英語とドイツ語をやって，学校の先生を2年ほど経験したといううら若い女性が来たので，有難いとは思った

が，このガイドさん，校長室，教室，生徒との対話の間，わたしのそばを少しも離れない．

その翌日,予定していた訪問校とホテルのINTOURISTの職員が，朝早くから交渉をし始めた．その学校に来てもよいと言われたのが午後の3時，この国のタクシーは，おいそれ！とは頼めない．教えられるままに，ひとりバスに乗って行く．大学到着はすでに放課後．この大学の名を Pedagogical Institute for Foreign Languages という．アドレスは，38 Metrostoryevskaya, Moscow.

Leningrad では世界大戦の折，ヒットラーが，この地占領の暁には祝賀パーティの会場に予定していたという豪壮を極めているホテル・アストリア，それがわたしの宿舎に指定された．このホテル内の INTOURIST の出張所でも，見学の交渉をしてもらったが，3つのうち，2つはダメだった．職員は30分おきぐらいに実に涙ぐましいほど熱心に電話で問い合わせてくれていたが，先方の大学では，学長が会議中，それが済んだら外出という．交渉の相手なしではどうにもならない．ただレニングラードには Herzen Pedagological Institute という教員養成大学があって，そこで Kindergartens の英語教育の指導に成積をあげているという資料を私は持っていたので，それを見せ，「わざわざ日本から来たんだから頼む」といったら，とに角，労をいとわず交渉を続けてくれた．Kindergartens では今，園児がいないので，来ても無駄ですのくりかえし．そこで私は質問8か条を書いて手渡し，それに対する回答だけは電話でもらうことができた．交渉にあたってくれた INTOURIST の中年の女子職員は，最後にわたしを慰めるようにこういった．

"You will miss nothing, because there are no children in the kindergarten today."

(5)

アメリカの場合　アメリカほど留学生や教育視察者にとって便宜を与えられる国は外にはない．ただ欲を言うと，こちらの希望以上にギッシリとつまったプランを立ててくれるので，それに従うと，ベルトコンベィアーに乗せられたように動かされ，次から次へと息をつく暇がない．

日本に居てアメリカの教育を視察しようと思う者はたいてい，先ず第一に赤坂見付の山王グランドビルの2階にあるフルブライト委員会事務局を訪れる．次が虎の門，文部省の近くにあるアメリカ大使館の人物交流部，すなわち，Educational Exchange Branch, American Embassy, Tokyo である．ここの現在の部長 (Chief) は Mr. Norris P. Smith であるが，わたくしが訪れた67年には Mr. Dietz であったが，同氏はわたくしの希望を聞くと直ちに Washington D.C. の国務省のデイヴィス女史へ連絡してくれた．

Miss Helen C. Davis, Program Officer, Voluntary Visitors Branch, Bureau of Educational and Cultural Affairs, Room 4804-A, Department of State

この人はテキパキとよく視察者のめんどうを見てくれる．

それから3か月後，わたくしがワシントンで予約してあったホテルへ着いて見ると，Miss Davis から次のような手紙が既についていた．

Dear Mr. Hoshiyama,

Welcome to Washington, D. C. I am enclosing a copy of the itinerary I have preplanned for you ...

わたくしは到着の翌朝 State Department Building に女史を訪ねると，「あなたの友人の Texas Univ. の Professor Andersson が日程を変更してでも，ぜひ Louisiana Foreign Language Teachers' Association の大会が Shreveport で行なわれるから，参加するように，さらに San Antonio で Thanksgiving Day の dinner に turkey を一緒に食べたいといっているから，予定を変更してはどうか」という．私は既にそこに行くまで5か所にホテルの予約がしてある．今となっては無理でしょうと言うと，「私にまかせなさい，ホテルの方は」と言ったかと思うと，その日のうちにアメリカの各地——シカゴ，ニュー・オーリエンズなど——のホテルへ電話をしてキャンセル，新たなる日程のもとにホテルを予約した．こうして作成された新たなプログラムに従って丸々1か月，わたしはアメリカの学校教育視察というベルトコンベィアーに乗せられてしまった．何しろ行く先々のホテルにその土地の奉仕機関，The International Center とか，Department of State Reception Center という所から，私の先廻りをして手紙が来ていて，開封して見ると，'your program' である．この program に従って，例えば New York City からバスで1時間の ETS (=Educational Testing Service) へ行くと，もう玄関で印刷物が渡される．その表紙には

"Your Visit to ETS, Princeton, N. J. とある．中味は

10：10——Overview of ETS——
Conference Room 5A
10：15——Mr. Alloway ; Examiner, Humanities
12：15——Lunch—Conference Room 2B/Mr. Alloway, Mr. Woodford

1：15——Mr. Woodford; Associate Examiner, Foreign Languages
2：15——Tour*——Mrs. Poore *(所内見学)
2：45——Review of Visit——Miss Ottobre
3：00——Transportation to Palmer Square (見送り)

国防語学校　(旧陸軍語学校) の場合. 陸軍語学校 (Army Language School) は1963年より国防語学校 (Defense Language Institute) と改称された. 国内各地に散在する陸海空軍の語学校を1つの統制下に置くことになったからである. この名前のつく学校が今アメリカに3つある. Washington, Texas と California の Monterey である. Washington にあるものを通常 DLIEC と呼び, Monterey にあるものを DLIWC と呼ぶ. EC は East Coast (Branch), W. C. は West Coast (Branch) の略で, 海外派遣国の数だけの外国語をやっている. Texas のは外国将兵に対する英語学校である.

さてこの学校は防衛庁関係者や外交官には見学を許しているが, 一般の人には見学を許さない. 私がこの学校を訪れたのは1967年の12月であったが, ここを参観するまでの手続は相当めんどうであった. その手続を示すと次のような手順になる. (1)→(2)→(3)→(4)→(5)

(1) 在日アメリカ大使館 (人物交流部)
(2) アメリカ国務省 (教育局渉外係)
(3) ワシントン国防語学校
(4) サンフランシスコ, 教育文化局
(5) (モンタレー) 国防語学校長 (陸軍大佐)

以上につき少々説明を加える.

(1) について, 在日米大使館人物交流部長に会い, 私の希望・目的を述べ, 英文履歴書, 目的, 日程を書類をもって提出.

(2) 以上の書類が前述の国務省の担当官 Miss Helen Davis の所へ行く.

(3) Miss Davis が DLIEC へ連絡(本人出頭に及ばず).

(4) 次にわたくしがサンフランシスコへつく前に, ホテルに下記の場所に出頭するようにとの通知が来ており, それには次のような言葉が書き添えられていた.

Through the Defense Language Institute in Washington, D. C., arrangements have been made for you to visit the Defense Language Institute (U. S. Army Language School) in Monterey, California on Friday, December 1.

Alan W. Barr, Program Officer
Reception Center
Department of State, U. S. A.
108 Federal Office Building
San Francisco, Calif. 94102

(5) 多くの手続を経てやっと目的地に到着した. そこでここでのありさまをやや委しく説明しよう. 指示に従って当日飛行機で Monterey へ行く. サンフランシスコから, カルフォニアの黄金海岸を南へ約120マイル, プロペラ機で30分. 空港には制服の軍人が車で出迎えに来ている. 学校まで約13分, 途中日本の湘南海岸を思わせる風景, ただ大平洋岸の波は荒い. 所々熱帯を思わせる真紅の花, ヤシの木, ジカランダ (?) の木が真黒な土の上に枝を伸ばしている. やがて松林に入ると, そこが国防語学校. 本館は2階造りの木造である. 2,000名の学生, 400名の教官がいるというが, 一体どこにいるのであろうか. 姿が見えない. 敷地の高台から大平洋が一望に見おろされる. 玄関に入るとやがて陸軍大佐の制服いかめしい校長さんに引見され, 握手がすむと, 星条旗の前に, 仁王様のような校長さんと風彩甚だあがらない筆者が, 相並んでの写真班による記念撮影. やがて椅子に腰をおろすと大佐殿が「さて本校訪問の目的は」と質問の第一矢が放たれる. 間もなく, 研究開発部長が部屋に呼ばれ, 今日一日星山の案内役をせよと命ぜられる.

「オリエンタル」という名で呼ばれる日本庭園

研究開発部長は Mr. Kihara という日本人二世の方．この語学校，25の外国語が開講されているが，5つの学部のうち，部長級3人までが日系人である．これは何を物語るのであろうか．

Mr. Munakata, Director : East & South Europe Division
Mr. Tekawa, 〃 : Far East Div.
Mr. Kihara, 〃 : Research & Development Div.
Mr. Albov, 〃 : East Slavic Div.
Mr. Banathy, 〃 : East Europe—Middle East Div.

語学教育の20世紀における奇跡といわれている DLI については，戦後，わが国に，ASTP とか又は Army Method として多くの専門誌，語学教育事典等にもかなりよく紹介されているので本稿では別にふれない．ただ一つ，これまでの本で紹介されていないのは Realien の教材，教具の一種として，従来掛図やフィルムで済ましていたものを，ここでは200平方米ぐらいの小型ながらも実物を造ったということである．キャンパス内に「オリエンタル」という名で呼んでいる日本庭園，スペイン公園，欧州公園を作ったのだ．1964年から，教官と学生が半年ぐらいづつかけて作りあげたいという．名づけて **3 Cultural Gardens**—the Oriental Garden, the Patio Ibero-Americano Garden and the Mediterranean Garden という．

これは風物の教材であると同時に，学生の憩いの場ともなる．

なお当日の私のために DLI が作成しておいてくれた日程は次の如きものであった．いかにもアメリカらしく，一分のすきまもむだもない．ソ連の場合と比べて何という差であろう．

DEPARTMENT OF THE ARMY
Headquarters, Defense Language Institute
West Coast Branch
Presidio of Monterey, California, 93940

ITINERARY

1. VISITOR : Professor Saburo Hoshiyama
2. ESCORT : Mr. Kihara

.....

5. SCHEDULE :

0845 hours——Arrival at Monterey Airport, pickup and transportation to Presidio of Monterey

TIME	ACTIVITY	ACTION
0915	Meet with Commandant	COL. LONG
0945	Academic Briefing	DR. BROOME
1015	Visit to Research & Development	MR. KIHARA
1145	Lunch	MR. KIHARA
1300	Visit Far East Division	MR. TEKAWA
1400	Visit with West and South Europe Division	MR. MUNAKATA
1500	Visit with Electronic Training Aids	MR. KAPELOWITZ
1530	Areas of Individual Interest	MR. KIHARA
1630	Estimated Time of Departure	

一通りこの語学校の見学がすんで帰り際，玄関先で写真班がB6大の大きさの写真を4葉，手渡してくれた．見ると今朝，星条旗を背景として学校長と私が並んで撮った写真である．至れり尽くせりであると感謝しつつ，写真の裏側を見ると「発表する場合は当局の許可が必要」なる旨 (Publication of this photograph is not authorized unless approved for release) 記されていたので，ふとその時，私は指紋のかわりに写真をとられたような気がした．

（東洋女子短期大学教授）

(p. 54よりつづき)
(p. 54よりつづき)

〔例 201〕 The terrible energy, shall we call it the vital force, in one night bird **took me** so **by surprise** that my angel of death left me.

（生きる力というか，一羽の夜鳥の持つ生きるエネルギーの凄まじさに，わしは度胆を抜かれた恰好だった．*Ibid.*）

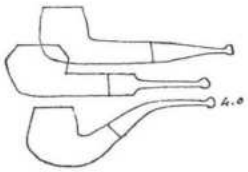
〔例 202〕 One thing was undeniable ; Officer Matsuki was shocked.

（そのとき松木ポリスが，度胆をぬかれたことだけは確かであった．『本日休診』）

全般的にみて，胸，腹などに関する慣用表現は，日本語と英語では発想が全く異なるように感じられる．日本語が胸・腹のことばを用いて，意図・判断をはじめ，心情的な比喩的な表現が数多くあるのに対して，英語ではそのような表現がほとんどみあたらない．

（お茶の水女子大学助教授）

SILENCE IS NOT ALWAY GOLDEN (2)



David Hale

IV. The Game-I.

If I suggest that conversation is like a kind of table-tennis I might cause more confusion than give help. But we might imagine that *the ball has to be kept moving* from one person to another, and that one of the most important things is *speed*. In these two respects at least we have some useful comparisons. The ball of conversation must be kept moving. If it drops and no one picks it up another of those fearful silences is likely to develop. Likewise with speed. Two native-speakers in more or less any language seem to go at it hammer-and-tongs, and the outsider wonders what on earth it can all be about. It is a principle of conversation that speed or pace counts; even the silence of deep thinking is at the same pace as the conversation of which it is a part!

These are two fundamental duties then. To get the subject moving, and to keep it moving if possible not in jerks and starts.

Then perhaps a more useful game analogy might be chess, except as far as speed is concerned! Chess has, I suppose, three main phases in each game: the Opening; the Middle-Game and the End-Game. I want to deal with conversation on this pattern too, and take each phase separately. On analysis it might be seen that all conversations, even the most simple should follow such a pattern.

1. The Opening.

The opening part of any talk is the *greeting*. By some form of salutation people establish verbal contact with each other. It is very important to keep it polite, as the tone of the conversation is set from the beginning.

Opening gambits usually take one of two or three typical subjects. As I mentioned just now the weather is perhaps the most common of all such topics. But, between people who know each other even slightly, health is almost as common. It might otherwise be something connected with a strange, interesting, amusing or shocking piece of news which everyone will have just heard about, but again that is normal only between people who have met before.

The 'salutation' which is the greeting between two people, then, might be any one of a wide variety, but let me simply suggest a few of the most common.

a) on formal occasions

On formal occasions, or when people of different social position such as student and professor meet, or in first meetings, the tone will be more formalised. It might be fair to say that in America informality is usually the key-note in most meetings, but in Britain some shreds of formality do still exist. It might therefore be easier to make a somewhat unfortunate impression on a Briton by adopting a casual tone when he might expect something a bit more formal. To Japanese people greetings are a fairly complex business involving social position and degrees of obligation, so they might get on better, and stand less chance of making a false impression, if they stick more to their own conventional approach.

On being introduced: "I'm very pleased

to meet you."

or "Delighted to meet you."

or "How do you do?"

To which replies might be very similar:

"Pleased to meet you."

or "Delighted."

or "How do you do?"

If it is an occasion on which it seems the proper thing to exchange names, a few points are necessary. You should state your name, slowly and clearly: "I'm Yoshio Watanabe, delighted to meet you." Since you are of course used to reeling off your name at Japanese speed and in the Japanese order of family-name followed by given-name you can easily outdistance your listener. He will not be used to either the sound of Japanese names, or the order. You might consider giving your name in western-style, given-name first, followed by family-name, enunciating the latter with particular care. The only occasion on which this can lead to trouble is if the foreigner has some knowledge of Japan and expects you to give your name in your traditional way. This can then develop into a marvellous opening subject as the two of you attempt to sort out which name is first! This helps to, as we say, 'break the ice.'

If further idntification seems necessary, most people might expect to have some idea of who and what you are. They might offer the information to you that they are on business, or travelling. Then you in turn would be expected to suggest what you are, or what line of business you are in:

"I'm a university student—in the Law Faculty."

or "I belong to the Society for the Extermination of Plastic Flowers."

or whatever it happens to be. Just a little information will do, no one expects to know your age or birth-place and an instant life-history would astonish the hardiest conversationalist

Then the opening gambit might develop. It might, as I say, be about the dear old exciting weather:

"Beautiful, day isn't it?"

or "Miserable wet weather we're having."

in which case a few exchanges will develop about the subject. That last year was better or worse, that this year it is very warm very early, or that Sendai is colder than Miami or Exeter in winter. In either case simply the ground for talk is being broken. Some subject on international comparisons, first of werther, then of other things might develop. Most people are simply preparing a comfortable little conversational platform on which to begin building when they start off with the weather.

But out of the opening exchanges, particularly if you are introduced by someone to someone else, some other topic might spring. You both have a common interest in Law or an extreme hatred for the plastic flower, for example. And you go on from there.

On the question of introduction, Britons are maybe more sensitive than others but it seems rather rude to most people if you happen to be with someone when you begin a conversation with someone else and you do not take the trouble of introducing your companion. Comfort is most important in conversation, and the awkwardness of not knowing who the third person is might play heavily on the sensibility of the conversing Briton. All remarks are made in conversation with all the listeners in mind, and if the third person happens to be President of the Plastic Flower Growing Society, some embarrassing comments might be let fly which will do no good at all!

b) on relatively informal occasions

When people have met once or maybe several times before, then greetings become very casual. Health is here a common topic:

"How are you today?"

or "How are you feeling?"

Usually simply use one of that range of fa. miliar salutations: "Hello!" or for Americans the ubiquitous "Hi!" or, depending on the particular relationship or situation:

"It's a long time, isn't it?"
or "How have you been lately?"
or "What happened about the elephant you were going to buy?"

or anything apposite! In the case of very good friends some familiar reference to an earlier shared occasion might serve to set the ball rolling:

"How's your hangover?"

People in a hurry will not stop for more than a few exchanges, but even then my game analogy holds good. Beginning, shortened or elided middle, and end. with more time to spend casual acquaintances might use several of the simpler topics, including both weather and health, and then separate. But this leads me to a kind of general principle on which conversation depends for its sequence and ease. I might call this something like the *'rule of question-answer.'*

If character A begins by informing character B who he is, and tells him that he is pleased to meet him, and character B does the same thing in reverse, we are led to a position in which we might wonder whose move in the game it is. Let me outline it extremely simply:

A Information and Question
B Answer (of information/identification)
A Next Question
B Answer (as above)

That might be a common pattern. But it might equally be the end of all conversation if B does not realise his obligation of keeping the ball moving by next asking his own question. A proper and easy fluid pattern might go something like this:

A Information and Question
B Answer (and perhaps Question)
A Question (or Answer and Question, depending on the above move)
B Answer and *Question*

Character B takes over the lead, passes back the ball and keeps the conversation moving. If he does not then an awkward situation can develop in which A either goes on asking questions and seems like an interrogating policeman, or, as I mentioned, he decides that for politeness' sake he cannot ask any more questions, so he limply makes his get-away bid. In fact the way in which B can suggest very plainly that he is not interested in having a conversation at all is by simply answering but never asking questions. Character A quickly gets the message and hastily retreats.

The same is true of the obligation during all conversation, among more than two people. Everyone in a sense has a duty of chipping-in from time to time. Some Japanese students have a marvellous ability to ignore this duty; they can sit through a silence which can embarrass the whiskers off an average 'gaijin' and *apparently* not even notice the impoliteness!

If I can return to my patten above, the signal that a longer conversation has begun is that both people begin to answer to and make questions about the subject that gets under way.

It is in these contexts that silence is certainly not golden! It was once suggested to me that Japanese people do not feel the need of talking when they meet someone; but I have reservations about believing this. Between good friends of course silence can be companionable, but between strangers or comparative strangers and general acquaintances it is only the cause, at least where foreigners are concerned, of embarrassment. Since the same person would be rude if he continued to talk and talk to fill up the silence, it becomes very clear that everyone must join in and take their share of the responsibility. This failing is certainly not only a Japanese one. How many dreary dinner parties have shuddered along relying on the verve of just one or two

people because this simple principle of conversational good manners was not understood? Enough said!

2. The Middle-Game.

Brief exchanges or casual ones either do without a middle-game or keep it very short. In longer or 'real' conversations, this middle-game is the heart of the matter, and is extendable at will. Here I want to deal with longer conversations. We come therefore to the question of subject or subjects. The opening exchanges have been devoted to breaking the ice, establishing some mutual ground, giving a little identification-material and generally settling into a talking-mood.

During the next stages some kind of subject is agreed on. It might be openly decided by one or the other of the speakers saying, "What do you think of the green-tea scandal?", thereby deliberately suggesting a topic for discussion. I might, in passing, remark that conversation can be serious while at the same time humourous. It does not mean that a man is frivolous just because his remarks have sometimes a flavour of the comic. Nothing is sometimes so deadly as the 'earnest' and 'straight-faced' conversation. Dickens was a great joker, but few people could have been more serious!

If the topic finds favour with everyone present it will flourish as the discussion grows. It is impolite to talk about baseball in front of a sweet and charming girl whose only interest in Ikebana. Though she, too, for the purposes of conversational good-manners should attempt to show some glimmer of interest in the Yomiuri Giants if the other speakers seem intent on talking about them. One of the functions of the opening exchanges is to range over a number of possible subjects in order to find one which is liked by everyone. All this happens rather instinctively, than according to any prescription.

When a subject seems to be under way, then remarks should be centred around it, questions related to it, comments made on it. Opinions should be given when called for, and a fund of accurate and up-to-date information is very useful. The latter is rather important. Many people seem to wish to talk about heart-transplantation or hoary polical problems yet they hardly realise they should have more than a few personal opinions if they intend to talk these subjects over. Accurate and plentiful information is central, in any case, to a life in a modern socity; so the good conversationalist should at least know something factual about the subject if he wants to fully participate in the discussion. Ideas should be related to what has just been said, or the general branch of the topic immediately under discussion. Here how many times have you felt people quietly censure so-and-so for always being irrelevant? Relevance, too, is an important part of conversational technique. Connect what you have to say to the theme of the argument, and always remember what has already been said. Repetition is just as dull as much irrelevance!

If someone is obviously distressed or just plain bored with the subject, or it generally seems to have gone on too long, then a change is clearly required. But do not plunge from one topic to another and then back again as this is the best way of losing your conversational partner. Life is complicated enough for most people without the added mystery of wondering what on earth so-and-so is really talking about!

When the change of subject occurs, usually by a kind of mutual instinct, someone is often heard to make a remark indicating that the scene is changing. The most obvious is of course:

"Well, to change the subject,..."

but "Oh! That reminds me of ..."

or "In that context what do you think of...?"

opening the field for new material, are also common. Once the topic has changed it is conversationally bad-mannered for some one to insist on continuing to talk about the drop-

ped subject after everyone else has silently agreed that a change was necessary. To go back often makes the pace of the conversation slow down, and people feel rather tired as their earlier feelings are dragged back before them again. This is one very good way to kill a table-conversation !

If, for some very special reason, you really do wish to once more refer to or take up the earlier topic, then a kind of apology is often used :

"To go back to what we were saying just now..."

or "Can I just say one more thing about hair-driers for men ?..."

If after your remark the company feels a new lease of life has been given to the subject they may take it up again, instinctively. But if it seems well and truly exhausted then they may, after some brief comment, go on with the subject which replaced it.

It is also possible to seem astonishingly rude if, while a subject is still going strong, you suddenly, and 'a propose' of apparently nothing, start a completely new one. People wonder what is eating you. When a subject begins to flag, then a new one is looked for. If you want to make a clean break, again some kind of apology is usually needed, the most common of which is, as I say, "Well, to change the subject...", a spoken acknowledgement that the channel of communication is being steered in another direction.

In all conversational exchanges beware of the deadly 'non-sequitur.' The remark that has nothing whatsoever to do with that which has just been made by another speaker, or from which there seems no way of continuing.

e.g. "I wonder where the birdies is ?"

non sequitur : "Green tea for supper is bad-mannered."

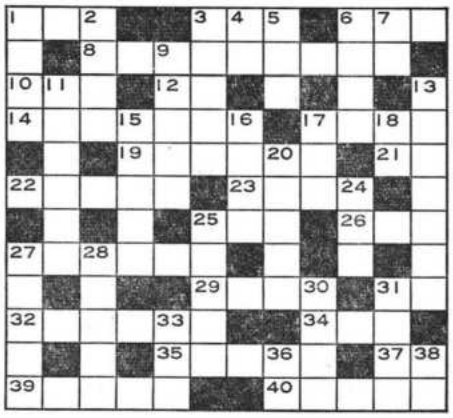
Naturally anything to do with human beings and their feelings or beliefs can become rather fiery. But it is, especially among strangers, very poor etiquette to become violently animated and emotional about some part of the subject. Also it is not polite to assert things too dogmatically or emphatically, particularly if you have reason to know that others will not agree with you. But I also need to make some comments on what kinds of topic are usually avoided, at least by British speakers, when they have an average conversation.

Generally speaking people do not ask questions inquiring more than superficially into personal details of other people's lives. Salary level, for example, or age, or questions concerned with intimate beliefs or close relationships such as that between man and wife. These points are felt to be the private property of their owner.

In fact it is fair to say that sometimes people can live next door to each other for the best part of a life-time and never get on to such topics as those I have mentioned. Religion can be a ticklish question, and it may be conversationally a good ploy to reserve all value comments on such topics until the 'colours' of all the people involved in the conversation are known. Politics can be very heated, and sometimes cause irreparable damage. What a man seems to hold sacred, deal with very carefully, and abandon altogether when things seem about to go badly. It is a good thing, too, not to believe that every 'gaijin' is an American, or rich, or a supporter of every one of his Government's policies. The fact of a foreigner's presence five or ten thousands of miles from his home might surely suggest that in some way he is not average. If he was average, he would be at home ! Take what you find, then, and expect to find only what you find ! A basic conversational ploy is also not to antagonise !

In this context it might be as well to note that any foreigner stopped in the street should not be treated simply as a guinea-pig for the student to experiment on, but some degree of personal interest should be maintained even if in the long run your motive is only to get experience. People are people, whether they are foreign or not ! In my experience some

CROSSWORD PUZZLE



ACROSS

1. Abbreviation for *catalog*
3. Abbreviation for *brother*
6. Not little
8. Time between noon and sunset
10. Paper showing streets or roads
12. Exclamation of surprise, wonder
14. Between afternoon and night
17. Each country has one
19. Not outside
21. Abbreviation for *North America*
22. Light meal
23. Past tense of *ride*
25. Everything
26. A policeman usually has one.
27. Closer 29. In addition
31. Abbreviation for *stone*
32. Come back
34. Abbreviation for *article*
35. Book of maps
37. Abbreviation for *opposite*
39. Contraction of *has not*
40. Stairs

Down

1. Opposite of *go*
2. You use one in a tape recorder.
3. You can eat them.
4. Abbreviation for *railroad*
5. Number
6. You can put flowers in one.
7. Preposition
9. To suppose; believe
11. Wide street
13. Opposite of *for*
15. Better than *nice* 16. Young lady
17. Past tense of *feed*
18. Indefinite article
20. Little girls often play with these.
24. A chicken usually lays one each day.
25. Contraction of *are not*
27. Opposite of *south* 28. Cars
30. Opposite of *west* 31. *Halt*
33. Larger than a mouse
36. Adverb or conjunction
38. Abbreviation for *Public School*

The solution to this puzzle may be found on page 37.

Japanese do not realise that under any other sun it is they who become the 'gaijin'!

Subject, then, can follow subject when each is duly exhausted. People mutually agree, by participating, when the subject seems a good one. Relevance and sequence are important; and some sense for what might be a danger-signal developed and the particular pit-fall avoided.

That is a simple outline of the rules of the game. And the Middle-Game is, as I say, really the heart of the whole game.

(Lecturer, Harrow College of Technology & Art)

(p. 67 よりつづき)

しすぎるのではないかという同氏の疑問についてである．評者には，アメリカ人の方がこの語を多用するように思われる．同氏は chicken war を挙げておられるが評者も滞米中に milk war, price war などこの種の表現をしばしばみききしてびっくりした記憶がある．近着のニューズウイーク誌も大西洋航空路の運賃切り下げ合戦を an air-fare war と題してとり上げている．むしろアメリカ英語的な用法が日本語化したのではないか，という印象が強いのだが，英語を母語とされる西山氏の示教を仰ぎたいところである．

ともあれ，本書が日本の英語関係者によってすでにかなり広く読まれていることを知り喜びにたえぬとともに，同氏の提示した問題点が英語教育の場にも十二分に導入されることを願って結びとしたい．（サイマル出版会刊，B6 版，pp. 228，¥580）　**(国際商科大学教授)**

『誤解と理解』

——日本人とアメリカ人——

西山　千著

KUNIHIRO MASAO
國弘正雄

距離の破壊，空間の圧縮が現代の最大の特長であることはいまさら言うまでもない．前者はイギリスの大歴史家トインビー博士の，後者はライシャワー教授の評語である．おそらく後世の歴史家は，この種の評語を用いて20世紀の後半を特色づけるであろう．

これをもたらしたのが科学技術の驚異的な進歩であることも自明の理である．英仏で共同開発された超音速ジェット，コンコルド機が就航すれば，東京・サンフランシスコの「距離」は3時間半に短縮されるという．いや，アポロ計画の父フォン・ブラウン博士によれば，宇宙バスが完成すれば，東京・ニューヨークを58分で結ぶことも決して不可能ではないという．『狂ったサル』の著者で今世紀最大の生化学者といわれるノーベル賞授賞者セント＝ジェルジ老博士ではないが，「人間にとって月への距離は，カタツムリにとっての一マイルより遙かに短かい」のである．そういえば，われわれがその成員の何人かを，37万キロかなたの天体に送り，地球が美しくもかぼそい存在であり，36万人の地球人にとって運命共同体の場であることを実感したのも，今世紀後半のことであった．

このような物理的な距離の破壊にもかかわらず，われわれ地球人を分かつ政治的経済的心理的へだたりは，少しも減っていない．終結をまじかに控えながら，いまだにとつおいつしているかにみえるベトナム戦争の帰趨はそのことをわれわれに悼みの思いとともに強制する．それのみではない．交通通信手段の発達とともに，お互いにふりそそぐメッセージはますます増大していくにちがいない．人間と情報の交流が激しさを加えていくことが予想されるからである．

ところがこれらのメッセージが正しく受けとられ理解され，地球人の一体感を強める方向に働くという保障ははたして存在するであろうか．むしろ誤解を増大し混迷を深める結果をひきおこすことに寄与する怖れが大きいといえるのではないか．たとえばバングラディシュの独立をめぐり，全く相対する情報メッセージが二つの中心から全世界に伝えられ，世界輿論を大きく2分したことは，われわれの記憶にまだ生々しい．であるとすれば量的に増大の一途を辿る各種各様のメッセージを誤解ではなく理解のシステムにかえていく作業は，全人類の運命を決するほどの重要性をもつものといえよう．情報工学のグローバル版といってもよい．

日本人の場合にはこの必要はとくに大きいといわねばならない．一つには日本が世界でも稀れな位に単一民族単一言語の均質社会であり，異質な分子をその版図内にもつことがないために，自分たちとはちがう人種や集団との間に意味のある人間関係を作り上げることに不馴れかつ不器用な面が強いからである．そして自分の行動様式や判断基準をそのままの形で異人種異民族に押しつける可能性も大きい．それは悪意や傲慢に発するものでは必ずしもなく，異質なものへの処女性がしからしむる面が多いとはいえ，相手方にとってはうとましくいらだたしいものであることは否めない．日本に対する風当りの増大は，このことを予想させる．

いま一つの理由は，他の地域に依存する度合いが日本の場合いちじるしく高いことに求められる．資源や市場など経済貿易面はいうに及ばず，日本のおかれている地政学的な位置や過去の歴史から，おそらく他に類をみないほどの高い依存度をわれわれはもたざるを得ない．これは日本にとっての冷厳きわまりない fact of life であり，逃れるすべとてない．

もしそうだとすれば，ふりかかるメッセージの増大とともに，それと知らずにかけている誤解のフィルターを，適当なアダプターの使用により理解のフィルターに切りかえるという作業は日本人の利益という狭い視点からみても緊急を要することは疑いなく，その成否にわれわれやわれわれの子弟の運命が大きくかかわってくるといえる．若い日本人に世界への目をみひらき，a small window on the outside world を開けてやる立場のわれわれ英語教育関係者の責任はかくして大きいといわねばならない．そして，国際コミュニケイターとして知られる西山千氏が，その近著を『誤解と理解』と名づけておられることの意義が，大きく浮かび上ってくるのであ

る.

同氏についてはもはや喋々する必要はないであろう. アポロ月着陸の同時通訳者として同氏の端正な風貌や特長のある語り口は日本全国に知れわたっているからである. のみならず同氏は英語教育や国際性の涵養にも少なからぬ熱意を示され, 各地の講演会やマスコミでも倦むところなく拮据の努力をつづけておられる. 評者もアポロをはじめとしてさまざまな折に同席する機会をもつものの一人だが, すでに還暦を迎えられたとは思えぬ同氏の若々しい精神と熱情, それにどのようなささやかな会合にもつとめて出席し, 後進のための誘掖をおしまれない教育者的な姿勢に対しては, つとに感服しておるところである. 察するに同氏は日本人が好きで好きでしかたなく, それだけに国際化時代にさしかかった日本のもつ弱点の数々に少なからぬ憂いを抱き, その故の義務感に鞭打たれる思いを感じておられるのであろう. そのすべてをささやかながら共有する評者が同氏を先達の一人として仰ぐのも, われながら理解がいくのである.

いま日本人が好きで好きで, と書いた. もとより西山氏もれっきとした日本人である. しかし同氏が生を享けたのはアメリカで, 若い時期の多くを彼地で過している. 日系米人というわけである. すでにアメリカ国籍は放棄されたようだが, この背景は同氏の英語をきっすいのアメリカ英語にしているばかりか, 同氏をして2つの母国, 2つの文化と言語の所有者たらしめた. しかも長い間にわたってアメリカ大使館にあり, 日本とアメリカとの対話のかけはしとしての努力を重ねてこられたことは, 日米間の接触の量的増大がいろいろな理由から誤解へとデフォルメしていく過程の犀利かつ同情に満ちた観察者たらしめた. 本書が単に机上の空論ではなく, 斬れば血の出るような挿話と現実性に富み, とかくささくれだちの目立つ最近の日米関係についての恰好のケース・スタディになっているのはそのためである. そしてわれわれ日本生まれの日本人よりも, むしろ同氏の方が120パーセントの日本人であるやにみえるのも, アメリカで生まれ育ったその背景によるところが少なくない, と想像される. 下手をすると同氏はわれわれ以上に日本のことが好きで, それだけに懸念するところも大きいのかも知れぬ. ふだんは温厚な同氏がときとしてみせる激越な反応はその結果であろうし, 本書が説得力に富むのも背後に並々ならぬ愛情と気がかりとが存するからだと思われる.

実は失礼きわまりないことながら, 西山氏の辿り来たった精神の遍歴に評者が日ごろからひそかに関心を寄せているのも, 文化人類学でいう acculturation (文化変容) のすぐれた個人的な事例と考えられるからである. 一個の良心的かつ人間的な魂が, 2つの巨大な文化と言語の anvil のもとでどのように形成され鋳られていったかを垣間みることは, 人間の記録として興味ぶかいのみならず, 文化や言語と人間とのかかわりについても多くを教えてくれるにちがいない.

それはともかく, 本書は日米関係のもっとも基本的なレベルにおける貴重な証言である. そこには条約とか協定とかいう外向的な記述はない. 外交文書や年表のもつ非人間的な冷たい厳密さはない. しかしそれらの外向的な騒々しさの底をたえず流れ, 究極的にはそれらを大きく左右する異文化異言語のぶつかりあいが, ごく人間的なタームで担々と語られている. そこにわれわれはホッとするばかりか, 語り口のウイットともあいまって知らず知らずのうちに多くの知見を身につけたことに嬉しい驚きを感じさせられるのである. その意味で本書は単に日米間のコミュニケイション云々という狭い範囲を越え, 異文化異言語間のかかわりとは具体的にどういうものであるかを教えてくれる. われわれの対外的なかかわりが単にアメリカ一国ではなく, アジア諸国をはじめとする各地域との間に拡大されていかねばならない現状を思うと, 本書の価値が大きいのはまさにこの点においてであることが納得されるのである.

以上, 評者は本書自体のこまかい解説よりも, 著者自身の背景と彼の説くところの位置づけについて私見を述べた. なまじっかな解説を行なって著者の論旨を損なうことを怖れたからであり, 本誌の読者が同著に自らつかれることを妨げてはならぬ, と考えたからである. 私はいち早く読者を同著に送り, お互いにとっての重要問題について物思う機会をおもちねがわねばならない. ただささいな点を2つさいごに述べることをお許しいただく.

一つは, 腹芸が日本以外にも存在するという点についてである. 評者はかねてからこの種の非言語的な意志疎通を日本にかなり独特なものとしてきたが, 西山氏は江藤淳氏らの説を引いてむしろそれを否定しておられる. この点には頗度その他について評者には異論もなくはないが, ついさきごろ John Toland の *The Rising Sun* を読んでいたところ, have to play **haragei** (the "stomach game") that is, to dissemble, to support the war while seeking peace. (p. 787) という近衛公に関する一節に出会ったことを報告しておく. そういえば dissemble という動詞は腹芸に近いかも知れない.

いま一つは, 戦争というどぎつい名詞を日本人が多用

(p. 65 へつづく)

『日本人と英米人』

——身ぶり・行動パターンの比較——

ジェイムズ・カーカップ；中野道雄共著

HASEGAWA KIYOSHI
長谷川 潔

本書は，ノン・バーバル・コミュニケーションと人間生活のかかわりをあつかった第一部と，人間の身ぶりの行動の型などを82項目にわけて日英の比較を試みた第二部とにわかれている．しぐさや身ぶりなど，いわゆる非言語コミュニケイションについての関心が低く，この種の本があまりないことを考えれば，先見性に富む本であると言えるだろう．

「何年か前，私（中野）がはじめて英語教師として教壇に立った頃，テキストの中に，"She made a warning gesture" という文があった．そのときは，『彼女は警告を発する意味のジェスチャーをした』と訳してすませてしまったが，これはどういう動作だろうかと疑問に思った．」

まえがきの冒頭で著者の一人が述べておられることばである．多くの英語の先生がたが，現場で同じような経験をされているにちがいない．著者と同じような疑問を持たれる英語教師に，英米人の身ぶり，しぐさについて具体的な解答を与えてくれるのが本書である．

「筆者（カーカップ）は，日本でタクシーに乗って，運転手から小さな石けんをおまけにもらったことがある．これは英米人にとってあまり快いプレゼントではない．なぜなら『あなたはくさい．これで洗いなさい』と言っているようにとれるからである」

「第三章の沈黙の言語」からの一節である．全体的にこんな調子で，多くの具体例が示されているので，誰でも，おしまいまで一気に楽しく読みとおすことができるだろう．

第二部では，第一部よりもさらに焦点がしぼられて，日本人と英米人の身ぶり，手ぶり，行動，習慣，考え方などが互いにどう違うか，電話，指切り，おじぎなど，82の項目にわかれて要領よく説明されている．53．笑いの項に示されている日本の中メーカAとアメリカの大メーカBの話など，外国とのとり引きが多い日本のビジネスマンに是非読んでもらいたい具体例である．

「本書は，『日本人と英米人』と銘打ちながら，米国人についての記述は手うすになっている」と，著者自身まえがきで述べておられるが，「第十一章 身ぶりとイディオム」のところでは，もう少しアメリカ人の見解を示していただきたかった．

この章には，人間の身体の部位・表情・動作・行動に関する慣用句の例文が全部で86も記載されていて，簡潔で明快な解説がつけ加えられている．著者の一人はイギリスの詩人ジェイムズ・カーカップ氏なのだから，英語に誤まりはないと思う．しかし，英国人にとっては慣用句なのかもしれないが，一般のアメリカ人には慣用句として通じないものがいくつかあるようだ．書評子はこれらの例文のすべてを，昭和女子大の John W. Cravens 氏と共に検討し，アメリカ人にとっては慣用的でない表現をいくつか選び出し，それらを更に ELEC に勤務する何人かの米人に確かめてみた．

My jaw dropped.⑰

「『あいた口がふさがらない』と同じ意味．また，He was catching flies も，やはり，ポカンと口をあけてあきれているようすのユーモラスの描写」という解説がついている．この He was cathing flies は，かなり特殊な表現ではなかろうか．少なくともアメリカ人には文字通り「はえをとっている」意味であり，an amazed look の意味にはとれないらしい．

He made a long nose.⑲

「これは実際のジェスチュアで親指を鼻先に当て，他の指をひろげて，相手をからかう動作」とあるが，アメリカ人はふつう He thumbed his nose という．この表現の方が動作をより具体的に示していると思われる．

Their ears were flapping in the wind.⑳

「これは，口論などをしていて，相手のことばを一言も聞きのがさじと『聞耳』をたてているという感じ」

動物の動作を人間のそれに当てて感じを出しているとのことだが，アメリカ人には人間が listen to ～ attentively の意味にはとれないそうだ．このセンテンスを読んで目に浮かぶのは，「象が耳をバタバタさせている感じ」らしい．

解説のところに示されているもう一つの例は，His ears priched up when he overheard the neighbours talking about him. からは，「聞き耳をたてている感じ」が連想できるとのことである．

Make a long arm.㊱

「食卓などで，『うんと手を伸ばして，好きなものをおとりなさい』と言うときの表現」Cravens 氏には，この表現の意味 "Reach for anythieg you like." がわからなかった．一般に英米では，日本人のように食卓などで手を伸ばしてものをとるのは不作法とされ，食卓で何かものをとりたい時には，Please pass (me) the salt. のように言うのではなかろうか．

He rubbed his chin.㊲

「『あごをさすった』は，日本語では得意の動作だが，英語では『ものを考えている』ようすの動作」

どちらかと言えば日本人にとって得意の動作かもしれないが，慣用句といわれるほど一般的な動作であろうか．またアメリカ人にとっても必ずしも He is thinking の意味の動作を示していないようだ．

We gave him the kick.

「『蹴ってやった』とは『くびにした』こと」

これはあくまでも英国人の用法で，アメリカ人には dismiss, または，discharge の意味にはならないらしい．なお，アメリカの用法として fire が一般的によく使われることは広く知られている．

Stretch your legs.㊴

「『足をのばしなさい』は，日本語では，『くつろいでください』だが，それはたたみの上に坐る様式であればこその話．英語では，『ぶらりと散歩していらっしゃい』の意味」．

これはアメリカ人にとっては，文字通り『足をのばしなさい』の意味にとれるそうだ．とにかく，大半の米人は "Take a walk" の意味にはとらないだろう．

He stepped on his toes.㊳

「『足を踏んづける』のだから，『怒らせる』の意味だろうとは見当がつく」これは例文自体に問題がある．この例文だけでは，"Did he step his own toes or other person's toes?" という疑問がわいてくる．また，アメリカ人には make a person angry (mad); offend a person の意味にとれないらしい．

I've got my feet under the table.㊲

「ガール・フレンドの家の食卓のことで，つまり，ガール・フレンドの家族から交際を認められて，食事の招待を受けるようになっているということ」と説明されている．

これは，前後の文脈がないと，そこまで意味を類推するのは無理ではなかろうか．いずれにせよ，アメリカ人にとっては「テーブルの下に足を入れてた」以外，特別の意味はないとのことである．

I felt my scrotum shrink.㊳

「男性が，自分があがっているかどうかをためす方法．洋の東西を問わない．Scrotum は，testicles をおさめる skin のこと．日本語では，testicles がちぢむと言うが，たしかに英語の方が論理的だと感心した人がいる．」

Cravens 氏によれば，大半のアメリカ人男性は日本人と全く同じように nervous な状態のことを，"I felt my balls shrink." と言うだろうとのこと．Scrotum は medical term であって，一般の米人が慣用句として使うことはまずないだろうと述べている．

He's drinking his father's piss.㊸

「日本語で『父親のすねをかじっている』という意味だが，これはどうも日本語の方が上等な表現だ」

これは，英国人にとっては，慣用句かもしれないが，かなり vulgar な表現なので，日本人は使わない方が無難．とにかく，アメリカ人には，"He lives (sponges) on his father." の意味にはとれないらしい．

以上，84もある多くの参考用例のうち，ごく一部分，英国人と米国人との間に見解のくいちがうもののみを参考までに述べてみた．英米人の慣用句としてのせるからには，彼等が日常の会話や文書に使用していて，広く一般に通用している表現でなければならないと思う．またこれらの表現は日本人が英語を使う場合によく注意しないで用いると，誤解をまねくこともあり得るだろう．

第十一章について忌憚のない意見をのべてしまったが，最初にも書いてあるとおり，非言語コミュニケィションに関する，わが国英語教育界の関心がうすい現状を考えると，きわめて貴重な本であることは断言できる．英語教師のみならず，英米人とかかわりの多いビジネスマン，海外旅行に出かけようとする人々など，できるだけ多くの日本人にぜひ読んでもらいたい本としておすすめしたい．（大修館書店刊，四六判/上製，pp. 169，¥760）

（お茶の水女子大学助教授）

新刊紹介

■*Studies in English Linguistics, No. 1*

太田　朗編

日本の英語学も国際的になったという評価が出はじめてからすでに久しい．ただしそれは主として海外における日本人言語学者の活躍や，海外の諸誌に掲載される日本人学者のすぐれた論文が増えて来たという事実を指して述べられたものであって，日本で発表された論文がそのままの形で海外における評価を受けるという例は，二，三の例外を除けばまだまだ少ないといえよう．もちろん，国内で発表される論文の多くが日本語で書かれるという故もあるけれども，それだけが原因ではない．日本英文学会発行の『英文学研究・英文号』に載った長谷川欣佑氏の "Transformations and Semantic Interpretation" を読んだ偶々来日中の高名な米国の言語学者の反応が「こういう重要な論文をキンスケはなぜ such an obscure journal に載せたんだろう？」であったのは象徴的である（長谷川氏のこの論文がほどなく *Linguistic Inquiry* Vol. III, No. 2 の巻頭を飾ったことは周知の通り）．『英文学研究・英文号』は海外の主要諸機関に寄贈されているはずであり，文学関係の人々の間ではあるいは相応の評価を得ているのかも知れないが，言語学関係者に関する限り，誌名の故もあってか，その存在は全くといってよいほど知られていないのである．

このような状況において，英語使用の英語学専門誌が登場し，かつ広く海外での circulations を企図していることは，まことに喜ばしい．所収の論文を個々に取り上げて論ずる紙幅のないのが残念であるけれども，いずれも高い水準を行く価値あるものと称せられてよいであろう．ただ，あまりにも obvious な誤植が目立つのは，debut号であるだけに，ことに惜しまれてならない．次号以降についての注文を述べるならば，創刊号の大部分を占める shorter articles, notes, discussions——言うでもなくそれ自身の価値を有するものであるが——に並んで Akira Ota: "Comparison of English and Japanese, with special reference to tense and aspects" 級の longer articles の比重も増してほしい．

ともあれ，この歓迎すべき企画が成功を収めるか否かは，そのまま日本における日本の英語学が世界に認知される時期がどれだけ早まるかを左右することになろう．全国の英語学徒がこの鵬雛を育成し，以て Language, Linguistic Inquiry に比肩しうる図南の翼を与えるべく最大の力を注ぐことを希求して止まない．

（朝日出版　B 5 判　105頁　¥800　年1～2回発行）

（東京都立大学助教授　今井邦彦）

■エレック選書『外国語を考える』

外山滋比古著

わが国で現在外国語といえば，英語と置きかえられるほど，英語は根強い実績をもっていて，新制高等学校の外国語科では制度の上では何も英語だけに限ったわけでなく，たとえばドイツ語やフランス語などを課してもいいのに，——実際にそういう学校が過去に何校か数えられたが——今ではおそらく99パーセントが英語となっている．さらに大学（教養課程）においても，戦前（の旧制高専）では‘第一外国語’はクラスによって英語だったり，ドイツ語だったり，フランス語であったのが，戦後は制度の上で‘第一外国語’は英語と決められてしまった．至るところ英語あり，のこの現状の上にアグラをかいて，泰平の夢を見ている英語教師がいないだろうか．これは表面的隆盛を示すだけで，実は空洞化され形骸に過ぎないと，先憂後楽の衷情から警鐘を鳴らしているのが，外山滋比古氏の近著『外国語を考える』である．

一般に英語教師が外的事情に支えられた優越感に安住して，みずからの天職に対する自信と誇りを欠いていはしないか．そのため世間から学校教育の英語は「役に立たない」とひとたび批判されると，たちまち浮足だって動揺する．「父兄は音楽や体操の教師に向かって，歌手やスポーツ選手になるあてのない子供に，どうしてこんな学科をやらせるのかと質問したりはしない．…そういう社会が，なぜ英語に限って，電話のかけられないような英語は役に立たないからやめてしまえ，と言い出すのだろうか．」(p. 31) 英語教師の側に，教室における英語教育の目的をしっかりつかんでいなかったスキがあったのは確かである．

すぐ役に立つ実用教育は英語以外の他のどの教課に要求されているだろうか．自動車教習所や街の算盤塾と学校の英語教育を混同する世間に

対し，著者は憤慨するとともに，これらの見当違いの批判に対し英語教師の中から堂々と自己の信念を主張して動じない態度が見られない腑甲斐なさに，著者はやきもきする．

すぐれた文化をもった外国語を教えることは精神的刺激を与え，人間形成に役立つ，というのが著者の持論である．外国語による異文化との接触効果の意義は大きく，これに対し実用語学のような次元の低いものは街の英語学校の類にまかせればよい，という．わが国の漢学やヨーロッパの学校における古典語はわれわれの祖先の知恵の産物と著者は考える．たしかに，漢文やラテン語は，実用一点張りの世の中から見れば時間つぶしと考えられるだろう．ただし，このような無用の用に意義を見出す人がいないわけではない．

> I defend (somewhat tepidly) a classical education for the very reason that so many people attack it. It is of small practical value in a world whose practial values are mostly wrong; it is "waste time" in a world whose time had better be wasted than spent in most of its present activities. (James Hilton, *To You, Mr, Chips*)

このように風声鶴唳にすぐ動揺する体質は，本職は英語教師（中・高・大学）でありながら，とかく表看板には‘英文学者’とか‘言語学者’とか‘英文法学者’を掲げたがり，ために英語教師のプロ性に撤しきれない点に求められはしまいか．これが評者の思い過しでなければ幸いである．

以上「役に立つ英語」のテーマが全巻各所に取り上げられ，一つの基調をなしている．このほか柔軟な著者の考えを示す，警抜で斬新な卓見が至るところに見られる．英語教師は marginal man（境界人）の性格がある，という分析は面白い．（「英語教師の回帰」）また「日本における英文学研究」では，「次から次へと新しいものを迎え入れるのに多忙である」わが国の英文学者——英語学者——の空しい性癖に警告をぶつけている．「読み」がどうもおろそかになっている傾向を概嘆するが（「語学の哲学」），これも心ある人々の共感をえるだろう．大学の一般教養の外国語の時間が2時間つづきになっているのは「笑止」であると直言する（「英語教育の課程について」）．

すべて英語教育を思う至情に発した建設的な提言であり，惰眠（？）をむさぼるノンキな英語界への警世の文字であり，何よりも英語教師に対する著者の深い愛情からほとばしり出た意見である．だから中には英語教師として耳に痛い苦言もあろう．また英語教師の弱点を剔抉して提示した文章もあろう．しかしそれらはすべてわだかまりなく，すなおに受け取ることができる．そして本巻を読みおえるころには，常ひごろ白墨にまみれている英語教師に，無限の啓発を与え，自信と勇気と，さらに誇りが全身にみなぎるのを自覚するだろう．これが著者の真に望む本書の目的だと思う．（ELEC出版部　B6判　200頁　¥580）

（武蔵大学教授　上野　景福）

■Obunsha Cassette LL *Practical English Conversation*

旺文社編

38課よりなる旧版を，練習方法に新しい工夫をこらし，更に全体構成を拡大して44課とし学習者の英語運用能力を拡げるよう改訂したものである．

旧版の練習では文型練習が中心になっていたのに対し，この改訂版では，慣用句練習，文型の積み重ね練習，学習者の実際の立場に則して答えられるような会話練習等が加えられて，単に機械的練習に堕するのを防ぐよう工夫されている．

1，2巻はテキスト．3巻（Brush Up）では，テキストの各課からポイントとなる文型が選び出されてあって，その文型練習と他の Exercises から成っている．4巻5巻は1，2巻の訳と解説である．

テープは，テキストの会話と練習の部分を含めて6本にまとめてあり，更に第3巻の Brush up を2本に納めて合計8本となっており，いずれもLLタイプのレコーダーでモデルを聞きながら学習者の録音再生ができる．

各課は，幾つかの課を除いては，類似した3つの場面での dialogue が提示され，そこで導入された言語項目は更に，別のRelated dialogues の中で提示され理解を深めるようになっている．次に続く練習は，① Idiom Drill, ②Expansion Drill, ③ Substitution Drill から成り，その後に Free Response の Conversation Drill がある．17課以後には Expansion Drill はついていない．

中学生も使えないことはないが，高校以上社会人対象の教材と見てよい．特に4，5巻の中にある文法と語法の説明は非常に適切で，一つの語を色々の角度から説明し，更に多くの例文で理解を助けるようになっている．また，Snap Shot の欄で米国英国の社会文化的な背景が要領よくまとめてあり，英語学習に必要な英語の背景的知識を充分提供している．（旺文社刊　テキスト　A5判全5巻/カセットテープ　全8巻　セット　価¥13,100）

（ELEC 研修部次長　山本庄三郎）

展望通信

▶ELEC 月例研究会

ELEC 会館を会場として，つぎの通り月例研究会が開催される．入場無料．

第63回　4月28日(土)　2：30〜4：30
講演「*A Grammar of Contemporary English* について」
ＥＬＥＣ研究開発部長　山家　保氏

第64回　5月26日(土)　2：30〜4：30
講演「平均的アメリカ人」
東京女子大学教授　猿谷　要氏

第65回　6月30日(土)　2：30〜4：30
講演「英語の必要性」
新日本製鉄常任顧問　山田忠義氏

▶ELEC 英語研修所に新設コース

ELEC 英語研修所に4月から新設コース「海外留学試験科」(Study Abroad Course) が生まれた．このコースは，米国留学英語検定試験 (TOEFL) 受験のための短期集中準備のためのもので，Listening Comprehension, Structure, Vocabulary, Reading Comprehension, Writing の5領域に関して，テスト・解説・練習・討議の順で TOEFL 受験準備の総仕上げをする．今年度は，次の6期に分かれて週2回 (火，木) 午前9時30分から午後2時まで実施される．月謝は各期とも27,500円．

第1期　4月24日(火)〜6月5日(火)
第2期　6月7日(木)〜7月19日(木)
第3期　9月18日(火)〜10月30日(火)
第4期　11月1日(木)〜12月18日(火)
第5期　1月17日(木)〜2月26日(火)
第6期　2月28日(木)〜4月11日(木)

▶ELEC 海外英語研修

米国ミシガン州立大学 English Language Center の英語セミナーにおける3週間の研修を中心に，シカゴ，ランシング，デトロイト，ワシントン，ニューヨーク，ロスアンゼルス，ホノルルの全行程を通じて，英語の力を伸ばすとともに，米国の社会的，文化的背景についての理解を深めることを目的とした研修旅行で，ELEC, JTB(日本交通公社)，ミシガン州立大学3者の共同計画で，第2回ミシガン州立大学英語研修旅行が実施される．期間は7月9日(月)〜8月7日(火)（一般成人および学生対象)，7月30日(月)〜8月28日(火)(教員対象)．旅行の詳細については (〒160) 東京都新宿区新宿3-26-18カワノビル内　日本交通公社海外旅行新宿支店　ELEC英語研修旅行係宛問い合わせられたい。

▶ELEC 英語教育研修会

従来，「ELEC 夏期英語研修会」の名称で実施されてきていた教員対象の研修会は，本年から「ELEC 英語教育研修会」(The ELEC English Seminar for Teachers) の名称となり，文部省後援のもとに，中学校および高等学校の英語科教員を対象に春期と夏期にわたってつぎの通り実施される。

A．ELEC 春期英語教育研修会（合宿制）
3月28日から4月3日まで東京都八王寺セミナーハウスにおいて開催．定員30名．

B．ELEC 夏期英語教育研修会（通学制）
7月30日から8月11日まで ELEC 英語研修所において開催．定員150名．

C．ELEC 夏期英語教育研修会（合宿制）
8月18日から27日まで東京都八王寺大学セミナーハウスにおいて開催．定員60名．

（上記AおよびBの研修会には米国 Weatherhead 財団からの援助金が当てられている）

▶ELEC 海外留学試験

海外留学希望者，TOEFL 受験者，海外出張者等を対象とする英語能力検定・診断・指導のための試験が5月11日（金）午後1時から ELEC 会館で実施される．受験者希望者は ELEC 宛に願書を請求されたい．

▶ELEC 新刊図書

金山宣夫著『国際感覚の構造』　¥ 650
平野敬一編『マザー・グース童謡集』　¥ 580
D. Hale 著『英文学研究入門』　¥ 580
ELEC 著『絵で学ぶ英会話2』　¥ 600
石川達朗編 *Speak and Study 2*　¥ 500
長谷川・速川共著『現代英語の表現演習』　¥ 380

英語展望 (ELEC Bulletin)　第41号
定価350円（送料85円）
昭和48年4月1日　発行
編集人　中島文雄
発行人　竹内俊一
印刷所　大日本印刷株式会社
東京都新宿区市谷加賀町1の22
電話 (269) 1111 (大代表)
発行所　ELEC（財団法人英語教育協議会）
東京都千代田区神田神保町3の8
電話 (265) 8911〜8916
振替・東京 11798

ELEC

THE ENGLISH LANGUAGE EDUCATION COUNCIL, INC